



「日本文化創出を考える」研究会
2021 年度報告書

公益財団法人国際高等研究所

「日本文化創出を考える」研究会

「日本文化創出を考える」研究会

2021 年度報告書

目次

はじめに：新型コロナウイルスによるパンデミックは人類に意識革命を迫る自然界のメッセージか？	1
第一章 Society1.0 から Society5.0 へ	5
1. 人類社会の構造変化をもたらした要因と文化・文明の盛衰	5
第二章 文化と文明	7
1. 文化と文明——敵か味方か	7
(ア) 文化の原動力	7
(イ) 文化とは何か、文明とは何か	9
(ウ) 文明が文化を抑圧することがある	10
2. 文化から文明へ	11
第三章 京都における文化	14
1. 京都は日本文化の中心	14
2. 日本史における文化都市としての京都	15
3. 京都の音楽文化の現状	16
4. 地域社会と学区における共助システム	18
第四章 現代の課題	20
1. 文明と地球温暖化	20
(ア) 文明の負の側面	20
(イ) 文明の暴走と文化の危機	22
(ウ) 植民地主義からの決別	23
(エ) 地球環境汚染への取組み	24
2. 仏教の抱える現代的課題と将来的展望	24

(ア) 仏教離れと寺院の経営の悪化	24
(イ) なぜお寺の数はコンビニよりも多いのか	25
(ウ) 葬式仏教とお墓	26
(エ) 寺院経営の現状と未来予測	26
(オ) 寺院経営の打開策	27
3. 伝統音楽の活性化	28
4. 社会的孤立と格差	29
第五章 スマートシティに必要な文化基盤	31
1. 社会関係資本と文化資本	31
2. スマートシティにおける文化および宗教	32
3. 芸術概念の拡大	34
4. 古都が文化を育てる	35
(ア) まちづくりにおける文化と文明	35
(イ) 開発か保存か——北垣国道の決断	36
(ウ) 京都の緑と街並みを守る	37
5. 危機に瀕した日本文化とその行く末	39
(ア) 戦後日本の経済成長の表と裏	39
(イ) 和式生活に育まれた「和魂」	41
6. Society5.0の構築に向けて京都の智慧をどう活かすか	43
あしがき	45
5年間の研究会を振り返って	45
付録 「文化首都としての京都を考える」	50

研究会開催経過 63

研究会メンバー 64

はじめに：新型コロナウイルスによるパンデミックは人類に意識革命を迫る自然界のメッセージか？

新型コロナウイルスによるパンデミックは、動き回るといふヒトの本質的な行動を制限し、世界の社会経済活動を長期にわたって停滞させた。ポジティブな側面としては、インターネットを活用した社会を爆発的に普及させ、一方で、人々に立ち止まって考える時間をも与えた。コロナパンデミックは、人類に意識改革を迫る自然界のメッセージであり、パンデミック終熄後における人間社会の在り方や価値観の大転換が始まりつつある。2021年度の研究会では、近未来社会(Society5.0)を見据え、それに先行するスマート社会の文化基盤について多面的に議論した。

2019年末に初症例が確認された新型コロナウイルスによる感染症(COVID-19)は、瞬く間にヒトからヒトへの感染が地理的広範囲に急速拡大し、人類の脅威となるレベルの世界規模大流行(パンデミック)を引き起こした。それから、ほぼ2年が経過した。その間、第1波から第6波まで感染者数のピークを経験する中、当初は未知のウイルスであった新型コロナウイルス(SARS-CoV-2)の素性はかなり明確になった(コラム記事「新型コロナウイルスの特性〈概要〉」参照)。

人は万物の霊長であり、他の動物、さらには他のすべての動物とは区別される存在であるとの考えが古くから定着してきた。しかし、少なくとも動き回るといふ行動様式に照らせば、ヒト(生物学上の標準和名)は字義どおり動物(animal)そのものである。それではなぜ動物は動き回るのか？それは、生きていくための食糧を得るためである。動物と対比される植物は、生存に必須のすべての化合物(生体物質)を自己完結的に合成可能である。太陽と水と地面さえあればよい。だから植物は地面に根を張って移動しなくても生きていけるのである。これに対して動物は、基本的に動き回って食糧を得なければならない。植物を直接食べるか、草食性の動物を食べなければ生きていけない。生存に係わる遺伝子のDNAを合成する原料も大元は植物から摂取している。

本質的に動き回る存在(動物)として進化したヒト(ヒト亜族に属する動物)が、現代人の祖先に当たる現生人類(学名:ホモ・サピエンス)として成立したのは、道具を自らつくり出した約200万年前に遡る。道具は「ヒトがつくり出したもの」であり、多様な定義の中でも、代表的な「文化」の事例とされている。このことから、「文化の創出」をもってヒト(現生人類)の歴史は始まったといえるだろう。ヒトが手中に収めた道具は自然界に存在する食糧を獲得する上で大いに役立ち、狩猟社会【Society 1.0】の形成に至った。

その後、現在に至るまでヒトは、血縁組織、地域、知識、信仰、生活様式、その他を共有する社会組織ごとに異なる多様な固有文化を創出・承継する一方、さらに異なる固有文化を包括するような原理・原則に支配される文明社会をも創出してきた。その代表例が農業技術の発見・発明であり、農業革命を果たしたヒトの大多数は農耕社会【Society 2.0】の住人となり、生存に欠かせない食糧を安定的に育成確保し保存するようになった。

近世以降、科学技術の発見・発明が加速され、産業革命を経て本格的な工業社会【Society 3.0】に移行した。この過程で、機械力を応用して発明した交通手段が著しく発達し、地球上で動き回るヒトの移動範囲は急拡大するとともに、移動に要する時間はどんどん短縮されるようになった。さらに、直近の半世紀間に発展したICT技術とインターネット基盤の整備は空間を隔てた異文化圏とのつながりをも可能にし、情報社会【Society 4.0】を迎えた。

その結果、主権国家間を隔てる国境を越えてヒトやモノ、情報が行き交うようになり、世界のボーダレス化が顕著になった。そして遂には、世界を一体的なシステムと捉え、特に経済活動面における利益を最優先するグローバリゼーションの思想が急激に拡大した。それらは取りも直さず、ヒトとヒトの接触頻度を爆発的に高める結果を招いた。今回の新型コロナウイルスによる世界規模のパンデミックは「つながり過ぎた世界」(マルクス・ガブリエル, 2021年)で起きた出来事で

あったかも知れない。

史上最年少の 29 歳でドイツのボン大学正教授に就任し、西洋哲学の伝統に根ざしつつ、新しい実在論を提唱して世界的に注目されている 1980 年生まれの哲学者マルクス・ガブリエルは、「COVID-19 の蔓延により、おそらく人類史上初めて、世界中で人間の行動の完全な同期が見られた。

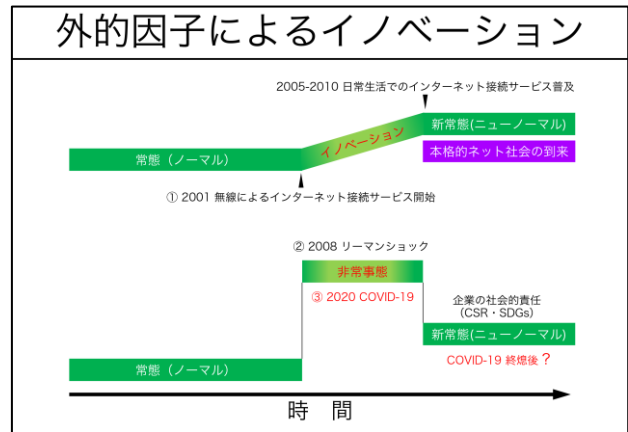
すべての人間が、微妙に違うやり方とはいえ、基本的に同じ行動をとったのです。全員が同時に感染の拡大を防ごうとしたわけです」と述べた

[つながり過ぎた世界の先に：2021 年 3 月、PHP 新書]。さらにガブリエルは「……いずれにしても、ウイルスは人間に行動を強制するものではありません。つまり人間のウイルスに対する反応は、人間性そのものが引き起こしているわけではないのです。ですから行動の同期化には、社会経済的、政治的、心理的な説明、そして最終的には哲学的な説明が必要だと思っています。多くの国と、夥しい数の人が、ウイルスの個人や社会全体へのリスクを過大評価している一方で、一部の人は過小評価しています」と指摘する。

昨年度（2020年度）の報告書において、「世界の社会経済活動がともにこれほど長期（1年間）にわたって同時停滞した結果、平時に比べてラジカル・イノベーション「創造的破壊」がはるかに加速される環境が発生したと想定される」と指摘した。それは、好むと好まざるとに拘わらず、新型コロナウイルスによるパンデミックという外的圧力要因が人間の意識や社会の構造に大きな変化を促し、それまでの常態（ノーマル）とパンデミックを経た後の新常态（ニューノーマル）はまったく異なった様相を呈するパラダイムシフトを引き起こすであろうという意味であった。

このような外的要因によるイノベーション、あるいは明確なパラダイムシフトを過去に2度経験している（図1）。

- ① 常態のノーマル社会でインターネットの利用は遅々として進まなかったが、2001年の無線によるインターネット接続サービスが開始されたのを契機として、2005～2010年に日常生活におけるインターネット接続が一気に拡大した。こうして本格的なインターネット社会が到来し、従来とは質的に異なる新常态（ニューノーマル）社会が出現した。



(図1) ニューノーマル社会の出現事例

- ② 米国発で証券化され世界中に販売されていたサブプライム住宅ローンが不良債権化した結果、投資銀行のリーマン・ブラザーズ・ホールディングスが2008年に経営破綻したことにより、連鎖反動的に世界規模の金融危機が発生した。日本でリーマン・ショックと呼ばれた出来事である。この金融危機を契機として、企業が経済活動を通じて利潤を追求するだけでなく、企業活動が社会に及ぼす影響について、倫理的観点から自発的に社会に対して責任を持つべきであるとするCSR（Corporate Social Responsibility）の考え方が一気に拡大し、新常态（ニューノーマル）社会が到来した。CSRは、企業コンプライアンスを進め、リスクマネジメントと内部統制を徹底する活動に発展し、さらに近年は、持続可能な開発のための国際的な開発目標SDGs（Sustainable Development Goals）と連携する動きが活発化している。

さて、今回の新型コロナウイルスによるパンデミックに対して、動き回るといふヒトの本質的な行動を各国各様に制限して対処した結果、インターネットを活用したオンラインミーティングやイベントが広汎かつ爆発的に普及した。そのポジティブな側面として、在宅ワークが日常的な勤務スタイルになり、従来は主流であった出張機会の激減がそれほど不便ではなくなった。また、従来なら出張経費を捻出できず、参加が困難であった人たちにオンライン国際会議への参加を促す契機となった。

この間、「日本文化創出を考える」研究会のスマートシティ EXPO 京都に向けた 2020 年度パネル討論会「世界に発信する日本の文化カーニューノーマル時代の基盤構築に向けてー」(2020 年 10 月 28 日 / けいはんなプラザ) をオンサイトとオンラインの併用で開催したが、2021 年度パネル討論会「文化首都としての京都を考えるー未来社会 Society5.0 に先行するスマートシティの文化基盤とはー」(2021 年 10 月 29 日 / 京都府公館) はオンラインのみの開催になった。従来なら参加機会のなかった不特定の府市民にもスマートシティ EXPO 京都に参加する機会をもたらす効果があった。

他方、パンデミックに伴う長期に亘る公的・私的な行動の制限は、多くの人々に立ち止まって考える時間を与える結果になったであろう。それは、音楽の楽譜における休止符の役割に似て、200 万年に及ぶ長いヒトの歴史に重要なエポックとなった可能性が大である。

上述のガブリエルは、「(パンデミックという) 危機に直面して、人類は倫理的に行動してきた」側面を強調し、「危機は倫理的進歩をもたらす」と指摘する。通常、一人ひとりの人間の行動には、それぞれ異なる理由があるが、それらは倫理的な理由ではない。「何かをする倫理的理由とは、人間であるが故に存在する理由のことです。……つまり倫理とは、文化圏によって異なることのない、普遍的な価値のことです。……倫理は人類を結びつけるものなのです。……我々のウイルスに対する(世界中で人間の行動の完全な同期が見られた) 反応は、ウイルスに人体が脅かされるのを防ぐという意味において、倫理的な働きだと思うのです」と述べている。さらに、「人類はウイルスから教訓を得ました。……自然はウイルスを通して我々にメッセージを送っている。我々も動物であり、自然の一部であるから、自然は私たちに訴えているのです。立ち止まらなければならない。私は、ウイルスは地球の免疫反応だと考えています。人間が複雑な生態系をどんどん破壊するので、生態系が反撃しているのです」と、新型コロナウイルスによるパンデミックの本質を洞察し、「2019 年以前の秩序は終焉した」と結論付けている。要するに、新型コロナウイルスによるパンデミックを、人類に意識革命を迫る自然界のメッセージと捉え、パンデミック終熄後における

人間社会の価値観を大転換すべきだというのである。

③ これらの多様な Good Practice を経て、新型コロナウイルスによるパンデミック終熄後の新常態(ニューノーマル)には、ICT 技術を高度に活用した実質的な情報社会(Society 4.0)、あるいはスマート社会が本格的に定着するのは確実であろう。また、2 回目の外的要因によるイノベーションあるいは明確なパラダイムシフトとして、近年に始まった持続可能な開発のための国際的な開発目標 SDGs (Sustainable Development Goals) が世界の共通認識に立った新たな国際標準として本格的に定着した社会の始まりになるかもしれない。いみじくも、新型コロナウイルスによるパンデミックの第 1 波が始まった 2020 年 3 月に関西文化学術研究都市(けいはんな学研都市)が「安寧で持続的な未来を創る」ために 5 年計画で開始した「スマートけいはんなプロジェクト」は、パンデミック終熄後の新常態(ニューノーマル)における情報社会(Society 4.0)と SDGs を併せたスマート社会の実質化に向けた先進的な実証実験の取組であり、その成果が注目される。

ここで概観したように、約 200 万年に亘る人類の歴史の過程で形成されてきた人間社会(Human Society)は、「文化」に始まり、さらに「文化」と「文明」が深く関わったいくつかの革命的な出来事が契機となって、不連続的に質を転換し、狩猟社会(Society 1.0)から情報社会(Society 4.0)に至っている。2021 年度の研究会では、最近話題になっている近未来社会(Society 5.0)を見据え、それに先行するスマート社会の文化基盤について多面的に議論した。

新型コロナウイルスの特性〈概要〉

コロナウイルスと名付けられているウイルスを電子顕微鏡下で観察すると、球形の外皮(エンベロープ)で覆われた直径 80~120nm (1nm[ナノメートル]は 1m の 10 億分の 1)ほどの粒子である。表面には複数の突起が突き出ているのが特徴である。外見の形態が王冠(crown)に似ていることから、ギリシャ語で王

冠を意味するコロナ (corona) の名前が付けられている。粒子表面にはスパイクタンパクと呼ばれる糖タンパクの突起が出ている。

風邪の病原体として、ヒトが広く日常的に感染する4種類の季節性インフルエンザウイルス (HCoV-229E・HCoV-OC43・HCoV-NL63・HCoV-HKU1) もヒトコロナウイルス (HCoV: Human Coronavirus) であり、風邪症状の10~15%、冬季の流行期には約35%の原因になっている。このため、ほとんどの幼児が6歳までに季節性インフルエンザに感染し、生涯に亘って何度も感染するが、一般に軽度の症状で治癒する。

インフルエンザウイルスは、スパイクタンパクの種類と数に応じて、A型、B型、C型の3種類に分類される。A型インフルエンザウイルスには、16種類のHA (ヘマグルチニン) と9種類のNA (ノイラミニダーゼ) のスパイクタンパクが突き出ており、ウイルスの感染力を支配する一方、これらの構造変化に伴って多様な変異株を発生しやすい。B型インフルエンザにもHAとHEが存在するが、それぞれ1種類しかなく、C型インフルエンザにはHEしかないため、多様性は乏しい。このような構造特性のため、感染の大流行をもたらすのは主にA型とB型であり、C型は軽い風邪症状のみである。

インフルエンザウイルスの球状粒子内部には、ウイルス (1本鎖RNAウイルス) の遺伝子となるRNA (リボ核酸) と膜タンパクが含まれている。インフルエンザウイルスは自力では増殖できないため、他の生物の細胞に感染してウイルスを細胞内に送り込み、細胞の生物機能を活用して遺伝子RNAのコピーを繰り返して増殖する。感染力が高いA型インフルエンザウイルスでは、スパイクタンパクのHAは感染相手の細胞に結合してウイルスを細胞内へ送り込み、NAは感染先の細胞とHAの結合を切断してウイルスを細胞外へ放出させる役割を担う。

インフルエンザウイルスの遺伝子RNAは超高速で増殖する (1個のウイルスは1日で100万個超に増える) 結果、コピーミスが発生しやすく、変異株発生 (ヒトの約1,000倍の確率で変異するといわれている) の原因になっている。このように、インフルエンザウイルスは常に増殖と変異を繰り返しつつ、延命を図っている。

すなわち、インフルエンザウイルスは生存を賭けて人類と戦っている構図が見て取れる。

インフルエンザウイルスは、一般に鳥や豚など、ヒト以外の生物の細胞に感染して生き延びている。しかし、時としてヒトに感染しやすい変異株が発生すると、ヒトからヒトへの感染が急速に拡大し、パンデミック (世界規模の大流行) に陥る場合がある。このような特性を獲得した新たな変異株を新型インフルエンザウイルスと呼んでいるのである。容易に想像できるように、ヒトへの感染が急速に拡大すれば、RNAの増殖頻度が急増し、パンデミックに陥るだけでなく、新たな変異株が次々と発生する。このため、一度感染しても、変異株に感染するリスクが高まり、終熄までに長時間を要するようになる。しかし、ほとんどのヒトが変異株を含む新型インフルエンザウイルスに感染 (集団免疫の獲得) してしまえば、通常の季節性インフルエンザになって棲息していくようになり、パンデミックは終熄する。

このように動物経由で変異株が発生し、重症性肺炎をもたらす新型インフルエンザウイルス (新型コロナウイルス) として、2003年に流行した重症急性呼吸症候群を引き起こす病原体のSARS コロナウイルス (SARS-CoV) や2012年に流行した中東呼吸器症候群を引き起こす病原体のMERS コロナウイルス (MERS-CoV) の2種類が知られていた。

長期に亘って今回のパンデミックをもたらした新型コロナウイルスは、SARS-CoVやMERS-CoVと同型のA型インフルエンザウイルスであり、RNA配列にコードされている遺伝情報はSARS-CoVと約80%、MERS-CoVと約50%、さらにコウモリのコロナウイルスとは約90%類似していることが解明された。この結果を参照し、WHO (世界保健機構) は今回の新型コロナウイルスをSARS-CoV-2 (SARS-CoVに酷似した2型の意味) と命名し、その症状を新型コロナ感染症 (COVID-19) と呼んでいる。また、SARS-CoV-2はA型インフルエンザの1種であることから、多様な変異株を発生する原因になっている。

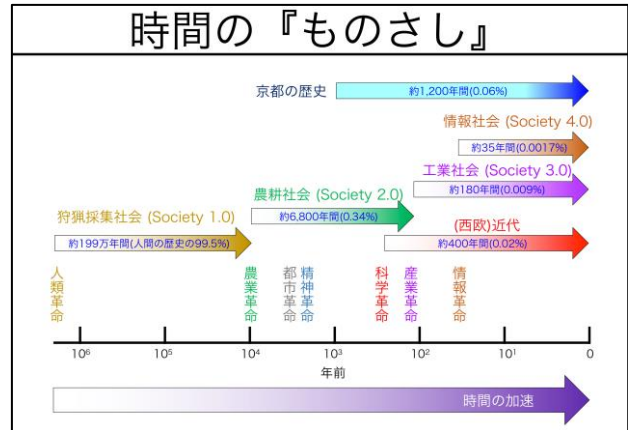
(西本 清一)

第一章 Society1.0 から Society5.0 へ

1. 人類社会の構造変化をもたらした要因と文化・文明の盛衰

「ものづくり」を通じて「文化」を創出することにより地球上に登場した人類(人類革命)は、大自然と親しみつつ、あるいは抗いつつ行動範囲を拡大し、居住地域ごとに特徴ある多様な「文化」形成してきた。他方で人類は、農業という普遍原理に基づく「ものづくり」の技術を発明(農業革命)し、すべての人類が共有可能な「文明」を創出した。人類の生存を支える食糧を安定的にもたらした農業は、都市の形成(都市革命)を促し、都市の中で抽象的な事象を考える余裕を得た人類は、人間の本質や自然の成り立ちを体系化することに成功した(精神革命)。その系譜は科学革命を経て産業革命につながった。そして近年、新たな普遍原理に基づく科学技術を基盤とする工業社会を形成し、さらに情報社会(情報革命)に移行した。この間、人類の歴史はどんどん加速し続け、近未来社会(Society 5.0)を迎えつつある。その是非は、本質的に動き回る動物であり賢い人間(ホモ・サピエンス)でもある人類の考え方に委ねられている。

45 億 4,000 万年前に始まった地球の歴史の中で人類の登場は、文化人類学の定義によれば、特に「文化を創出した」ところから始まる。すなわち、現代人の祖先に当たる現生人類が道具を自ら製作した約 200 万年前のことである(図2)。初めて道具を作り出した動物を「人類」としたわけである。この出来事は人類革命と位置づけられる。やがて狩猟社会(Society 1.0)が形成された。社会(Society)は人類の一つの枠組みであり、Society 1.0 は人間が登場してからの話になる。人類が初めて道具を使って森にある木の実だとかを取る採集、それから動物を仕留めてそれを食糧とする狩猟、これらを合わせて、生きていくための食糧の採取を狩猟と名付けた。この最初の狩猟社会(Society 1.0)は実に 199 万年間ほど続き、人間の歴史全体の 99.5%は狩猟採集をしていた。それくらい時間がかかっている。



(図2) 人類の歴史

人類が狩猟・採集生活から脱出するのは、1つの社会にとって大転換であるから、何か革命的なことが起こったわけである。それは農業の発明であった。それまでの狩猟社会(Society 1.0)では、食糧として採集対象となる植物は自然に生えているものだけだった。それらの植物を自分たちの都合に合わせて作る、その技術を発明したのである。それは農業革命であり、農耕社会(Society 2.0)への大転換点になった。

人類を含めて、あらゆる動物は植物がないと生きていけない。植物だけが生命活動に必須の化合物(複数の元素が結合して生じた化学物質)すべてを自己完結的に合成することができる。植物は、水と炭酸ガスと太陽光だけで多数のブドウ糖が結合した炭水化物の1種である「でんぷん」を合成している。この化学反応を炭酸同化作用とよぶ。植物は炭素源としてのでんぷんを合成するだけではなく、土壌中から無機物質の硝酸イオンを取り込んで窒素源とし、炭素源と合わせてアミノ酸を合成する能力も備えている。各種アミノ酸が結合して高分子になったものがタンパク質である。さらに、アミノ酸から遺伝を司るDNAの原料になる核酸塩基も合成できる。でんぷんを構成する糖分は、微生物の働きで発酵するとアルコールになる。そういったものを全部自分で作ることができるのは植物だけである。動物にはそれができない。炭酸同化作用によって自分で「でんぷん」を作る

なんてことは一切できない。だから、植物を摂らなければ生きていけない、または植物を食べた動物を摂らないと生きていけない。それらを手に入れるために、あちこち動き回るから動物という。植物は、じっと大地に根を張って動かず、生命活動に必須の化合物すべてを合成することができる自己完結的なシステムといえる。

人類は農耕という農業の技術を発明した結果、自然に生えていた植物を、自分たちの食糧源として栽培するようになった。狩猟も同じで、野に出て、そこで遭遇した動物を獲って食べていたところから、それらを飼い慣らして食べるようになる。そういう新しい食糧の獲得技術を確立したのが、第2番目の革命である農業革命であり、農耕社会（Society 2.0）が生まれた。農業は、とにかく時間さえ経てば、もちろん天候に左右されるが、一定の収穫があって、そのうえ穀物というのは保存がきく。採集した穀物は次の年に新たに収穫するまでの期間、保存してそれを食べ続けることができる。これが全人類の歴史の中の0.3~4%、人類はまだそれくらいの短い期間しか農業をしていない。

さらに、農業技術は普遍性を備えていたため、先ず四大文明につながり、その後、世界各地に広まった。最初の人間の成り立ちには「文化」があり、そして「文明」社会が成立したが、地域によってタイムラグがあるため、そのタイムラグの中で成熟した社会は、それぞれ在り様も異なり、多様な文化圏が生まれた。

この農耕社会の間に、ギリシャ・ローマという都市国家が誕生する。都市革命が起こったのである。都市国家の成立によって、農業で得た余剰の食糧により、労働をせずに精神活動だけで社会を構成するような職域が生まれた。これを契機として精神革命が起こり、ようやく現代の我々が実感するところの抽象的な概念について思いを巡らすようになった。基本的に我々「ここで生活している人間」というのは、「どこから来たのか？」そして「どこへ行くのか？」という、これは宗教や哲学の命題について、人類は考えだした。

実は京都も、西欧からかなり遅れはしたが、7世紀に日本で最初の本格的な都市を形成した。そして、遅れただけのことはあって、その間に発展したいろいろな人間の知識を外から取り込むことができたので、ギリシャ・ローマとは違った文化

価値を生み出した。そういう観点から、もちろんモノも蓄積してきたが、精神性のような無形のモノ、単にモノをつくるだけではないという、そういうものを京都はたくさん蓄積してきた。

精神革命を基盤として、西欧ルネサンス期の17世紀に科学革命が起こり、人類の歴史の中で重要なエポックと位置づけられている産業革命につながった。産業革命が起こった結果、工業社会（Society 3.0）が生まれた。そして現在に至るまで、180年間ほど続いている。

そしてつい最近、情報革命を経て情報社会（Society 4.0）へと発展し、今日に至っている。現在は、大量に製品を製造する工業生産のほか、多様な分野で情報技術を使っているが、必ずしも欲しいときに欲しい情報がポンと出て来るわけではない。欲しい情報は自分で探さなければならない。だから、情報検索の上手な人々は、情報社会（Society 4.0）の中で巧く生きていける。

この間、人類の歴史は、情報通信技術（ICT）が急速に高度化し、産業やサービス分野への応用展開が活発化した。これから先の仮想空間と現実空間を高度に融合させた近未来社会（Society 5.0）には、恐らく人類の手を離れて、ICTを基盤とする人工知能（AI）が主役になる社会が到来するのは間違いない。近未来社会（Society 5.0）では、人類の意図を先取りして、欲しい情報がほとんど瞬時に押し寄せて来る。そんな社会が構想されている。しかしながら、そんな社会になっても、人間とは何なのかということを知っていないと、何もできなくなる。その社会で生きるのは人類であり、人類は物理的利便性が高まれば幸せになるというものではない。

（図2）に示したように、時間の物差しで眺めると、人間の歴史はどんどん加速していることがわかる。この加速してゆくという事実をあからさまに、初めて言ったのは、イノベーションを発見したシュンペーターである。彼は人間の社会は加速している、その加速の原動力はまさにイノベーションなのである、という歴史的事実を明らかにした。これを言い換えると、“科学技術の進展は人間生活の時間を加速する”ということである。その是非は、動き回る動物であり賢い人間（ホモ・サピエンス）でもある人類の考え方に委ねられている。

（西本 清一）

第二章 文化と文明

1. 文化と文明——敵か味方か

(ア) 文化の原動力

文化はひと手間余分にかかる動作を必要とする。美しい仕草、美しい所作、美しい形を求めて生きることから文化が生まれる。今日の日本の文化衰退の原因は、かつて美德とされていた礼儀作法、礼節の喪失にある。

昭和 20 年、日本は太平洋戦争に敗れた。明治維新以来の「文明開化」に強い疑念を抱いていた作家永井荷風は、日本は敗けて当然だ、敗けたほうがよかった、これで行きすぎた文明化を止められる、と思った。ところが、戦争に敗けても日本は荷風の危惧する文明化にブレーキをかけることはなかった。いや、文明化はさらに加速し、荷風が願ったような文化回帰、文化振興の動きはいっかな起きなかった。後述するように文明と文化はまったくの別物で、両立できることも多いが、しかし対立することもあり、荷風は両者を対立項として捉えたし、荷風にとって大事だったのは文化のほうだった。

荷風が文化と文明を対立項と捉えたのは、おそらく明治維新以降の日本政府が両者を対立的に見ていたからである。明治政府にとっても、戦後の日本政府にとっても重要だったのは明らかに文明のほうで、政府は文化を軽視した。明治政府は「文明開化」のために日本の伝統的文化を無用の長物として捨て置き、戦後の日本政府はアメリカの前に平伏し、アメリカ流の物質文明にのみこまれていくのを良しとし、伝統文化を軽視した。

戦後、日本人の生活もアメリカ化した。衣装は和装から洋装に、住まいは和室から洋室になり、畳の上で正座して挨拶することも、茶碗を愛でながら茶をすすすることもなくなった。そのため日本古来の礼節や作法が失われた。かつては電車のなかで他人の隣に座るときには軽く会釈するものだったが、それもなくなった。戦後日本といってもまだ昭和の時代には礼儀作法はある程度残っていたが、平成・令和と進むとともに、かつて日本人の美德とされていた礼儀作法はすっかり廃

れてしまった。生活のアメリカ化の流れのなかで、人々は礼節を忘れた。アメリカ化が文明であるとするれば、礼節の尊重は文化である。今日の日本の文化衰退の原因はおそらく礼節の喪失にある。

かつて欧米に住んだことのある日本人のなかには、欧米人が自宅に帰ると、土足のまま室内に入り、極端な場合には靴をはいたままベッドの上に倒れこむのを目にしたことがあるだろう。それを見た日本人は、それがひどく不潔で汚く野蛮なことと感じたにちがいない。逆に帰宅して、玄関の土間で靴を脱ぎ、靴を揃えるさまはいかにも清潔で奥ゆかしい。靴を脱ぎ、靴を揃えるのは面倒くさいが、それが礼節であり、文化である。文化はひと手間余分にかかる動作を必要とする。

家に入るとき靴を脱がない欧米では、内と外の区別が明確ではない。他方、日本では靴を脱ぐことによって内と外が峻別される。垣根、門、玄関は日本にも欧米にもあるが、日本の玄関には上がりかまち框があり、そこで靴を脱ぐべきことを教えられる。日本のように靴を脱いだほうが清潔だと思い、その風習を取り入れている家庭は現代の欧米にもあるが、しかしそこには上がり框がなく、どこで靴を脱いだらいいのか、よくわからない。上がり框があることによって、下が穢れ、上が清浄であることが示される。家のなかには神棚があり、神様が住んでいる。上がり框は浄と穢のみならず、聖と俗の境界をなしている。かつて草履の使われていた時代には、人々は上がり框で足を洗い清めた。そして草履が靴に代ってからも、靴を脱ぐことは身を清め、清浄にして神聖な場所に入ることを意味していた。「清め」には清浄化と神聖化という二つの意味がこめられている。日本人は靴を脱ぐことによって家のなかの清らかな神聖さを保つ。そして清らかな神聖さに対する敬意が文化を生む。神聖と清潔を重視する日本文化の基盤のひとつは、靴を脱ぐという日本人の風習にある。

日本では、靴は脱ぐだけでなく、きれいに揃えなければならない。面倒かもしれないが、きれい

に揃えたほうが美しい。靴をきれいに揃えることの意味は文明の論理では理解できない。合理化、効率化を尊ぶ文明ではできるだけ面倒でないほうがいいからである。靴をきれいに揃えることは、日本では作法と呼ばれる。作法は美しい仕草、美しい所作、美しい形を達成しようとする。そして美しい形を求める努力の果てに文化が生まれる。文化の原動力はじつは作法にあるのである。

日本でジャンプ傘が売り出されたのはもう 50 年以上も前のことである。ジャンプ傘に飛びついた人の数は少なく、当初、ジャンプ傘は思うほど売れなかった。便利なはずのこの傘に違和感を覚える人は少なくなかった。ある日、言語学者の故鈴木孝夫氏と雑談していたとき、そのことが話題になった。彼は、普通の傘をさすほうがひと手間余分に動作がかかるが、手間がかかる分、ジャンプ傘をさすよりも、文化的なのだと指摘した。じつに的を射た発言だと思った。普通の傘をさすときには、自分の体の斜め下に傘を構え、①傘の下ハジキを外す、②下ろくろをシャフトに沿って上ハジキまで上げる、③上ハジキをカチッとかわせて傘を開くという三つの動作が必要である。ところがジャンプ傘を開くときには、ボタンを押すというたった一回の動作で済む。だからジャンプ傘は便利だとされるのだが、しかし便利だからいいというものではない。普通の傘で三つの動作をするとき、人は知らず知らずのうちにこれがいいと思われるポーズをつくる。美しい仕草、美しい形をつくる。それが作法であり、文化なのだ、と鈴木氏は指摘した。文明は便利なものを提供してくれる。他方、文化は面倒を楽しむのである。

面倒な手間をかけ、美しい仕草を追求しているものの代表例に茶道がある。茶道で抹茶をいただくときには、がぶがぶ飲んだらダメで、①茶碗を膝の前に置く、②お辞儀して挨拶する、③茶碗を左手にのせ、右手を添えて押しいただき、④右手で手前に 2 度まわし、⑤味わいながらいただき、

⑥音を立てて、最後のひとくちを吸いきるという面倒な動作が必要である。これらの仕草のすべてに気品や美しさが漂っていなければならない。がぶがぶ飲むよりもはるかに面倒である。がぶがぶ飲むのと味は変わらないではないかという人もいるが、そうではない。これらの手間をかけることによって客人はその茶室の静けさを味わい、亭主と無言の挨拶を交わす。手間をかけたほうが、抹茶ははるかに美味しくなる。

茶道は日本文化を代表するもののひとつである。茶道を学ぶには金がかかる。そのため文化を習得するには金がかかると思われている。文化でさえ金で買えると思っている人もいる。だが、文化の基盤をなすのは作法であり、これを家庭で学ぶのに金がかからない。美しい作法、美しい所作はすでに文化である。能楽師、歌舞伎役者の日常生活を見たことがあるだろうか。彼らの所作は舞台の上だけでなく、日常生活でも美しい。日常生活の美しい所作を発展させながら、彼らは文化や芸術を生み出す。所作の美しい日常生活は高度文化の土壌をなす。美しい所作のないところにすぐれた文化は生まれないのである。

かつての日本人は、客人が来ると、玄関の間で正座してお辞儀をし、出迎えるのが常だった。和風建築ではそうするのが当たり前で、そこに美しい所作が自ずから生まれた。昔の日本人は行儀がよく、行儀のよさが文化とほぼ同義語だった。だが、戦後の日本人の生活は洋式化し、それとともに行儀のよさ、美しい所作は失われてしまった。マンションの上がり框は低く、正座して客人を出迎えることはない。

正座やお辞儀には他者に対する敬意が感じられる。他方、今日、電車に乗っている多くの人はスマホに興じ、他者に心配りすることはない。そういう生活をしてはたして繊細な文化が生まれるであろうか。

(イ) 文化とは何か、文明とは何か

文明は快適な生活空間を提供してくれるが、文明の享受には出費が必要である。文明は消費されるものであり、文化は生産するものである。速さを追求する乗り物において、文明と文化の対立は際立つ。文明は便利を追求し、生活を快適にしてくれる。他方、文化はむしろ不便を楽しむ。美しい時間がゆっくりと流れ、人の心が豊かになるのが文化である。

美しい作法、美しい所作は、私たち一人ひとりが日々努めるもの、文化は一人ひとりの個人が日々生み出すものである。ある人のある美しい所作には、それを行った人の名前と行われた日付が付着している。他方、文明は多くの人々に与えられ、そこには名前も日付も記されない。エレベータは無名の私たちを階上まで連れていってくれる。新幹線は京都にいる人を短時間で東京まで運んでくれる。エアコンをつければ、部屋の温度を快適に保ってくれる。そこに努力はいらない。金さえ払えば、誰もが文明の恩恵に浴することができる。文明の享受はつねに受け身であり、特定の名前をもった個人ではなく、無名の多くの人々が文明を享受することができる。

文明は快適な空間を提供する。文明は快適な器のようなものである。その器のなかで人々は快適さを享受する。享受するには金の出費が必要で、そのため文明を享受する行為は消費と呼ばれる。

文明が消費されるとすれば、文化は生産する。金を払い、快適な器を手に入れたからといって、すぐ幸せになれるものではない。器のなかでいかに花を咲かすかは、各人に委ねられる。文明は花器であり、文化はそこに活かされる花である。花は自ら活けなければならぬように、美しい所作、上品な立ち居振る舞いは、自ら努めて生み出さなければならぬ。

音楽のコンサート会場は文明の装置である。他方、この文明の器のなかにいる演奏家と聴衆は文化の担い手である。コンサート会場でピアノを弾く演奏者が文化の創造者であることは言うをまたないが、聴衆もまた自らの心のなかに花を活ける。聴衆は、コンサート会場で単に受け身で座っているだけでは音楽に心を揺さぶられたり、感動したりすることができない。感動するには、聴衆自ら音楽のなかに飛び込み、音楽とともに歩み、

走り、立ち止まり、涙して悲しみ、晴れ晴れとした喜びを感じなければならない。そこに聴衆の積極的な行為がある。音楽とともにたどる聴衆の旅路がある。そしてそれが、コンサート会場という文明の花器のなかで聴衆が生み出す花である。

文明の生活は他から与えられるもの、金で買われるものである。冬の寒い日にエアコンをつけ、暖かい室内で過ごすのは文明の生活である。しかしその快適な器のなかでピアノを弾いたり小説を読んだりすれば、花が咲き文化が生まれる。努めて何事かをなさないかぎり、文化は生まれない。

だが、文明と文化が対立的になることもある。特に速度がからむと、対立は際立つ。

乗鞍スカイラインは北アルプスの乗鞍岳山頂近くまで行ける自動車道路で、人気が高い。都会着とハイヒールでここを訪れ、槍ヶ岳や穂高連峰を眺めることもできる。だが、自動車ですぐ訪れるのを嫌い、わざわざ徒歩で登る人もいる。標高 3026m の乗鞍岳はなかなか峻険な山で、登るにはかなりの装備がいる。だが、苦勞して登ることによって、自動車ですぐ運ばれるよりもはるかに大きな喜びを感じることができる。自動車に乗鞍スカイラインに行くのは文明だが、苦勞して乗鞍岳を登るのは文化である。

風呂もそうである。ガス風呂ではスイッチを押すだけで、努力せずに暖かい風呂が与えられる。それは文明の生活である。ところがあまりにも簡単に風呂が沸くので、そのことに満足できず、あえて薪で風呂を沸かそうとする人もいる。戦後、一般に水道とガス風呂が普及してからも、私の祖父はあえてそれを使わず、井戸で水を汲み、薪で風呂を焚いていた。祖父と一緒に焚いた五右衛門風呂に入っていたとき、なぜガス風呂を使わないのか、祖父に尋ねたことがある。私が小学校の低学年の頃のことだ。祖父は、水が簡単に出てきたり風呂が簡単に湧いたりするよりも、こうして苦勞して得られることのほうがいいのだ、と答えた。祖父の言葉の意味がわからず、問い返すと、祖父は同じ言葉をゆっくりと繰り返す、そのうちわかるようになるよと言って、私の手を握った。祖父は、文明化の動きに抗する明治生まれの古いタイプの日本人だった。

祖父に教え込まれたおかげで、私は薪で風呂を沸かすことの喜びを多少なりとも知っている。薪

で風呂を沸かすにはとても時間がかかる。①太い薪を底に置く。②その上に乾燥した枯葉を置く。③さらにその上に、焚き付け用の乾いた小枝を置く。④古新聞を丸めて火をつける。⑤その火を小枝に移す。⑥燃えた小枝の火が薪に移るのを待つ。慣れるまで、この作業はけっこう大変で時間がかかる。スローである。だが、やってみると意外に楽しい。薪に火が移ったのを見ると、何事かを達成した喜びが湧きさえる。むろんボタンひとつで風呂の沸くガス風呂釜ではこのような喜びは味わうことができない。

徒歩での乗鞍岳登山も、薪での風呂沸かしも面倒である。面倒かもしれないが、生活のなかにあつて、生の喜びを与え、心の琴線に触れる。それが文化である。文明も文化も生活のなかにある。生活を便利にしてくれるのが文明だとすれば、不便を楽しみ、心を豊かにしてくれるのが文化である。文明は簡単に短時間にできることを目指し、他方、文化は安直にできず、時間のかかるものを好む。喉の渇きを癒やすため、茶碗で茶をがぶがぶ飲むのは、文明の営みである。茶碗は文明の贈り物である。だが、人々は道具としての茶碗を美

しいものに仕上げてきた。清水焼の美しい茶碗をつくる陶芸家は芸術家である。そしてその茶碗で茶を飲みながら、この清水焼の茶碗は美しいと思ひ、慈しめば、茶を飲むことがそのまま文化になる。

日本だけではない。かつてイギリスのコッツウォルズの一軒のレストランで食事していたとき、隣に品のいい老夫婦が座った。食後、婦人は紅茶を飲み終え、茶碗を目の上まで持ち上げて高台裏を眺め、「この器、きれいだと思ったら、ウェッジウッドだったのね、さすがね」と夫らしき人に言った。器の持ち上げこそ違うものの、器を愛でるのは日本人と同じだと思った。紅茶を単に飲むに終わらず、器を愛でると、そこに美しい時間がゆっくりと流れ、人は幸せを覚えるのである。

文化においてはこのようにゆっくりと時間が流れる。それはおそらく生の時間である。美術館で気に入った一枚の絵を眺めているとき、コンサートで美しい音楽に包まれながら涙を流しているとき、早春の茶室で薄茶を飲みながら庭の鶯の声を聞いているとき、そこには生き生きとした時間が流れている。それが文化である。文化とは美しい時間がゆっくりと流れることである。

(ウ) 文明が文化を抑圧することがある

文明の基準は有能性や有用性であるのに対して、文化の根底には美的判断力が働いている。文明の恩恵を受けた結果、現代の我々は脱人間化、脱自然化という問題に直面するようになった。文化は生活の美しい彩りであり、付加価値である。そんな文化の創出・育成に努める本研究会の任務はすこぶる大きい。

文化なしでも人は生きていけるだろう。ただし文化がないと、生き生きとした時間は流れず、生活は殺伐としたものになってしまう。それを残酷な仕方であげてくれたものに、2016年に起きた相模原障害者施設殺傷事件がある。犯人は施設の障害者たちを、社会的に無用だという理由で殺傷した。犯人はいまだに自分がなぜ悪かったのか、おそらくわかっていないだろう。彼は文明の論理しか見ていないからである。文明は物事を有用性の観点から見る。文明だけで、文化を見ないと、役に立たない人は抹消されて仕方ないを考える。文明以外の尺度を持たなかった犯人にとって自分

はあくまでも正しい。ところが文化にとって大事なものは、便利か否かではない。子どもは可愛い。たとえ出来が悪くても、問題児であっても、わが子は文句なく可愛い。人に対するこのような慈しみの感情が文化を支えている。文化の根底では、可愛い、楽しい、美しいといった美的判断力が働いている。他方、文明では可愛いかどうかではなく、有用か否かが問題になる。基準がまったく異なるのである。

かつて『釣りバカ日誌』という人気映画シリーズがあった。西田敏行が務めるハマちゃんは鈴木建設という大会社の社員である。出世欲がなく、仕事よりも釣りが好きな彼は、いわゆるダメ社員だが、愛すべき性格をもち、社内では同僚たちに好かれている。この映画シリーズは私たちに、人間社会には有能性という尺度以外の尺度も必要であることを教えてくれている。有能性は大事だが、しかし有能性があっても、人間が人間らしくなるとはかぎらない。ハマちゃんは「釣りバカ」と呼ばれるほど釣りが好きである。彼は釣りとい

う趣味をもっている。趣味も文化のひとつである。趣味に打ち込むとき、人は心のなかに喜びや感動を生み出す。趣味に携わっているとき、人は生き生きとする。そしてそういう生き生きとした生活をもっているがゆえに、ハマちゃんはみなに好かれ、彼よりはるかに有能な同僚よりも人間的に見えるのである。

ハマちゃんが勤める鈴木建設という会社は、社会に必要なのは有能性ばかりではなく人間性でもあることをよく知っており、だからこそ彼のようなダメ社員も雇っている。「文化か文明か」という本項のテーマに引き付けて言えば、有能性や有用性は文明を支える論理であり、趣味は文化を育む営為なのである。

200 万年前に石器を使うようになって以来、人類はひたすら有用性を追求し続けてきた。そうした追求の試みが急激に進んだのは、18 世紀後半に始まる産業革命が起きてからだった。鉄道や自動車や蒸気汽船の発明によって遠距離の移動も簡単になり、地球上の距離は著しく短縮された。生活は劇的に変化した。これが文明化である。

生活をより便利にしよう、楽にしようとするのが文明である。便利にしよう、楽にしようとして、文明は鉄道や自動車を、テレビや冷蔵庫や電気掃除機をつくり出した。今日、我々は文明から多くの恩恵を受けている。文明の恩恵を受けた結果、人はあまり動かずともよくなった。あまり動かず、

電車のなかで座るときに隣の人に会釈することもなければ、美しい仕草も上品な立ち居振る舞いも生まれえない。ゆっくりとした美しい時間が流れることもない。こうしてせわしなくなるとともに、人の体は衰え、心は渴き、都会化が進んだ。文明化とはいつしか脱人間化、脱自然化のことになった。

他方、文化は生活に豊かな彩りを添える。茶道で用いられる茶器には、より味わいのあるものが好まれ、茶室に活ける花には、野の風情、自然の息吹を感じさせるものが選ばれる。文化とは彩りであり、付加価値である。彩りが豊かである人、付加価値が多い人ほど、より文化的である。文化は人間をより人間らしくし、自然への愛をより深める。文明が便利さと速さを求めるとすれば、文化は面倒でスローなものを追求する。文明と文化はともに人間の生活のためであるが、その向かう方向は時として正反対になる。そのため文明化、近代化が進めば進むほど、作法が疎かになり、文化が蔑ろにされがちになる。今日の先進諸国が直面しているのは、そういう問題である。では、今の時代に美しい作法を回復し、人間的な文化を創出し育てるためにはどうしたらいいか、真剣に考えなければならぬ。この問題に真正面から取り組む本研究会の意義はすこぶる大きいのである。

(高橋 義人)

2. 文化から文明へ

「文化」の所産は、地域ごとに異なる風土や民族性で培養された伝統に裏打ちされた精神性の強いものである。これに対して、「文明」の所産は、普遍的な原理に基づく科学技術で産み出されるため、世界共通の仕様になる。西陣織の綾織の如く、緯糸は科学技術を基礎にした「文明」、経糸は地域固有の価値観を反映した「文化」であり、両者は不可分の関係にある。地域固有の「文化」が成熟して人類全体に共有されるとき、「文化」は「文明」に発展する契機となる。

はじめに、「文化」と「文明」の関係、あるいは対比を端的に表している事例をひとつ挙げてお

きたい。「文化」と「文明」については、言葉として誰もが知っているが、その関係性については説明に窮するのではないだろうか。実際、生まれ育った国が異なれば、「文化」と「文明」に対するイメージは大きく異なる。それだけでなく、どちらに価値を見いだすかと問われた場合、その答えは一層大きく異なるだろう。

たとえば、次のような光景を思い起こしていただきたい。みなさんが海外旅行をしたとき、それがアメリカであるか、ヨーロッパであるか、アジア、中東、アフリカの諸国であるか、あるいはそのほかの国々であるかは問わない。世界中の行く先々で、旅行者だけでなく、現地の人々もほぼ同じ規格の携帯電話端末で通話する姿を当たり前

のものとして目にするだろう（図3）。



(図3) 世界中で使われている携帯電話端末

携帯電話端末は、普遍的な原理に基礎をおく科学技術が産み出した工業製品であり、工場で大量に製造され、世界共通仕様の規格化された製品が世界中に出回っている。これが「文明」の所産を特徴づけている。

ところが、世界共通仕様の携帯電話端末を使っている人々が着ている衣服は地域ごとに多様・多彩であるはずだ。ビジネススーツを着た男性や女性の姿は世界のどこでもほぼ同じだが、民族衣装やそれに類する衣服を着ていれば、地域ごとに異なり個性的な装いであるに違いない（図4）。



(図4) 世界の多様な民族衣装

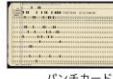
世界には地域ごとに固有の歴史と多様な「文化」が存在し、民族衣装はそれらの歴史や文化を色濃く反映しているである。つまり、「文化」の所産は、地域ごとに異なる風土（エートス）や民族性を共有する人々が直接介在し、長年にわたって培養さ

れてきた伝統に裏打ちされた精神性の強いものである。このため、地球規模の視点で眺めると、地域ごとに固有の多様性をまとっているのである。


ここで例示した民族衣装の場合、糸に加工する動物繊維や植物繊維などの素材、糸や布を染め上げる染料や染色技法、民族衣装に特有の個性的な意匠などの伝統技法を駆使し、多様性を具現したものと捉えることができる。しかし、180度視点を変えて、民族衣装に織り上げるひとつの「ものづくり」技術として分析すると、どの国の民族衣装も共通していて、基本的には、^{たていと}経糸と^{よこいと}緯糸を組み合わせる平面に組織化する普遍的な原理で織られていることがわかる（図5）。約200万年に亘る人類の歴史の中で1万年前の紀元前8,000年には、人類は手作業で糸を通して手織りの布に仕上げていたと推定されている。この当時の手織り技術は明らかに「文化」そのものであったに違いない。この織りの基本技術は、農耕民と牧畜民によって伝承され、世界各地に広まってきたが、やがて手機の機械が発明され、産業革命直後の1785年に英国人のエドワード・カートライトが文字どおり「文明」の力＝機械力を用いた力織機を発明するに至った。

世界の民族衣装：織物

- 素材
植物繊維・動物繊維・化学繊維
- 染色
浸染・捺染・絞染・夾纈染・糊染・蠟纈染
手描友禅(毛筆) → 型友禅(柿渋和紙 → シルクスクリーン)
- 織り
平織・綾織(斜文織)・縞子織
- 織機
手機・力織機



パンチカード



ジャカード織機

■ 織物の技法は共通 → 普遍性
■ 意匠に風土の影響 → 多様性

(図5) 世界の民族衣装を構成する要素

因みに、京都の西陣織の起源は、5～6世紀に大陸から多様な技術を携えて渡来した「今来の才伎」集団の秦氏が京都盆地で始めた養蚕と織物であると考えられている。その後、京都の機織り技術は独自の進化を遂げ、手作業で経糸と緯糸を三次元構造に組織化し、立体的な織物に仕上げる伝統技法を完成させた。これとは独立に、機械力とパンチカード（西陣の紋紙）で立体的に織り上げる

ジャカード織機が 1807 年にフランスで発明された。この手法は機械式コンピュータであり、今日の電子式汎用コンピュータの先祖と位置づけられている。西陣織業界は、1872 (明治 5) 年にいち早くジャカード織機を導入し、これを駆使した独自の機織り技法を磨き上げた。西陣織の紋紙は、経糸と緯糸の操作を機械的に制御し、織物の立体構造と意匠を決定する重要な役割を担っている。西陣織の独特な意匠を実現するためには、紋紙のパンチ穴を設計する必要があり、(地独)京都市産業技術研究所はパソコンによる紋紙製作を支援した経緯がある。

このように、「文明」と「文化」は綾織の如く交差し合いながら、人類の歴史形成に深く係わってきたといえる。この視点に立てば、「文明」を今日で言う科学技術と呼び変えてもよいだろう。人類

の歴史 200 万年の中で農耕を発明し、灌漑施設を整えた「文明」の発生期には、農業や機織りは最先端の科学技術であったに違いない。やがて「文明＝科学技術」は普遍原理に成り得たため、世界中に伝播していった。これを機織りの緯糸とするなら、経糸は世界各地のコミュニティ社会を特徴づける固有の価値観であり、それを我々は「文化」と呼んでいる。

人類の歴史を支えた「衣・食・住」の「衣」を実現した機織りに見られるとおり、「文化」と「文明」は不可分の関係にある。さらに言うなれば、地域固有の「文化」は、普遍性を伴って人類世界全体の共有「文化」に成熟するとき、「文明」へと発展する契機となるであろう。

(西本 清一)

第三章 京都における文化

1. 京都は日本文化の中心

京都は「日本文化のふるさと」として日本人を惹きつける場、いまだに文化が栄え、文化創造の過程に立ち会える場である。伝統文化・伝統産業に「おもしろおかしく」の精神を吹き込むことで、京都では独創的で新しい文化、新しい産業が生まれてきた。文化活動があつてこそ経済は発展するのであり、文化は国づくりの基礎をなす。京都が文化首都としての町づくりに成功すれば、経済的にも政治的にも京都には裨益するところが大きいであろう。

江戸時代から第二次大戦まで日本には3つの中心があった。政治の中心としての江戸（東京）、経済の中心としての大阪、文化の中心としての京都である。

イギリスやフランスのように国の中心がひとつしかない国は多いが、イタリア、ドイツ、アメリカ、スペインのように、政治的中心地、経済的中心地、文化的中心地、宗教的中心地が重ならない国々も多い。前者をかりに一次元国家、後者を二次元的国家や三次元的国家と呼ぶとすれば、日本についてはこう言えるだろう。日本は平安時代から室町時代まで京都にしか都がない一次元国家だったが、秀吉以降は京都と大阪を二都とする二次元国家に、そして江戸時代に入ると、京都、大阪、江戸の三都からなる三次元国家になった。だが、第二次大戦以降、すべてが東京に一極集中してしまい、日本は今やふたたび一次元国家になるとともに、東京以外の地方都市からは活気が大きく失われてしまった、そしてそれは特に、大阪や京都のような関西圏で甚だしい、と。

しかし大阪や京都にはやはり大きな魅力がある。ここでは京都に絞って考えよう。コロナ禍が過ぎ去ったら、また京都に行きたいと思っている人が多いように、京都は人々を惹きつける不思議な魅力を有している。京都が観光地だからと言う人が多いかもしれないが、そう簡単なことではない。人には誰でも「ふるさと」があるだろうが、京都はそれとは別の日本人全員の心のふるさとではないか。日本文化全体のふるさとではないか。

そしてそうした「日本文化のふるさと」としての京都が日本人を惹きつけているのではないか。

日本文化のふるさとである京都には多くの文化遺産や美術品がある。その意味で京都市はたしかに日本文化のミュージアムである。地域文化のミュージアムであることを誇っている町は他にもいろいろある。だが「ミュージアム」という語は誤解を招きやすい。ミュージアムでは新しい文化が再生産されることはないからだ。ミュージアムに飾られているのは作者の手を離れた美術品であり、ミュージアムでは文化が生み出される過程を人は眼にすることができない。ところが京都では、我々の目の前で西陣織の織物が織られ、清水焼の陶器が焼かれ、優美な蒔絵の施された京漆器がつくられる。いまだに文化が栄え、今ここで文化が生まれていると実感させ、文化創造の過程に立ち会わせてくれる。それが京都である。

「いまだに文化が栄えている」と言われるためには、文化と芸術を培う土壌と環境が必要である。第一に京都は、進取の気性に富んだ古都——古い都——でなければならない。パリは美しい古都であるからこそ芸術が栄える。芸術が栄えているからこそ、ゴッホやピカソをはじめとして外国からも芸術家が次々と押し寄せてくる。京都が美しい古都でなくなってしまったら、若い文化人を惹きつけることができなくなってしまいうだろう。町が伝統を保持し、古くて美しい街並みを持ち、そこに多くの文化人が住み、すばらしい文化を生み出せば、その経済効果もあつて、京都はさらに栄えるにちがいない。

文化首都としての京都は、単に伝統的な文化を消極的に鑑賞する場であるばかりではない。新しい文化を積極的に創造する場でもある。未来を切り拓く力をもった場でもある。進取の気性、前衛を恐れない気性は京都ではきわめて重要である。清水焼や京漆器の工房では、工芸家たちが伝統を背負いながらも新しいものを生み出そうとして日々奮闘している。彼らこそは文化の大事な担い手である。

伝統工芸ばかりではない。京都高度技術研究所

の最高顧問でもあった堀場雅夫(1924-2015)は、堀場製作所というベンチャー企業を起こしたが、彼は、京都にはベンチャー企業を生み出す土壌があると常々主張していた。染めの一種である捺染は通信用LSIのプリント技術(ローム)に発展し、仏具の金属加工技術は精密機器につながり(島津、オムロン、村田製作所)、清水焼の原料を精製する技術はファインセラミック(京セラ)を生み出した。歴史に育まれた技を発展させることによって先端技術が生み出されてきたというのである(NHK「あの人に会いたい・堀場雅夫」2016年9月3日)。そのせいか、1990年代初頭からのわが国の「失われた20年」のあいだ日本の多くの企業が停滞や衰退を余儀なくされたなかにあつて、ベンチャー企業から発展した京都の会社はどれもみな意気軒昂である。そのせいか、これらの会社は証券市場では「京都ブランド」として特別扱いされている。

堀場製作所の社是は「おもしろおかしく」である。この点について堀場雅夫氏は生前こう語っていた。「やっぱり自分の人生おもしろおかしくやってきたと思うし、おもしろおかしくなかったらね、人間って最終的にエネルギー出ないと思うんですよ。その方法のいちばんいい方法はその人がほんとに〈これがワシの人生や〉と思うような仕

事をやったときに最大限のエネルギーが出る」と。

京都大学の学風も明らかに「おもしろおかしく」にある。こうした学風のある大学は少ないが、「おもしろおかしく」やってこそ独創的なものが生まれることを京都大学の関係者はよく知っている。そして堀場製作所を初めとするかつてのベンチャー企業は、京都に長く培われた伝統文化・伝統産業に「おもしろおかしく」の精神を吹き込むことによって、新しい文化・新しい産業を生み出した。そうした新しい文化・新しい産業が生まれれば、京都は今後も発展を続けることだろう。

政治家のなかには、知識人を忌避し、文化を邪魔物扱いする人がいるが、それは大きな間違いである。たしかに知識人や文化人が政治家を批判することは間々ある。だが、その批判を受け入れられないほど政治家は心が狭くしてはならない。むしろ政治家には気がついてほしい。文化活動が活発であつてこそ経済は発展し、高度の文化があつてこそその国は他国の尊敬を受け、文化が国づくりの基礎をなすということ。

もしも京都が文化首都としての町づくりに成功すれば、それは経済的にも政治的にも京都とそこに住む人々に大いに裨益するであろう。

(高橋 義人)

2. 日本史における文化都市としての京都

宗教と経済力は文化活動を促進する。京都は、仏教宗派の本山を多く抱えており、平安貴族や足利幕府などの莫大な経済力を背景として、新しい芸術文化が次々に生まれ続けた。京都は、創意工夫により高い付加価値をつけることに長けている。京都の力で総合的な「文化」を創出し、日本全体に活力を与えるために、こうした京都の土壌を維持・形成することがますます必要である。

京都という土地は、歴史的にも多様な役割を持ってきた。8世紀末に奈良から京都に都が遷り、19世紀に東京に遷都するまでの千年以上、京都は、政治的な首都機能を担ってきた。しかし、必ずしも朝廷の中樞が、常に同じレベルで政治的な影響力を保持し続けてきたわけではない。

例えば、飛鳥時代から奈良時代にかけては非常に中央集権的であったのが、平安時代に入ると藤原家を中心として貴族が皇族を凌ぐ政治力を保持するようになり、鎌倉時代に入ると武家が政治力を持つようになっていった。特に、鎌倉時代や江戸時代には、公的には京都が政治の中心でありながらも、実質的な政治権力は関東に移っていた。そして、明治以降、遷都してからは、名実ともに政治的な中心が関東に移動した。

このように、政治的中心が京都から関東に移っていく中で、「文化」はどうだったのであろうか。もちろん江戸や大阪でも「文化」は育っていたが、その中でも、やはり京都が中心的な役割を果たし続けてきたように思われる。

では、京都という土地がそのように「文化」を生み出し続けてきた源がいったい何なのかとい

うと、宗教が大きな源の一つになっているであろうと思われる。これは日本だけではなく、西洋においても同様であり、特に古い時代の芸術は宗教と切り離せない関係にあった。日本の場合も、華道や茶道など日本を代表する「文化」が、「道」と言われる限りは、仏道修行等と切り離せない側面があると言える。このように、宗教から多くの「文化」が生まれてきたが、京都は仏教宗派の本山を多く抱えていたことから、新しい「文化」が誕生し続けた一つの土壌になったのではないかと考えられる。

また、「文化」を生み出すための重要なファクターの一つは、経済力である。平安時代の京都においては、藤原家などの貴族が莫大な資金を投入して様々なお寺を建てている。阿弥陀仏の極楽浄土を再現した平等院などはその最たる例の一つである。あらゆる世俗権力を手に入れた藤原家の次なるステップとして、最先端の設計・建築技術を用いて極楽浄土をこの世に3Dで創り出し、あの世をこの世に召喚したのである。また、室町時代には足利幕府が莫大な資金を投入して、金閣寺や銀閣寺など豪華絢爛な寺院や芸術作品を多数生み出してきた。いち将軍が天皇を凌ぐ権力を誇示するにはうってつけの事業であったといえる。

それに対して、現在はどうかと言うと、新しく大きな力強い「文化」を生み出す経済力の差により、京都は東京や大阪に対して優位に立てなくなりつつある。LIBERTASのレポート（八田誠、2011年）によれば、芸術家・クリエイターの半数は首都圏に集中しており、京都は大阪の半分以下の数

となっている。

現在の京都は新しい「文化」を大きく創出するよりも、既存の「伝統文化」をいかに保持していくかという役割に留まっている。このような経済的なハンディがある中で、京都がどのようにして新しい「文化」を創出していくことができるかということを考えてみると、やはり創意工夫により付加価値を施す取り組みを続けていく必要があるのではなかろうか。

京都は高い付加価値をつけることに長けている。例えば、和食といえば誰しも京都を思い浮かべるであろう。京都には、新鮮な魚という点では地の利がないが、魚の調理に様々な工夫を凝らし、様々な技術を施すことで、高い値段を設定できる質の高い料理を提供している。これは京都の料理人たちが育んできた大きな独創性と高い技術に依るものだと思われる。京都という土地は、様々なものに価値を見出して創出するという文化的土壌がある。

学術や研究開発もしかりである。京都では「京都学派」を中心に、哲学や霊長類学など様々な学術領域で新たなムーブメントが起こされてきた。そうした独創性を活かして、京都の力で、新たな、そして総合的な「文化」を創出することができたならば、政治も経済も含めて、日本全体に大きな活力を与えられるであろうし、そうした土壌を維持・形成するための努力がますます必要になるであろう。

（熊谷 誠慈）

3. 京都の音楽文化の現状

寺院の鐘は日本で最も古い音楽であり、日本の音楽文化を担っている。京都には、様々な地域で伝承されている多様な音楽文化があり、その多くは寺院や神社と結びついている。無形文化財の指定の有無にかかわらず、伝統の存続に努め、音楽の多様性を確保することが望まれる。雅楽、仏教音楽の声明、能楽、平家、地歌、箏曲、柳川三味線、尺八の歴史と現状の課題について紹介する。

京都では、日本の古代・中世・近世に由来する伝統音楽とともに、近代の明治時代以降に導入さ

れた西洋音楽、そして西洋音楽によるポピュラー音楽も盛んに上演されている。

日本における最も古い音楽は、寺院の鐘である。鐘の音を雑音と考える人が増えている地域では、鐘を撞く機会が減っているが、京都では今でも鐘が鳴り響いている。寺院の存続とともに、鐘の音が重要な音楽文化であることを、ここで強調しておきたい。

京都には、様々な地域で伝承されている多様な音楽文化がある。多くは、寺院や神社と結びついたものである。その中には、すでに演奏されなくなったものもあるが、最近では、それを復活する動

きも出ている。それらの伝統の多くは、国、府、地域から無形文化財の指定を受けているが、指定を受けていない伝統の存続にもさらに努力をすることが望まれる。それが、京都における音楽の多様性を確保することになるからである。

京都における西洋音楽の教育に関しては、第二次大戦後に実施された教育制度変更直後の昭和23（1948）年に現在の京都市立堀川音楽高等学校が設立されたことが注目に値する。これは、音楽に特化した公立の高校であり、そこで教えられる音楽が西洋音楽であるため、その卒業生たちが日本と海外のオーケストラを初め、西洋音楽の演奏で活躍している。また、京都市立芸術大学の音楽学部は西洋音楽に特化して演奏者と作曲家を輩出している。京都教育大学や他の多くの大学も、音楽教育と音楽研究で役割を果たしている。

演奏会場の点でも、京都府は優れている。京都府文化スポーツ部文化政策室が纏めてくださった資料をみると、京都府内の26市町村には、一つを除いて200人以上を収容できるホールがある。したがって、例えば小中学生にオーケストラの演奏を聴かせようとすれば、学校内でなく、こうしたホールで行うことができる。これは、昭和30年代の日本の多くの地域では考えられなかったことである。義務教育における音楽教員も主として西洋音楽で育てられているので、京都府における西洋音楽の伝承・伝播は安定して進むと考えられる。

雅楽伝承の中心は、明治維新まで京都・奈良・大阪であった。明治政府は1870（明治3）年に雅楽局という組織を作り、そこに京都・奈良・大阪の楽人（雅楽の伝承者）を集めて、国の職員とした。明治天皇が東京に移った後も、関西の寺社での雅楽演奏の必要から、職員を京都にも置いた。当初は京都勤務者が東京勤務者よりも多かったが、1874（明治7）年には東京勤務者の方が多くなった。この雅楽局が現在の宮内庁式部職楽部である。現在の京都・奈良・大阪では、明治維新までの伝承を受け継いだ京都の平安雅楽会、奈良の南都楽所、大阪の四天王寺楽所雅亮会に代表される組織が伝承を担い、他の組織や大学も雅楽の伝承に貢献している。

雅楽と関連する仏教音楽の声明は、それぞれの宗派で伝承されている。真言宗、天台宗、そして鎌倉新仏教の曹洞宗・臨済宗・浄土宗・浄土真宗・日蓮宗のそれぞれが、声明を伝承している。江戸

時代に導入された黄檗宗の声明も宇治の萬福寺で伝承されている。

国内外の観光客が寺院を拝観するが、儀礼の場の荘厳が声明なしでは成立しないのであるから、こうした声明を知ることも必要である。外部の人間を実際の儀礼に参加させることは容易ではないが、すでに公開されている映像・録音を活用することによってでも、寺院が声明をより広く知らせることに期待したい。私も、浄土真宗大谷派で伝承されている《坂東曲ばんどうぶし》が東京で1978年に上演された際に、その16ミリフィルムによる公刊（東京：国際交流基金、ミツ・プロダクション作成）に協力した。《坂東曲》は、横に並んだ僧侶が「南無阿弥陀仏」や他の言葉の音節を伸ばしながら唱えるものであるが、その際に各自が音節に合わせて、頭を左・右・正面に下げる激しい動きを繰り返す。短い時間の映像をインターネットで見ただけでも、この声明の独自性がわかるであろう。

中世に生まれた能楽（能と狂言）に関しては、京都も伝統を強く保っている。また、流派別の活動に加えて、100人を超える専門職が流派を越えて京都能楽会が作って活動している。戦後から平安神宮で行われている京都薪能は、演者（京都能楽会）と行政（京都市）の協力関係によって開催されているものである。

雅楽と声明の影響のもとに中世に生まれたのが「平家」である。これは『平家物語』を琵琶で語る音楽で、氏族名としての平家と区別するために、また、音楽であることを示すために、「平曲」とも呼ばれるが、江戸時代までは「平家」と呼ばれていた。これは日本における最初の語り物芸術で、その影響は能楽、歌舞伎・文楽・箏曲他にも及んでいる。伝承者が激減したため、それを憂えた薦田治子（武蔵野音楽大学教授）が当道音楽保存会を主宰し、さらに「平家語り研究会」を作って、大阪と東京の地歌・箏曲の演奏家に平家を習得させている。この研究会は文化庁の委託を受けて活動し、京都や東京だけでなく海外でもすでに演奏を行っている。

平家の演奏家はその成立時から盲人男性音楽家であった。江戸時代には幕府が、これを式楽（儀礼に用いられる音楽）に指定し、演奏者を当道座（その本部・職屋敷は京都）という組織に組み入れて、経済的な援助を行った。当道座に所属する

音楽家たちは、平家とともに、地歌（室内楽的な三味線音楽）、箏曲、そして胡弓も演奏し、古典を伝承するとともに新しい作品を作り続けて、地歌・箏曲の様式変化に貢献した。

当道座が1871（明治4）年に明治政府によって解体されたため、晴眼者も女性も地歌・箏曲の世界に加わることができるようになり、それが地歌・箏曲を盛んにした。現在、京都でも地歌・箏曲が伝承されているが、私には、新作を作る勢いが東京や大阪に比べると衰えているように思える。これを問題と考える理由は第5章で述べることにする。

箏曲と関連しながら伝承されてきたのが地歌である。そこで使われる三味線も時代と地域によって変化を受けている。現在の多くの地歌演奏家が用いる撥は、撥先（弦を弾く部分）が広く、根本（撥を握る部分）が厚い。私自身が使っているものを例にすると、撥の重さが230グラムはある。それに対して、京都の伝統的な地歌で用いられてきた撥は、撥先が短く、根本が薄く、その重さは、わずか23グラムで、前者の十分の一である。そのため、二種の撥は使い方が異なる。この軽くて、薄い撥を用いて、独特の響きをもつ柳川三味線を弾くのが、京都の伝統であった。しかし、現在は柳川三味線の演奏者が激減している。柳川三味線の再活性化は、地歌の多様性を維持するためにも、関係者が真剣に取り組むべき課題である。

明治維新まで尺八は禅宗の一派である普化宗^{ふけしゅう}の楽器であった。この宗派は、尺八の演奏を禅の修行とし、尺八の使用をこの宗派に属する虚無僧に限定した。しかし、普化宗が当道座と同じく1871（明治4）年に明治政府によって解体されたため、尺八がだれでも吹ける楽器となり、それに伴い、三味線や箏との合奏も行われるようになった。一方、普化宗に伝承されていた独自のレパートリーを「音楽」として演奏する動きが明治時代半ばから始まり、それが現在に続いている。

普化宗の解体を受けて、関西で新しい尺八音楽を形成したのが中尾都山（1876－1956）である。彼は、普化宗の尺八音楽、地歌・箏曲、そして西洋音楽から影響を受け、都山流尺八本曲と呼ばれるレパートリーを作った。都山流は、京都の本部を中心に、日本全体に広く普及している。新しい流派でありながら、戦前に日本の植民地であった台湾や朝鮮でも都山流が普及したのは、中尾都山が西洋音楽の楽譜を参考にして作った新しい記譜法による伝承方法と、西洋楽器を含め合奏がうまく行くように考えた新しい楽器の作り方が主な要因であったと考えられる。現在でも都山流の演奏者は、他の流派の尺八演奏家と同じように、古典の伝承と現代作品の演奏に加えて、自ら新しい作品の創作を行っている。

（徳丸 吉彦）

4. 地域社会と学区における共助システム

京都は、長い歴史の積み重ねの中で、地域社会における人々の幸福や健康につながるような共助システムを構築し、文化と生活を一体のものとして守り育ててきた。多岐にわたる「共助」の取り組みを担い、文化活動にも貢献してきたのは、住民自治組織としての「学区」である。地域活動の中で、若い世代が「価値ある体験」をすることができれば、彼らは価値に主体的に触れる機会の重要性を認識し、前の世代から文化を受け継ぎ、次の世代へつなげていくことができるだろう。

地域社会は私たちが生きる「場」である。京都の文化は歴史文化都市としての側面もありつつ、実は地域社会が密接に「共助」システムをつくり

ながら、地域文化を守り育てることに貢献してきた場所でもある。こうした地域モデルは地域のレジリエンスにもつながっている（藤田，2021）。

京都の地域社会は様々な形で形成・保持されてきた。建築の観点から地域まちづくりを研究している前田（2021）は都市と生活文化との関わりの、京都における特徴について下記のように述べている。「人工物の集積としての都市は、そこを歩き交う人びとの営みから派生した様々な意味や価値を宿してきた。とりわけ、京都のような長い歴史をもつ都市では、私たちの生活を取り巻く人工環境の大部分は、私たち以外の誰かが過去につくったものである。したがって、人工環境が宿す意味や価値は幾重ものレイヤーとなり、積層している」。わかりやすい例は京都の中心部を支えて

きた町の文化であり、これは祇園祭の運営が長らく保たれてきた原動力でもある。それから地域ごとには「地蔵盆」がある。こうした積み重ねの中で、文化を維持するだけではなく、人々はお互いの幸福や健康につながるような共助システムを構築し、文化と生活を一体化して守り育ててきたといえるだろう。

地域文化と生活は一方で都市的生活により乖離が進んでいることも指摘されている。しかし若者あるいは子育て世代は、経済的インセンティブにのみ必ずしも動かされることがなく、むしろ他者とのつながりから得られる満足感、また、自分の能力を発揮できることによる効力感や、子ども世代に何らかの「価値ある体験」をさせることを重視する傾向にもある。地域文化に触れること、そして様々な他者と交流することが、自分たちあるいは子ども世代にとって価値ある体験となること、またその価値自体に主体的に関わることができる機会があることの重要性を認識してもらうことが今一層重要になってきている。

京都においては、この地域文化の中心を担うところとして、「学区」という単位が機能している。学区は住民自治組織として、そのルーツは江戸時代の地域自治にもさかのぼるとされている。特に「番組小学校」という京都の中心部(上京・下京)に設置された、町衆により構築された小学校区が派的に京都市内全域に広がっていったものである。学区は直接の行政自治体単位とは異なるものの、例えば小学校の児童生徒たちの朝の登校見守り活動や、放課後学び教室の運営、地域内運動会を主宰する体育振興会の運営、自主防災活動など、多岐にわたる「共助」の取り組みを担っている。そして、共助システムは文化活動にも貢献している。近所の神社のお祭りの運営や、地蔵盆などの活動にも関わっている。

一例として、京都市右京区南太秦学区においては、小学校を拠点とした多世代交流が実施されており、これらは地域の人たちの健康維持のモチベーションとなっている。さらには地域の子供た

ちから高齢者までの、多世代の交流の拠点となっている(内田, 2019)。

多世代での地域活動を主体とする文化との関わりは非常に重要なポイントの一つとして、「今(現在)」を超えて、「未来」志向につながっていくということが挙げられる。現時点に存在している文化や地域の中にある自然、町並みについて、何を次の世代に残していきたいのか、どのように文化を伝えていきたいのかということを考えるきっかけとなる。将来世代に対して自分たちの行動や意思決定がどのように影響を与えるのかを志向させる点は、自分を幸福にしてくれる何かに気づき、それを他者にも伝えていくことで他者の幸福を祈ることでもある。

こうしたシステムを維持していくためには、地域のキーパーソンを中心に、ネットワーク上の周囲にも広げていくことが大切になる。また、排他的にならない工夫も必要である。京都市内の都市部においても、地域の中心人物が孤立者を招き入れるための環境作りに腐心している事例がみられるが、このような共助システムと文化に対する敬意の醸成は、今後の取り組みに必要なことである。

<引用文献>

藤田裕之(2021)「レジリエンス京都! 今こそ文化を基軸に超 SDGs 社会の未来を考える」京都新聞出版センター

前田昌弘(2021)「環境と協同し、住まいを開く」学術広報誌「こころの未来」25号 p22-25

内田由紀子(2019)「地域の幸福の多面的側面の測定と持続可能な多世代共創社会に向けての実践的フィードバック」戦略的創造研究推進事業(社会技術研究開発)研究開発実施終了報告書「持続可能な多世代共創社会のデザイン」研究開発領域

(内田 由紀子)

第四章 現代の課題

1. 文明と地球温暖化

(ア) 文明の負の側面

人間生活の利便と快適を求めてきた文明が、いまや地球温暖化、地球環境汚染を引き起こし、人類を苦しめている。これは文明という器のつくり方に問題があったのではないか。器の内部の形成ばかりに傾注して、外部を顧みなかったために、外部に汚染物質が堆積し、それが内部にまで入り込み、我々の生活の安全を脅かしているのではないか。

今日、人類を苦しめている地球温暖化、地球環境汚染の原因は文明化にある。人間生活の利便と快適を求めてきたはずの文明が、意に反して人間生活の根本的安全を脅かしてしまった。文明はそう責められているのである。では、人間のためになるはずだった文明がいったいどうして人間に害を及ぼすようになってしまったのだろうか。

今でこそ、文明の発展に不信感を抱く人の数は急増したが、かつて文明は大多数の人々にとって驚きと讃嘆の的だった。鉄道ができ、自動車が走り、エレベーターで階上まで行くことができ、洗濯機で洗濯できるのはいいことだとほぼ誰もが信じていた。明治時代の日本では「文明開化」が進み、人々の多くはこれで日本も文明国の仲間入りできたのだと思っていた。江戸時代の日本文化など捨ててもかまわないと多くの人々が思い、「汽笛一声新橋を はや我汽車は離れたり」という鉄道唱歌をみなが好んだ。

前述したように、こうした近代化に疑問をもったのが作家の永井荷風だった。彼は、日本文学史上、最も徹底した反近代論者だった。日本人の多くが文明開化にうつつを抜かしているのを苦々しい思いで眺めていた荷風は、その思いを小戯曲「異郷の恋」(『ふらんす物語』所収)のなかに吐露した。ここには日本の近代化を賛美する学生(建部)と、日本の近代化を批判する学生(藤崎)が登場する。明治時代の日本では建部のような近代化論者が大半を占めていたが、藤崎のような反近代化論者も、ごく一部とはいえ、いた。建部は、

日露戦争に勝った日本を自慢して言う。「文明の今日、チョン髷なぞ結うものがあるものですか。ロシアに打勝った今日の日本は、米国の通り、西洋諸国の通りです。電車もあり、汽船もあり、議会もあり、病院もあり、学校もあります。何一つ、西洋と変った事はない、西洋よりも、ある点に於てはもっと進歩しています。二十世紀の日本は、世界の進歩、人類の幸福のために、泰西の文明と、古代日本の武士道とを調和しようという、大なる任務を持っています。吾々はつまり、東西の兩大思想を結び付けようという任務を持っているのです」。建部は明治日本の文明開化をひたすら賛美する。

それを聞いたアメリカ人の婦人たちは、荷風の内心を代弁するかのように言う。「それじゃ人力車もない。綺麗な着物をきた人もいないんですか」。「ムスメもないのですか」。「桜の花もないのですか」。「残念だ。惜しい事をしたものだ」。「なぜ、自国の美しい風習をすててしまったのでしょうか」。婦人たちは、文明化のために日本の伝統的文化が失われてゆくのをとても残念に思っている。

婦人たちの質問に対して、近代化に批判的な藤崎は、こうなったのは、何もかもペリーのせいだと言う。「ペルリというアメリカ人は、世界の最も美しい、活きた美術品を壊してしまったのですからね。その罪や甚だ大なりです。今日、あなた方が遊びにいらしたって、日本にはもう、何一つ不思議なものは存在しておりません。あなた方が写真で見てさえ立派だ、面白いと仰有る神社仏閣などは、だんだん壊れて行きます」。

日本の近代化を国是と考える建部には荷風の父親のイメージが、他方、近代化を揶揄する藤崎には荷風の姿が重ねあわされている。言い換えれば、建部(荷風の父)が日本の政治的・経済的・軍事的発展ばかり目指しているのに対し、藤崎(荷風)は、日本の伝統的文化や美を必死に守ろうとしている。建部と藤崎の姿を借りて、荷風はここで文明と文化を対置させている。

今日では藤崎のように文明の発展を疑問視する人が少なくない。もうこれ以上文明化は進まなくてよい、地球環境悪化のほうが恐ろしい、と彼らは言う。では、文明の発展のどこが具合が悪いのであろうか。

前述したように、文明が花器であるとすれば、文化はその花器のなかに活ける花である。両者は協力し共存していくことができるし、またそうしなければならない。問題は、安全な容器であるはずの文明になぜひびが入り、水がなぜ漏れだし、地球環境の汚染がなぜ起きたかということである。ひびが入ったのは経年劣化のためではない。文明という器のつくり方におそらく問題があったためである。

昭和 30 年代、私がまだ小学生だった頃に家庭が出す一般ごみはきわめて少なかった。おそらく今日の 20 分の 1 以下だった。昭和 40 年代、私が高校生、大学生になるとともに、一般ごみの量は急激に増え、ごみ問題が本格化した。あの頃、文明化にはごみ問題という負の側面が付きまとうことを、我々はもっと直視し、対応策を検討すべきだった。

だが、国や自治体は弥縫策を講じるだけで、抜本的な対策は何も検討しなかった。その結果、文明という器にひびが入り、深刻な事態が惹き起こされてしまった。

プラスチック問題も、文明化の負の側面のひとつである。プラスチックが発明されたのは 19 世紀前半のことだが、これが汎用化されたのは、昭和 40 年前後、私が大学に入った頃だった。その頃、新聞紙上ではプラスチックを大量生産してよいかどうか、議論が活発になされていた。ほぼ毎日、主要新聞はプラスチック量産への反対キャンペーンを張っていた。読んでみると、プラスチックを大量に使うようになると、プラスチックのごみが増える、プラスチックが分解されるには何千年もかかり、プラスチックは地球環境を破壊する、業者はプラスチックをリサイクルすると嘘をついている、プラスチックが普及したらプラスチック汚染で地球はお終いになってしまう、云々と、今日、プラスチック汚染について言われているの

と同じことを、50 年以上も前に主要新聞はすでに書きたて、プラスチック普及に必死に抗していた。

それらの新聞記事を読み、地球の終焉とは大袈裟だと思いつつも、私もプラスチック量産反対のほうに大きく傾いた。ところがいざプラスチックが普及しはじめてみると、それは断然便利なものだった。それまで買い物に行くときには、日本人はみな布製の買い物袋を持参しなければならなかった。ところが食品のなかには水分のあるものが多く、買い物を終えて帰宅して買い物袋を見ると、それはたいてい濡れていた。ところがプラスチックができると、買い物袋は濡れなくなった。そればかりではない。私の好物の豆腐を買いに行くときには、豆腐から水が出るため、必ず鍋を持参しなければならなかった。だがプラスチックが普及すると、豆腐屋で豆腐を薄いプラスチック袋に入れてくれるようになり、鍋は不要になった。プラスチックはとても便利なものだとつくづく感じた。

私と同じように感じた人たちが多かったのであろう。プラスチック量産反対の新聞キャンペーンもやがて下火になった。今日、地球全体のプラスチック汚染が問題になっているが、私の思い出からもわかるように、プラスチックの普及を止める機会はずっと 50 年前にすでにあつた。だが、我々はその貴重な機会を逸してしまった。プラスチック反対の声を圧殺したのは、主に当時の政治家と産業界だった。彼らの責任はすこぶる重い。

一般ごみ、プラごみばかりではない。我々は日々に CO₂ を大量に排出している。自動車を走らせ、電車を走らせ、飛行機を飛ばし、部屋でエアコンをつけると、CO₂ が排出される。自動車、電車、飛行機、エアコンのある文明生活は快適である。だが快適なのは、文明という器の内部にすぎない。文明の製造関係者は器の内部の形成ばかりに努力を傾注し、器の外部のことを顧みなかった。ごみ、プラスチック、CO₂ が次から次に排出された結果、器の外部にある地球環境はひどく汚されてしまった。器の外部には汚染物質が堆積し、それが今や器の内部にまで入りこみ、器の内側に住む我々の生活の安全を脅かしている。

(イ) 文明の暴走と文化の危機

農業革命は豊富な食糧とともに、差別や貧富の差という弊害をもたらした。科学革命、産業革命により、文明は帝国主義の原動力となった。このような文明の運営者の暴走を止めるのが文化である。文化の基底には人間の尊重、人間への愛があるからである。

では、文明に負の側面が見られるようになったのは、鉄道や自動車が発明された 19 世紀以降のことなのだろうか。いや、そうではない。ユヴァル・ノア・ハラリの『サピエンス全史』によれば、人類の歴史において最も大きい革命は農業革命と科学革命の 2 つだった。農業革命は 1 万 2 千年前のことである。農業革命によって耕作を始めた人類は、集団をつくり、階級をつくり、差別をつくり、貧富の差をつくり出した。ここにタテ社会が誕生した。文明の始まりはこの農業革命にあった。農業革命は人々に豊富な食糧を与えるとともに、差別、貧富の差という弊害をもたらした。

500 年前の科学革命によって文明化の速度は急速に増した。近代の始まりである。大航海時代と資本主義が生まれたのも 15・16 世紀以降である。大航海時代に発見され、ヨーロッパ列強の植民地となった南北アメリカ大陸では、砂糖や綿花や煙草を大量生産するため、多くのプランテーションがつくられた。これらのプランテーションで働かされたのは、アフリカから連れてこられた黒人奴隷たちだった。非人道的な奴隷制度に対する反対運動の声が高まったのは 19 世紀に入ってからのもので、南北戦争の最中の 1862 年のアメリカ合衆国での奴隷解放宣言以降、奴隷制度はようやく終息に向った。日本の明治維新の少し前のことである。だが、奴隷制度がなくなった後、次に黒人たちを待っていたのは人種差別だった。ハナ・アーレントによれば、20 世紀は人種差別の世紀である（『全体主義の起原』第 3 巻）。コロンブスのアメリカ発見をはじめとする大航海時代は一般には華々しい時代として語られるが、じつは奴隷制度と人種差別をもたらしたのも大航海時代だった。すなわち文明だった。西洋文明には「野蛮」の側面もあったことを看過してはならない。

大航海時代の開始とほぼ同じ頃に発明されたのが望遠鏡だった。望遠鏡の発明が科学革命へ、科学革命が産業革命へとつながった。18 世紀の後

半にイギリスで産業革命が起きたのは、イギリスの植民地インド産の安価な綿製品が大量に輸入され、イギリス国内の産業を脅かしたからだ。そこで大量生産を可能にする紡績機が開発された。開発できたのは、望遠鏡の発明に始まる科学革命があったからである。紡績機発明に始まる産業革命はやがて自動車産業や電気産業をはじめとする重工業へと移行した。ところがこれらの産業には、石油、ゴム、銅などヨーロッパでは得られない天然資源が必要だった。そこで産業革命を推進する列強諸国は、これらの資源の産出国を植民地や従属地にし、そこで住民を働かせて本国に工業原料を提供した。こうして産業革命と植民地主義が手を組んだ。そこに生まれたのが「帝国」であり、大英帝国、フランス帝国、ロシア帝国など、列強はみな「帝国」を自称するようになり、19 世紀は帝国主義の時代になった。

忘れてならないのは、帝国主義の原動力となったのが文明だったことである。帝国主義の下、文明は奴隷制度や植民地主義の口実となり、ドストエフスキーの小説の題名でもある「虐げられた人々」を多数つくり出した。むろん文明そのものに非があったわけではない。倫理を問われるのは文明ではなく、文明の運営者である。『虐げられた人々』のなかでドストエフスキーは、金欲と色欲と出世欲にまみれた一部の強者が弱者（一般市民）を虐げるさまを如実に描き出している。むろん金欲と色欲と出世欲にまみれた人々は今日でも数多く、彼らは 21 世紀の新しい支配階級にのし上がろうとしている。では、人々が金欲と色欲と出世欲にまみれず、人間倫理を取り戻すにはどうしたらいいのか。

文明の運営者の暴走を止めるのがじつは文化である。前にも述べたが、文化とは別にレオナルド・ダヴィンチの絵画やモーツァルトの音楽のような高級芸術に限定されるわけではない。正座してお辞儀すること、相手の眼を見ながら握手すること、他者に対して敬意を払うこと、これらのマナーがすでに文化である。文化の基底には人間の尊重、人間への愛がある。レオナルド・ダヴィンチの「モナリザ」もモーツァルトの『魔笛』も、人間に対する愛がなかったら生まれなかったであろう。

人間に対する愛があれば、先住民族を虐殺した

り、奴隷を売り買いしたり、肌の色の違う人を差別したりすることはできない。むしろ彼らに救いの手を差し伸べるにちがいない。そしてそうやって救いの手を差し伸べることも文化である。アフガニスタンで現地の人々の救援に当たっていた中村哲医師のボランティア活動は高度の文化的品位にあふれていた。

昭和 40 年代、プラスチックの大量生産に疑問を呈していた主要新聞のキャンペーン活動も人々の幸福を願う文化的活動だった。だが、政府と経済界は、そうした「文化」の声を押し切って

プラスチック量産へ踏み切ってしまった。政府と経済界の人々が金欲と色欲と出世欲にまみれていたとは必ずしも言えない。彼らはおそらく日本国民の富裕化と自分の会社の発展を願ったにすぎない。欧米諸国でも同工異曲である。だが、はっきりしているのは、彼らがそのとき先を見越さなかったことである。50 年先を見通せなかったことである。50 年後の今日、ようやく地球規模の環境汚染に気づいて、彼らは慌てて何か手を打とうとしている。しかし、残された時間はもうあまりないのである。

(ウ) 植民地主義からの決別

イギリスは、植民地を自ら手放すことにより、教養と人格が求められるジェントルマンシップを守ろうとした。教養 (culture) とは心を耕す (cultivate) ことで、耕したものが文化である。植民地主義と決別し、国民に「教養」を身につけるように求めたイギリスは、ジェントルマン的なイギリス文化を生み出した。

周知のように、植民地主義や奴隷制度や産業革命で指導的地位を担ったのはイギリスである。ところが第二次大戦後、そのイギリスが次々と植民地を手放していった。インドの独立に際してイギリスが暴力をふるうさまがニュース映画で毎日のように放映された。だがその後のイギリスは旧植民地の独立をなぜか進んで認めるようになった。多くの人々の眼にはそう映った。私も子ども心にそのことを不思議に思い、母に、イギリスはなぜ次々と植民地を手放し、独立を認めるのか、と尋ねたことがあった。母は答えた。こうして好意的にしてあげたほうが旧植民地との良好な関係を保てて、そのほうがイギリスにとっても得になるのよ、と。

母の答えは多分正しかったのだろう。しかし私にはそれだけが理由とは思えなかった。何か他に理由があるのではないかと思った。そして今の私には、イギリスが植民地を自ら放棄したのは、植民地主義がイギリス人のジェントルマンシップと相容れないものだったからではないかと思われてならない。

ジェントルマンシップとは何だろうか。もともとジェントルマンは、大地主層ジェントリと貴族

を中心とするイギリスの支配階級を意味した。ところが単に土地をもち上流階級に属しているだけでは不十分で、ジェントルマンには次第に教養や人格が求められるようになった。テレビドラマ『ダウントン・アビー』は、屋敷の運転手が屋敷の令嬢と階級を超えた結婚をする話である。ジェントルマンの仲間入りをする。そうすると、この元運転手は見かけも物腰もジェントルマンらしくなっていく。彼は成り上がりものだが、それにもかかわらず彼はジェントルマンにふさわしい教養と人格、すなわちジェントルマンシップを身につけていく。『ダウントン・アビー』にはイギリス的ジェントルマンがつけられていく過程が見事に描かれていた。

教養と人格はほぼ同義語である。「教養」は英語で culture という。「文化」とも訳される。よく知られているように、culture は cultivate (耕す) に由来している。心を耕すこと、あるいは耕したものが「教養」や「文化」になるというのである。

イギリスでは、性別や階級を問わず、イギリス在住のすべての国民に心を耕し、「教養」を身につけることを求めている。「教養」を身につけた人が、真の市民になる。フランス革命の時代、フランスで市民は納税額の差によって能動的市民と受動的市民の 2 つに分けられ、前者のみに参政権が認められた。この区分は後に廃止されたが、イギリスにはこの区分が別の形で生きている。市民とは選挙権があるというだけの意味に終わるものではない。選挙権がある以上、市民はその権利にふさわしくふるまい、政治に関心を持たなければならない。関心を持っている市民が能動的市民と呼

ばれ、関心を持たず、自分の権利の主張ばかりする市民は受動的市民と見なされる。そのような通念があるため、イギリスでは、お茶の時間にも、一般市民が政治について熱く語る。政治論議のできない人は、イギリスでは能動的市民ではない、つまり真の「市民」ではない。能動的市民によって構成される国家こそが真の民主主義国家と見なされ、受動的市民が大多数を占める国家は民主主義国家の名に値しない。むしろ日本は真の民主主義国家とは呼ばれない。

イギリスには今日でも階級があるが、市民であるかぎり、イギリスの人々は原則的に平等である。この考えに立てば、人々は奴隷制度や人種差別を容認することはできない。さらに平等や人間への愛を尊重すれば、人はジェントルマン階級に属し

ていなくとも、おのずから「ジェントル」であるようになる。ジェントルマンシップを持つようになる。「ジェントル」(gentle)とは「やさしい」「高貴な」という意味である。イギリスという国は市民にジェントルマンシップを求める。だが、このジェントルマンシップは19世紀イギリスの帝国主義と明らかに齟齬を来している。高貴なやさしさを目指すジェントルマンシップは植民地主義の野蛮とまったく相いれない。おそらくここに、イギリスが植民地主義から手を切った真の理由がある。植民地を自ら手放すことによってイギリスはジェントルマンシップを守ろうとした。そしてそれはイギリス的文化を守ろうとする貴重な試みでもあったのである。

(エ) 地球環境汚染への取組み

地球環境汚染を克服するには長い年月を必要とする。清潔なるものを神聖視するのは日本人に特に強い美意識で、日本人は真っ先に、地球のクリーン化を目指して立ち上がらなければならない。

ジェントルマンシップを尊重するイギリスにおいてすら、植民地主義と決別するまでには長い年月を必要とした。同じことが地球環境汚染についても言えるにちがいない。産業革命以降、人類は石炭・石油というエネルギーを使い続けてきた。ダーティなエネルギーである。これに対し、今日では太陽光発電、風力発電などのクリーンなエネ

ルギーへの変換が求められている。ダーティは「汚濁」、クリーンは「清潔」である。そして「清潔」は弥生時代、屋内に入るときに靴を脱ぐようになって以来、日本人の美意識と文化意識の基盤を形づくってきた。そのような美意識が今日見直されなければならない。植民地主義との決別を決意させたのはイギリスのジェントルマンシップだった。ならば、地球の汚染を嫌悪し、地球のクリーン化を目指して立ち上がるべきなのは、清潔を神聖視する日本人なのではなからうか。今日、我々に課せられている課題はまことに大きいのである。

(高橋 義人)

2. 仏教の抱える現代的課題と将来的展望

(ア) 仏教離れと寺院の経営の悪化

多くの寺院の経営状況は厳しい。後継者不足もあって、世代を超えた寺院および仏教文化の継承は次第に困難になり、寺院の統廃合が進んでいる。仏教界は危機に瀕している。

しばしば「坊主丸儲け」などと揶揄されるように、世間一般では、仏教寺院は経済的に潤ってお

り、僧侶たちはさぞかし奢侈な生活をしているというイメージを持っているようであるが、現実は大きく異なる。『President Online』(2019年9月16日)では、ジャーナリストの鵜飼秀徳氏が、「4割が年収300万円以下」というお寺経営の厳しい現実を取りあげ「2040年までに寺社の3割は消滅する」と述べている。

2018年の日本全体の平均世帯年収が約550万円であることから考えれば、4割近くの寺院の家族は、その半分以下の収入しか寺院活動では稼ぐことができず、兼業や副業を余儀なくされていることになる。

すなわち、一部の有名観光寺院や人口増加地域を除き、多くの末寺は「寺院＝金持ち」ではなく、「寺院<中流階層」なのである。ではなぜ、経営状況が厳しいにもかかわらず、寺院の子息たちは跡を継いで住職になってきたのか。その多くは、先祖代々からの寺院を潰してはならないという責任感と使命感に基づいている。収入的観点から見れば一種の「やりがい搾取」ともいえる。そうした困難な状況において、「自分の代までは寺院

を守るが、子には寺院を継がせない」と、自らの代で廃寺を検討している住職も多い。こうした後継者不足のなかで、世代を超えた寺院および仏教文化の継承は困難な状況になりつつある。

そうした難況はコロナ禍、ポストコロナ時代にさらに進んでいくものと思われる。今後、多数の寺院が経営破綻へと向かい、黒字化が見込めない多くの寺院の統廃合が進んでいくことになるであろう。

こうした悪い流れに立ち向かおうとする動きも一部にはあるが、今後は、存続可能な寺院と、廃寺に向かう寺院との二極化が加速していくものと思われる。

(イ) なぜお寺の数はコンビニよりも多いのか

江戸幕府の「寺請制度」により江戸時代初期に仏教寺院が急増した。かつて仏教寺院は宗教機能のみならず、戸籍管理、教育、文化、エンターテインメント、カウンセリング、医療の機能をも担ってきたが、明治時代以降は日本社会における寺院の果たす役割は大いに減り、必要な寺院数も大幅に減少してしまった。

寺院の経営を圧迫する理由の1つとして、現在のわが国の寺院数が多すぎることが挙げられる。コンビニの総数が5万5000であるのに対し、7万7000もの仏教寺院が存在している。現代に生きる私たちにとっては、どう考えても仏教寺院のよりもコンビニの方が必要性が高いにもかかわらず、なぜ寺院という特殊な施設がコンビニよりも多く存在しているのだろうか。

その原因は、江戸時代初期の仏教寺院の急増によるものである。例えば、最大仏教宗派の1つである浄土真宗本願寺派（西本願寺）の寺院数は10,129寺（2020年4月1日現在）であるが、江戸初期には僅か1,000ヶ寺しか存在していなかった。

千葉乗隆氏『真宗教団の組織と制度』同朋舎、1978年）によると、西本願寺の末寺数は、室町時代には250程度しか存在していなかった。それが、江戸時代に入ってから大幅に急増していったようである。

- ・天文年間（1532-1555）：259寺
（*本願寺の東西分派前）

- ・元和九年（1623）：1,000寺
- ・元禄七年（1694）：8,337寺
- ・文化三年（1806）：9,699寺
- ・嘉永七年（1854）：10,264寺

特に、江戸前期の元和九年（1623年）から元禄七年（1694年）の間に、1,000ヶ寺から8,000ヶ寺以上にまで寺院数が急増している。他方、江戸中期から江戸末期にかけて寺院数は僅かにしか増えていない。

江戸初期の寺院数の急増の原因は、江戸幕府の「寺請制度」にほかならない。徳川幕府は慶長十七年（1612年）に禁教令を發布しキリスト教徒たちへの弾圧を強めたが、結果として島原の乱（1637-1638年）が勃発し、以後、同幕府はキリスト教徒の監視を徹底していった。

その際、幕府は、いわばキリスト教の商売敵であった仏教寺院に住民の戸籍管理を行わせ、管理機能を持たせた。以後、仏教寺院は、宗教機能のみならず、役所機能も保持するに至った。そうした事情から、コンビニ以上の数の寺院が創設されることになったのである。

すなわち、江戸時代には、キリスト教徒の監視のために「コンビニよりも数の多い」仏教寺院が必要だったのである。しかし、明治に入り、明治政府が行政組織を構築していくなかで、仏教寺院は役所機能を失うことになった。加えて廃仏毀釈によって、宗教的な権威も失墜していった。また、公教育の開始に伴い教育機能も失うことになっ

た。また、寺院は、様々な芸能や法要を通じて、近隣住民たちに娯楽を提供してきたが、文明開化とともに新たな文化や娯楽が多数登場したことで、伝統的な娯楽の価値は下がっていった。この時点で、日本社会における寺院の果たす役割が大いに減り、必要寺院数も大幅に減ったのである。

- ・**戸籍管理** → 役所が担うようになった
- ・**教育** → 学校教育が担うようになった
- ・**文化** → 近代化や国際化により寺院以外から

多様な文化が創出されるようになった

- ・**エンターテインメント機能** → 文明開化とともに娯楽の種類が増加していった
- ・**カウンセリング機能** → 医師やカウンセラーなどが担うようになっていった
- ・**医療機能** → 西洋型の医薬技術が主流になっていった
- ・**宗教機能** → 廃仏毀釈や第二次大戦後に仏教離れが加速

(ウ) 葬式仏教とお墓

檀家制度にもとづく葬儀と墓の存在により、明治期になっても仏教寺院の数は減らなかったが、近年はその縛りがゆるみ、寺院数も大幅に減少するものと予想される。

しかし、明治期以降も仏教寺院の数は減らなかった。もちろん日本の人口増加や経済発展による寺院収入の増加も一因だったのであろうが、加えて、檀家制度にもとづく葬儀と墓の存在が大きな要因であったものと思われる。

まず、「葬式仏教」は日本人の精神的通過儀礼において欠かせないものであった。民衆は、旦那寺との関係性を維持し、日ごろから寄付を続け、寺院を経済的に支援し続けてきた。お布施の負担額は大きいものの、通夜や葬儀は縁戚や近隣、職場関係の人々との交流の場でもあり、彼らとの付き

あいを維持するという重要な役割を持っていた。しかし、近年、職場や近所との付き合いを控える傾向があり、葬儀の規模は縮小され、或いは僧侶を呼ばない直葬が増加し、それとともに仏教の収入は減少することになった。

また、寺院との関係を断ち切れれば、寺院の墓地に建立した墓も撤去しなければならない。「先祖代々のお墓を守らなければならない」という使命感が、寺院と檀家との密接な関係を構築してきたために、これまでは寺院数が減少しにくかったという事情がある。しかし、現在、合同墓や樹木葬など、寺院や僧侶を介さずに納骨をできる設備が整うにつれ、墓にまつわるしがらみも減少してきている。このように、葬儀と墓の縛りが減っていくことで、今後、寺院の収入に伴い寺院数の大幅な減少が予想される。

(エ) 寺院経営の現状と未来予測

一般寺院の収入源は、葬儀、法要、墓地費用、年会費である。今後は経営状況により衰退していく寺院と、現状維持か発展していく寺院とに二極化していくであろう。

以上、日本の仏教の現状について考察したが、とりわけ寺院経営についてはネガティブな状況であることが明らかになった。最後に今後の展望について考えておきたい。

まず、寺院経営について、ポジティブな展望があるか否かということであるが、今後、衰退していく寺院と、現状維持、或いは発展していく寺院とに二極化していくものと思われる。

拝観料を主たる収入源とする一部の有名な観光寺院については、コロナ禍が落ち着き、国内旅行が再活性化するに伴い、今後も収入を維持できる可能性は高い。アフターコロナで海外旅行が減っていった場合には、逆に国内旅行が増え、発展する可能性もありうる。

他方、観光収入ではなく檀家からの寄付を主たる収入とする一般寺院に関しては、原則的に減収となり、衰退していくことになろう。一般寺院の主たる収入源は以下の4つである。

- ①葬儀
- ②年忌法要・月忌法要
- ③墓地の永代使用权の購入費用・永代使用料
- ④年会費（護寺費など）

葬儀は完全になくなることはないだろうが、規模は小さくなるであろうし、直葬が増えれば寺院の葬儀収入は減る。また、年忌法要（法事）についても、満中陰法要（49日）や一周忌までは存続する可能性は高いが、三回忌以降の年忌法要は減

少が予想される。月忌法要については大幅に減少すると思われる。墓地の販売・永代使用料は、合同墓や樹木葬の増加に伴い、大幅減が予想される。そうして菩提寺との関係性が希薄になるにつれ、年会費収入も大幅に減少していくであろう。

（オ）寺院経営の打開策

寺院経営の健全化を図るには、施設を簡素にしてランニングコストを下げ、新奇性・独創性を持たせて既存の収入源の差別化を図らなければならない。オンラインシステムを導入したり仏教融合ビジネスを展開したりして、仏教的なテイストを加えた産業との互恵的な関係を構築し、地域コミュニティのハブ機能を復活させなければならない。他方、ビジネス性を排し、高度な学問・修行に特化した本来の仏教寺院の誕生も待たれる。

すなわち、既存の収入形態にこだわる限り、寺院の経営は悪化の一途を辿ることになる。では、寺院経営の健全化のための方法はないのであろうか。

一つは支出を減らすことである。売り上げが減った企業は、赤字を削減するためにリストラや規模の縮小を行うが、寺院においても支出の削減を行うべきであろう。とはいえ、多くの寺院は家族経営のため人員リストラは困難である。よって、ハコものやインフラ、不要な経費を縮小することで、支出を削減するということになる。

バブル期までの寺院は、本堂や庫裡の大きさ、内装の豪華さなどが繁栄のバロメーターであった。今後の寺院は、より簡素な本堂や庫裡を建てることで、建設経費や維持経費を縮小することができる。また、自家用車や設備などの動産についても、より小規模かつ低額なものに変更することで、購入・維持経費を縮小することができるだろう。すなわち、寺院経営のランニングコストを下げるということである。

他方で、新たな収入源を確保していく必要がある。既存の形態での葬儀、法事、墓地、年会費収入の増加は期待しにくい状況であるため、それらに新奇性・独創性を持たせ、既存の収入形態との

差別化を図ることが考えられる。

例えば、オンラインでの（より低価格な）葬儀や法事を実施すれば、「斎場やお寺に行きたくはないが、簡単な葬儀や法事を安価で実施したい」といったニーズを取り込むことができるであろう。あるいは、VRなどを用いたサイバー寺院を作れば、メタバースなどとのコラボレーションもできるかもしれない。

また、通常の仏事ではなく、仏教融合ビジネスの展開も可能性をもつ。寺院にカフェやレストランを併設することで、通常のカフェやレストランとは異なる特殊性を出すこともできるであろう。マインドフルネスやヨガなどのスピリチュアル産業との連携を行うことも可能である。あるいは塾やカルチャーセンターなどの機能を持たせれば、本堂や庫裡の施設の有効活用が可能となる。

これらのビジネス・産業は、本来、非仏教的なものであるが、そこに仏教的なテイストを加えることで、ビジネス・産業の差別化にもなり、仏教の布教にもなり、宗教とビジネス・産業の互恵的な関係を構築することができる。また、地域住民がお寺を頻繁に訪れることで、寺院の地域コミュニティのハブ機能を復活させることもできる。そうした中から新たな仏教文化が誕生する可能性もあるし、仏教の意義や価値、更には、ビジネスのあり方や価値を再認識することも可能となるのではないか。

他方で、ビジネス的な要素を一切排した、高度な学問・修行を行う学問寺や修行寺なども誕生するかもしれない。圧倒的な学問や修行の質を提示することで、より多くのサポーターが集まり、本来の仏教寺院のあり方を提示してくれる。例えば、日本以外の仏教国に存在するような比丘・比丘尼の僧院が日本に誕生する可能性も出てくるかもしれない。

（熊谷 誠慈）

3. 伝統音楽の活性化

京都の音楽文化を継承し活性化させるには、まず専門的な音楽家の指導を依頼し、学校における伝統音楽の授業を強化しなければならない。京都の伝統音楽・芸能は寺社と一定の関係を有しているため、従来通りその関係を守るとともに、フェスティバル等での公演を通して京都の音楽文化を広く知らしめ、伝承の多様性を教えることが大切である。日本の音楽文化を海外に伝えるには、日本音楽の教員の海外派遣を制度化するような国の施策が望まれる。かりに国に先駆けて、京都府がそれを実施すれば、外国での日本音楽教育に裨益し、京都の芸能・芸術を再活性化することに大いに寄与するであろう。「縁」を活かして、新しい文化の創出に貢献することができるようになるにちがいない。

京都における音楽文化を更に盛んにし、さらに新しい音楽文化を作るために、京都で伝承されている日本音楽を、国内と国外の関係から考えることにする。まず、国内に関しては、第一に日本音楽と学校との関係を、第二に新しい脈絡の役割を考える。

第一は、学校と伝統音楽の関係を強化することである。2002年のカリキュラム改訂により、中学生は日本の楽器に触れることが決められた。しかし、日本では長い間、音楽教員養成のカリキュラムで日本音楽がわずかしこ扱われてこなかったため、現職の教員で日本音楽の指導ができる人材は極めて限定されている。そこで、多くの中学校は、日本音楽の指導を地域に住んでいる専門家を講師にして依頼することになる。しかし、その謝金は、専門家への敬意が感じられないほど、極めて少ない。私は、これを制度的に補正するために、国会議員に働きかけたが成功しなかった。今後は、府や市町村のレベルで、相応しい金額が支払えるような統一的な方針が作られることを期待したい。

もちろん、現職の音楽教員にワークショップを行うことも意味があるが、私の経験では、こうしたワークショップだけで教えるだけの能力を付けさせることはできないので、専門家に指導を依頼する必要である。また、中学校にピアノがなけ

れば大騒ぎになるが、箏や三味線などの日本楽器がなくても、問題にされない。こうした状況での教育に大きな意義をもつのが、「日本音楽の教育と研究をつなぐ会」（会長は川口明子・岩手大学教授）という組織の活動である。これは、音楽学研究者・演奏家・現職教員の集まりで、日本の楽器そのものの教育だけでなく、唱歌を教える方法を工夫してきた。ここでいう唱歌は、学校唱歌ではなく、口三味線のように、楽器の奏法を口で唱える方法である。唱歌は、雅楽の楽器、太鼓類、箏・三味線などの楽器ごとに決められていて、文字で記せば楽譜の役割をもち、口頭で実践されれば演奏になる。この研究会は、『唱歌で学ぶ日本音楽』DVDつき、2019年、音楽之友社）を出版しているので、これを参考に授業を構成することができる。この会の活動は、東日本が中心であるが、京都府の関係者がこれに参加することで、学校における日本音楽教育をさらに推し進めることができるであろう。

国内に関する第二の点は、日本音楽のための新しい脈絡の創出である。京都における伝統音楽・芸能の多くは、寺社と関係をもち、一定の脈絡に結びついているため、特定の時期に特定の場所で上演されるものが多い。こうした本来の脈絡はこれからも守られなければならない。しかし、自分たちの音楽を広く知らせるためには、本来の脈絡とは異なる時期と場所を選んで上演することができるはずである。フェスティバルの形式で、異なるジャンルが上演されれば、自分たちの伝承を見直すとともに、他の伝承を知る機会になる。これは、京都の伝承の多様性を知るとともに、伝承を確保することにつながる。

次に日本音楽と海外との関係を考える。日本音楽は海外でも聴かれ、演奏されている。尺八の演奏者だけでも海外に数千人いる。また、雅楽や箏曲を教えている大学が海外にもあるし、日本音楽を演奏している団体をもつ地域も多い。英語やスペイン語などによって能を実践しているグループが、ヨーロッパと南北アメリカにある。

能楽の諸流派が積極的に海外公演を行って、多くの聴衆を魅力しているように、京都の人々が京都の音楽を誇りに思うならば、それを積極的に、海外に知らせる努力を行えばよい。まず、現地と

国内の優れた仲介者を探して、海外公演を行うことであろう。次に、外国での日本音楽教育に積極的に関与することである。ヨーロッパやアメリカの優れた音楽大学（例えば、モスクワ音楽院、ワルシャワ音楽院、カリフォルニア大学ロサンゼルス校）は、日本音楽の演奏家が長期滞在して学生を指導することを希望している。すでに、日本語教育の教員の海外派遣は制度化されている。同じように、日本音楽の教員の海外派遣も国の文化政策として制度化されるべきであるが、いまだにその動きはない（徳丸吉彦「日本音楽を日本人だけのものにしないこと」、『文化庁月報』No. 460、平成19年1月号）。国に先駆けて、京都府や京都市がこれを実施し、例えば、柳川三味線による地歌の教育を海外で行い、その成果を日本で紹介する

機会を設ければ、それは京都における柳川三味線の再活性化にも寄与するであろう。

日本と海外との音楽による交流には、「縁」が必要である。日本という異国の音楽を聴こうとする聴衆がいること、あるいは、すでに日本音楽を実施している集団がいることなどが、縁の例である。ブラジルでは、日系人だけでなく、非日系の人々も、尺八に興味をもち、都山流尺八曲とともに、普化宗の伝統音楽も演奏している。また、ブラジルには尺八の材料になる種類の竹が栽培されている地域があるため、尺八作りも行われている。こうした縁を用いて、京都とブラジルの間の関係が強化されれば、それは、伝統の活性化とともに、新しい尺八文化の創出に貢献することになる。（徳丸 吉彦）

4. 社会的孤立と格差

人間は集団の中で協力関係を形成して、過酷な環境の中で生き残ってきた。社会的孤立や孤独感は、免疫システムに身体的炎症反応を引き起こし、長期的には幸福感を低減させ、高齢化とともに深刻な問題となり、社会的格差の顕在化が人とのつながりにも影響を与えている。

オンラインの仕組みは、孤立や格差の問題を生み出さないように工夫し、地域内でのネットワークづくりを援用していけば、孤立を克服し、新たな社会参加の契機となりうる。

社会的動物としての人間は、集団の中で協力関係を形成していくことにより、過酷な環境の中でも生き残ることを可能にしてきた。そのため、集団から離れ「孤独」になることは命の危険に近づくことであり、生理的にも「危険信号」が伝達される。例えば慢性的に孤独感を感じている人は、危機に備えた免疫身体的炎症反応を起こし、それゆえに様々な循環器系疾患へのリスクが高まることも示されている(Cole et al., 2015)。

社会的な孤立、あるいは孤独感は、高齢化が進み、所属する場所が薄れていく人々にとっては特に深刻な課題となっている。カシオッポらによる長期的な研究結果によると、孤独感は数年後の幸福感を低減させる(Cacioppo et al 2008)。

人とのつながりは、経済的な豊かさとは独立に得られるように思われる。しかしながら格差が顕在化する社会構造においては、人とのつながりさえも、経済的な豊かさと関連してしまうことがある。格差が拡大するアメリカの社会においては、家庭の経済状況や社会的地位が、どのように多様な他者とつながることができるのかということと関連している(パットナム, 2017)。結果的に社会的競争に取り残された人たちが、より孤独感を増し、それが社会不安の増大にもつながるというネガティブ・ループが顕在化している。ピケットとウィルキンソンによる「格差は心を壊す：比較という呪縛」という書籍の中では、格差がもたらす問題について統計情報を用いて述べられている。格差の上位にある人も「さらなる上流」を目指すようになり、いつも自分の状態が十分であるのかという懸念や不安を抱くようになる。一連の議論の中で、社会不安や自信喪失といったアメリカの社会的状態の源泉は物質主義であることが論じられている。さらに、フェイクニュースあるいは政治的な態度の分断とSNSやメディア媒体の分裂化が重なり合っている。SNS上では互いに自分の意見に類似した人だけを選定してつながり、情報を選択できるため、ますます分断化が進んでいる。

こうしたアメリカの状況は他人事ではなく、現

代の日本社会においても徐々に格差が顕在化するようになり、社会的つながりの程度や頻度にも影響を与えつつある。

たとえば、孤立を克服する手法として、オンラインでのつながりにより人間関係を代替させる可能性について議論されることがある。しかしこの点においては、ツールをうまく使うことで、孤立と格差の問題を生み出さないようにする工夫が必須である。インターネットやオンラインサービスの発展によって、人々の交流範囲は地理的な制約を超えて広がっている一方で、「同じ考えを持つ者」同士でのみつながりやすくなり、ある意味では多様性を失われ、自分と異なる考えの人たちと関わらないようにする、あるいは攻撃するというような、排他性ももちあわせるようになった側面もあるからだ。様々な形で個人の生活に「選択肢」が増えていることには個人の短期的な快楽を最適化するうえでは有効であるが、長期的に見れば、他者の状態を顧みない思いやり・共感の欠如の方向にもいってしまいかねない。こうした中で、うまくオンラインのサービスやツールを地域内でのネットワークづくりに援用するような手法を取り入れる必要があるだろう。

たとえばオンラインサービスを用いて、新たなつながりが発見されたり、自分のもっているスキルが思わぬところで必要とされていることなどを知ったりできることは良い機会でもあり、多様な人々の社会参加を促す手段にもなりうる。不登校の子供や、社会的活動から一時的に離脱している人、あるいは定年退職後の人など、これまでう

まく人とつながる機会が提供されてこなかった人たちにとっては、オンラインの仕組みを使って関係性を広げることができることは新たな社会参加の契機となりうる。将来のスマートシティは社会的包摂の概念と連動して考えていくことが必要であろう。

<引用文献>

Cole, S. W., Levine, M. E., Arevalo, J. M., Ma, J., Weir, D. R., & Crimmins, E. M. (2015). Loneliness, eudaimonia, and the human conserved transcriptional response to adversity. *Psychoneuroendocrinology*, 62, 11-17.

Cacioppo, J. T., Fowler, J. H., & Christakis, N. A. (2009). Alone in the crowd: the structure and spread of loneliness in a large social network. *Journal of personality and social psychology*, 97(6), 977-991.

ロバート・パットナム(2017)「われらの子ども：米国における機会格差の拡大」柴内康文訳、創元社

リチャード ウィルキンソン, ケイト ピケット (2020)「格差は心を壊す 比較という呪縛」東洋経済新報社

(内田 由紀子)

第五章 スマートシティに必要な文化基盤

1. 社会関係資本と文化資本

社会関係資本は「つながりの力」であり、幸福感や生きがいを支えている。「多様な他者」と「緩く」つながることが重要だが、実際に良い形でつながりを維持し機能させるのは難しく、そのためには「つなぎ手」が必要で、ネットワークのハブになれる「コーディネーター」の育成の仕組みが肝要である。

文化資本とは、言葉遣いや立ち居振る舞い、文芸などに触れる教養や素養であり、幸福や社会的地位に関わっている。地域の公共空間に人々がアクセス可能な様々な文化資本があるかどうか重要で、そのような空間づくりと機会の提供も大切である。

社会関係資本(ソーシャル・キャピタル)とは、「つながりの力」である。頼ることができる親しい人の存在や、何か自分の生活や人生、意思決定において重要な情報をもたらしてくれる人の存在など、様々な形で幸福感や生きがいを支えるものである。社会関係資本には同じグループ内(地域や近い人、職場の同僚など)で発生する「結束型」と、遠くにいる他者や違うグループ(地域外、他の職場・職種)とのつながりである「橋渡し型」の二つがある。「多様なつながり」は橋渡し型であり、新たな情報や機会を得ることにつながる。結束型は安心感や互助の基盤となる「居場所」感につながるものである。

ロバート・パットナム(2006)は社会関係資本を「個人間のつながり、すなわち社会的なネットワークおよびそこから生じる互酬性と信頼性の規範」として定義しており、個人がもつ資源であると同時に、社会や場が存在する「もちつもたれつ」の期待意識や規範意識、共有理解などの、よりマクロ(集合的)なものとしても想定することができる。地域活動の中で言えば、力をあわせることで課題を解決することや、集まることで楽しみを得ること、危険を察知し、知らせ合うような仕組みを持つことで犯罪や災害のリスクを減らすことができる。例えば個人としては近所にいる数名としかつながっていないくとも、地域全体で

しっかりとしたつながりの基盤が作られており、たとえばその数名が多くの人とつながっている場合には、「自分の知り合いの知り合い」レベルには多くの人が存在することになる。直接に知らなくても、そうした「知り合いの知り合い」から得られるサポートや情報は十分に価値があるものとなる。こうしたことから、たとえば高齢者が「つながりが上手く機能している」地域に住むことによって、自分自身が特にたくさんのつながりを持っていなくても、健康度が上がることなども示されている(Kawachi & Berkman, 2000)。

社会関係資本については、つながりはどこにでもあり、すぐに活用できるものだという考え方もあるが、実際には良い形でつながりを維持し、機能させるのは難しい。特にコロナ禍で地域でのイベントや行事、お互いに顔を合わせて話をしたり食事をしたりする機会が減ってしまっている中で、つながりをうまく維持することは困難になりつつある。また、どうしてもつながりは「自分がよく知っていて、安心できる他者」との閉じたものになりがちである。社会疫学の研究から岡檀は「生き心地の良い町」という著書の中で、弱い紐帯のポジティブな効果と、強い紐帯がもたらすネガティブな効果を同時に描き出している通り、実際には「多様な他者」と「緩く」つながることも重要なのだが、なかなかそれはうまくいかないことも多い。同じような職業、年齢層、価値観の人とだけ居心地よくつながってしまうことによって、かえってそれが「排除されたくない」という思いによる不安につながったり、その不安の裏返しとして外からやってくる人を排除したりしてしまうという排他性さえも招いてしまうことがある。こうしたことを避け、良い形でつながりを維持したり機能させるためには、「つなぎ手」が必要である(内田・竹村, 2012)。つながりは放っておいてできるものではない。地域のつながりは高いにもかかわらず、そのつながりが住民の幸福を高める形では活かされていないということもある。つながりを重要な資源として捉え直し、そこに「コーディネーター」の存在を育成することに

より仕組みづくりを進めることが肝要である。弱い紐帯をうまく結びつけ、ネットワークのハブになれる人はそう多くないのである。

さて文化資本は社会関係資本と関連しつつも異なる概念である。社会学者のブルデューの定義によれば、文化資本は言葉遣いや立ち居振る舞い、音楽・文学・芸術作品などに触れる教養や素養と定義することができる。いわゆる収入などの経済資本ではないけれども、人々の幸福や社会的地位とも関わるとい点においては社会関係資本と共通する要素でもある。特に文化資本は再生産の力が働きやすいことも指摘されているが、例えば子供を育てるときにその子供に文化資本を得る機会を十分に与えるかどうかは親の育て方や親自身も持つ文化資本とも関わるとされる(家に書籍や楽器があるかどうかなど)。さらには地域の中の公共空間に、博物館や音楽ホール、図書館など、文化資本にアクセスすることができる機会があるのかどうかといったことも重要になってくる。家庭環境では文化資本が整えられていなくとも、公共空間があれば、文化資本をより多く持つ他者とのつながり(社会関係資本)を形成することで、自らが文化資本を手に入れることも可能に

なるともいえる。人々にとって「敷居が高い」文化資本だけではなく、様々な人がアクセス可能な文化資本が街のいたるところに存在し、入り口も多様であること一例えば音楽や書籍、絵画やアート、それぞれに自分がアクセスしやすい文化の入りを口を持つことができるような空間づくりが大切ではないだろうか。

<引用文献>

パットナム・ロバート(2006) 「孤独なボウリング—米国コミュニティの崩壊と再生」 柏書房

Kawachi, I., & Berkman, L. (2000). Social cohesion, social capital, and health. *Social epidemiology*, 174(7), 290-319.

岡檀(2013) 「生き心地の良い町」 講談社

内田由紀子・竹村幸祐(2012) 「農をつなぐ仕事〜普及指導員とコミュニティへの社会心理学的アプローチ〜」 創森社

(内田 由紀子)

2. スマートシティにおける文化および宗教

ICT・データ利活用型スマートシティの主なテーマは環境・エネルギー・交通・通信・教育・医療・健康となっている。しかし、物質的・情報技術的な拡張だけでは人は真に幸せになることはできず、「こころ」と深く関係する文化や社会、人の絆を考えていくべきである。

京都の街はスマートシティとは対極的な一面も持っており、京都にすでにある宗教、伝統文化、学問を個性として活かしていけば、「精神的な豊かさを兼ね備えた個性的なスマートシティ」となりうる。

現在、日本政府は Society5.0 という新たな社会を目指し、科学技術開発を進めている。これまでの情報社会(Society4.0)では、知識や情報が共有しきれないために情報の分断による不

都合が多々生じてきたが、Society5.0 ではサイバー空間とフィジカル空間を高度に融合することで、IoTによって全ての人とモノが繋がり、より便利で豊かな社会が構築されていくことになる。特に高齢者にとっては、身体的負担を軽減し、健康で負荷のない生活を過ごせるようになることが予想され、持続可能な高齢社会の実現に益するところは大きい。また、都市部と地方での教育格差や情報格差がなくなっていけば、東京一極集中の解消にもつながることが大いに期待される。

しかし、このまま物質的・情報技術的な拡張を続けていったとしても、それだけで人は真に幸せになることができるのであろうか。例えば、情報技術がさらに発展しても、そこに情報格差が存在していれば、不満や苦悩を感じる人々は出続けるであろう。また、物質的發展にしても然りで、自らが物質的に豊かになっても周囲がさらに豊か

になると、その差に不満を感じるようになるであろうし、根本的な苦悩の解決にはならない。

よって、Society5.0による技術拡張を推進する一方で、その先に、「こころ」という問題についてしっかりと考えていく必要があるだろう。同時に、「こころ」と深く関係すると思われる文化や社会、人の絆といったものについてもしっかりと考えていくべきである。

その際、文化都市・宗教都市という点で、京都の果たす役割というのはますます大きくなっていくものと予想される。

国土交通省によれば、スマートシティの定義は、「都市の抱える諸課題に対して、ICT等の新技術を活用しつつ、マネジメント（計画、整備、管理・運営等）が行われ、全体最適化が図られる持続可能な都市または地区」とされている。ICT・データ利活用型スマートシティのテーマは、「環境」、「エネルギー」、「交通」、「通信」、「教育」、「医療・健康」などが主となっているが、文化や宗教的営みについては後回しにされている。

スマートシティに対しては、高度なICTのテクノロジーを用いた、便利で効率のよい、合理的な生活のできる街という、格好良くスマートな印象を持ちがちであるが、その一方で、少し冷たい感じ、寂しい感じを覚えるのは筆者だけであろうか。やはり、そこに「文化」や、人との絆、人間らしさ、あるいは人間臭さといったものが感じられないように思う。人間は非合理的な生物であるので、その非合理的な生物が、いわゆる合理的な街の中に押し込められてしまうと、逆に息苦しさを感じるのではなかろうか。

その点、京都という街は、スマートシティとは対極な一面を持つように思われる。例えば、道が狭いなど、必ずしも合理的ではない部分があるが、そういう一種の不便なところから、各自が工夫を凝らし、新たなアイデアが生まれ、そこから独創的な思想や文化が生まれてくる可能性がある。そういう意味で、あまりスマート過ぎないスマートシティ、すなわち適度な不便さを持ち合わせた良い塩梅のスマートシティを作ることができれば、より人間らしい生活を過ごしやすくなり、イノベーションも起こりやすくなるのではないか。

また、京都という街を活かす際に、宗教、伝統文化、そして学問は大きな武器になるであろう。

情報化、グローバル化が進んでいき、見かけは合理的に整理されていけばいくほど、「個性」を發揮することは難しくなる。合理化を追及し脱個性化が進む中で、「非合理的」な（すなわち非画一的な）宗教、伝統、純粋学問を「個性」として残していくことができれば、京都は「精神的豊かさを兼ね備えた個性的なスマートシティ」となりうるであろう。

特に、新たな土地にゼロからスマートシティをつくる場合には、（宗教・宗派の選定や、施設のミッションや意義、宗教施設の構築に対する公金の支出の問題などもあり、）他のインフラや施設に比べて宗教施設を作ることは容易ではない。

となれば、新たな土地にゼロからスマートシティを創るというよりも、すでに豊饒な宗教文化を有する都市をスマートシティ化していく方がより「スマート」であろう。日本的な宗教文化と最先端テクノロジーが融合したスマートシティは、和洋折衷に長けた日本ならではの特徴として強い個性を發揮できる可能性がある。

また、今後、Society5.0が進んでいけば、人々は様々な雑用から解放され、独創的な活動に割くことのできる時間が増えていくものと予想される。似た状況が古代ギリシャ（のポリス市民）にも存在していた。ギリシャの哲学や様々な学術が生まれてきた、あるいは中世でいろいろな学問が生まれてきた背景には、ポリス市民や貴族などが多くの余暇を持ち、創作や思考に割く時間を多く持っていたということがあるだろう。そうした未来社会においては、京都の学問都市としての発展可能性も大いに期待される。

Society5.0に移行するなかで便利化が進み、市民が労働から解放され、非労働時間が増えていったとしても、苦悩や不安などのネガティブ感情はなくなるであろうし、逆に、夢や生きがいなども決してなくなるであろう。圧倒的な情報量に埋没してしまうのではなく、生身の人間や感情と向き合いながら思考を凝らしていくことで、精神的な発展も期待できよう。その意味でも、ますます、文化や精神性の意義が重要になってくるであろうし、京都の果たす役割は大きくなっていくであろう。

（熊谷 誠慈）

3. 芸術概念の拡大

芸術の多様性を守るためには、芸術概念の拡大が必要で、創作と伝統曲の演奏とは相互依存の関係にあり、伝統音楽は固定したものではなく、変化を含みながら伝承され、新しい文化を創出してきた。スマートシティの新しい技術が文化の多様性を確保するために活用され、個人の好みに合わせて多様な芸術を選び、容易に接近できるようなシステムが構築されることを期待している。

これからの社会がスマートシティの方向へ動く場合、新しい技術が文化の単純化と統一性ではなく、多様性を確保することに貢献することが望まれる。芸術に関しても、個人が自分の好みであったものを多様な芸術から選び、しかもそれらに今よりも容易に接近できるシステムが構築されることが期待される。

芸術の多様性を守るためには、芸術概念の拡大が必要である。定評のある芸術の立場から、「あんなものは芸術ではない」と判断することがよく行われているが、こうした断定を退けて、新しい試みを認める態度を育成しなければならない。そうでないと、例えばユネスコの無形文化遺産に登録された芸術だけを評価することになり、地域や前衛的な芸術が無視されてしまうからである。

これに関係するのが、伝統に対する考え方である。私は、第三章において、地歌・箏曲の新作が重要であることを指摘した。京都の音楽家たちが江戸時代に作った作品は古典として伝承されているが、明治時代の作品も明治新曲として重要なレパートリーとなっている。こうした創作活動が、演奏水準を高めてきたのである。このことは、創作と伝統曲の演奏とが相互依存であることを示している。

地歌・箏曲のような近世邦楽に関して、最初期に創作されたレパートリーだけがそのまま伝承されていると考えている人がいるが、これは誤りであって、近世邦楽の諸ジャンルはつねに新しい様式による作品をその伝承に加えてきたのである。また、古いものだけを演奏していればよいと考える人もいる。その一例が永井荷風（1879－1959）で、箏曲の演奏家は組歌が弾ければよいと

いう趣旨をその日記（『断腸亭日乗』昭和3年正月18日）に記している。

彼がいう組歌とは近世初頭に八橋検校（1614－1685）が形成した箏組歌のことで、典雅な歌詞を弾き歌いするものを指す。確かに箏組歌は、江戸時代から現代まで専門家が学ぶべきもので、極めて重要なものであるが、荷風が聴いたはずの箏組歌の演奏家たちは、箏組歌以降に生まれたレパートリーも演奏して、箏組歌の演奏水準を保っていたのである。また、彼は、上と同じの日の日記に「江戸の音楽は既に完成した藝術なり、今日新曲をつくらむと欲するは徒に蛇足を添ゆるに過ぎず、労多くして功なきものなり」とも記している。この意見は、八橋検校以降に生まれた多様な箏曲を無視するもので、これを雅楽に敷衍すれば、アジア大陸から導入されたレパートリーだけで十分で、《越天楽》のように日本人が平安時代に作った作品は不要ということになるであろう。

しかし、優れた音楽家の仕事を振り返ると、すでに述べたように、創作と伝統曲の演奏が相互依存であることがはっきりする。荷風から《行く秋》という新曲のために歌詞を提供された中能島欣一（1904－1984）は、極めて前衛的な作品を作曲したが、古典の優れた演奏家であった。また、谷崎潤一郎（1886－1965）が地歌を師事した菊原琴治（1878－1944）、そして、父が記憶してしたレパートリーを楽譜として公刊（菊原初子『野川流・古生田流 地歌・箏曲 組歌楽譜全集』1987、白水社）した菊原初子（1988－2001）も、箏組歌を含む膨大なレパートリーを演奏するとともに、創作を行っている。菊原親子は箏組歌だけを演奏していたわけではない。

このように考えると、伝統音楽が決して固定されたものでなく、変化を含みながら伝承されてきたことが明らかになる。新しい文化を創出するためには、こうした伝統観が必要である。

私は、スマートシティの新しい技術が、人びとに対して、楽譜のある音楽にも楽譜のない音楽にも接近する機会を与え、さらに、世界にはいまだ接近できない音楽（あるいは、知られていない音楽）があることを知らせることを期待する。

（徳丸 吉彦）

4. 古都が文化を育てる

(ア) まちづくりにおける文化と文明

文明と文化は必ずしも対立するものではなく、両者の共存はある程度可能だが、まちづくりにおいては、近代文明と伝統文化のどちらを取るかで、町の外観は全く異なるものになる。明治初期の京都では、政府の「文明開化」政策に忠実に近代化を推し進めた榎村正直の下、廃仏毀釈や上知令の施行などもあって、京都からは緑が失われ、京都の美観は大いに損なわれた。明治時代初期の京都には、文明開化の負の側面を見ることが出来る。

『非政治的人間の考察』のなかで作家トーマス・マンは文明と文化を対立的に捉え、フランスを文明の国、ドイツを文化の国と呼んだ。今日からみると、フランスとドイツのこの対立的な把握は誤りで、文明と文化を二項対立で捉えるのも正しくない。前述したように、文明と文化は必ずしも対立するものではなく、両者の共存は可能である。

しかし両者を二項対立として捉えなければならぬこともある。その顕著な一例がまちづくりである。高層ビルがいくつも林立した町は近代文明都市と呼ばれ、反対に、自然や伝統的木造家屋を大切に守っている古都は伝統文化の街並みを自慢する。この場合、文明と文化は相容れない。前者では近代的な高層ビル街が人々を惹きつけ、後者では古都を包む自然や伝統文化が観光客を魅了する。近代文明か伝統文化か、どちらを取るかで、町の外観はまったく異なるものになる。そしてこの二つの異なるまちづくり策が真っ向から衝突したのが、明治初期の京都だった。

江戸時代、京都の寺院と神社は広大な寺社領を有していた。その領地のうち境内を除く多くの部分を、明治新政府は明治4年と明治8年の二回の上知令によって接收した。

上知令で寺院の領地はどれほど減ったのか。次表で示そう。

寺院名	上知令以前の領地 (坪)	上知令以後の領地 (坪)
清水寺	156,463	13,887
金閣寺	720,000	270,000
鞍馬寺	357,000	24,000
高台寺	95,047	15,515
相国寺	70,000	27,000
大徳寺	69,000	24,000
知恩院	60,000	44,000
建仁寺	54,000	24,000
東本願寺	46,614	18,600
誓願寺	6,500	1,700

明治政府は上知令で取り上げた土地を民間に払い下げるとともに、それで得た資金を殖産興業と軍事力増強に充て、「文明開化」に役立てようとした。京都には、木戸孝允(長州藩)の腹心の榎村正直が送り込まれ、彼は第二代京都府知事になった。初代京都府知事(1868-75)は公家の長谷信篤だったが、その間も榎村は実質的に京都府政を牛耳っていた。長谷知事が退任すると、榎村は1875年、京都府権知事に、そして1877年、第二代京都府知事(1875-1881年)に就任した。彼は祇園社を八坂神社に、北野天満宮を北野神社に改名するとともに、当時盛んだった廃仏毀釈の運動にも熱心で、寺院の廃止・仏像の破壊を容認した。それどころか彼は三月と五月の節句、七月の七夕、五山の送り火、精霊流し、地蔵盆、盆踊りまでも仏教的だという理由で禁じた。さすがに反対の声は京都で大きく、五山の送り火等は、榎村が知事を退任するとともに復活した。榎村が京都府知事として行った近代化政策には、①小学校の開設(明治2年)、②舎蜜局(官営の理化学学校、旧制高校の前身)の創建(明治3年)、③京都博覧会の開催(明治4年)、④都をどりの創設(明治5年)、⑤新京極の造営(明治5年)、⑥女紅場の創建(明治5年)などがある。彼は、明治政府の意向を忠実に実行する優秀な「文明開化」推進者だった。廃仏毀釈を後押ししたのも、上知令の施行に熱心だったのも、榎村だった。だが、「文明開化」を推し進める榎村府政の下、京都三山は次々と禿山と化し、京都の美観は大いに損なわれた。

(イ) 開発か保存か——北垣国道の決断

第三代京都府知事の北垣国道は、京都を伝統文化の息づく山紫水明の古都として守ろうとした。彼が打ち出したのは、京都市の景観保全のための京都市の広範な公園化計画だった。彼は、榎村の強引な近代文明化を改め、府民の声に耳を傾けて民主的な府政を心がけ、琵琶湖疎水建設などの京都三大事業を率い、京都商工会議所を創設した。今日の京都は基本的に北垣のこの政策を受け継いでいる。

禿山となった京都三山を見て、心を傷めていた人のひとりに北垣国道がいる。北垣は、1881年、第三代京都府知事に就任するとともに、榎村とは正反対の政策を打ち出し、京都市の景観保全に積極的に乗り出した。京都はあくまでも山紫水明の都でなければならない。北垣はそう主張した。今日、京都は京都三山や鴨川の眺めの美しい古都として知られているが、このようなまちづくりを行ったのは北垣である。榎村が京都を東京に負けない模範的な近代文明の町にしようとしたのに対して、北垣は京都をあくまでも伝統文化の息づく山紫水明の古都として守ろうとした。

日本中が「文明開化」を目指していたなかで、北垣のように古い日本文化、古都の景観を守ろうとするのがどれほど至難だったか、今日では想像することさえ難しい。北垣の周囲にいたのは西洋かぶれの近代主義者ばかりだった。しかも明治元年に明治政府が発布した神仏分離令のせいで廃仏毀釈の運動は異常に高まり、多くの仏教寺院が襲撃され、数多の仏像・仏具が破壊・焼却された。1960-70年代の中国の文化大革命で古い伝統文化の多くが破壊されたことはよく知られているが、それと同じような破壊行為が明治時代の日本でもまかり通っていた。「文明開化」の掛け声の下、それまであった伝統文化の多く、後代だったら国宝に指定されたにちがいない多くのものが破壊されてしまったのである。

最初の大規模な廃仏毀釈運動が起きたのは滋賀県の日吉大社においてだった。日吉大社は比叡山の山麓にあり、延暦寺によって管理されていた。ところが神仏分離令が発布されると、「神威隊」と名乗る武装した一隊100余名がここに押しかけ、124点もの仏像・経典を叩き割り、焼却した。彼ら

を率いたのは、樹下茂国という日吉大社の社司、平田篤胤の復古神道の過激な推進者だった。樹下茂国は岩倉具視と昵懇の仲にあり、廃仏毀釈の運動を明治政府は明らかに黙認していた。

むろん京都も廃仏毀釈運動の波から免れることはできなかった。かつて北野天満宮の境内には仏堂があった。それも取り壊された。北野天満宮は菅原道真を祭神として祀る神社である。ところがここにあった菅原道真の自作とされる十一面観音像は妙心寺塔頭の金台寺に売却され、本殿内陣にあり、人々の尊崇の的だった「菅公御襟懸守護の仏舍利」も京北町の常照皇寺に移された。今では知る人も少ないが、北野天満宮はそのご神体ともいべき心臓部を失ってしまったのである。

京都では、供養塔である石塔婆を道路の下敷に、路傍の石仏を踏石に使われるなどという暴挙が数かぎりなく行なわれた。明治時代の京都でもこのような文化弾圧が日常的にまかり通っていたのである。

清水寺で仁王門の下をくぐらず、成就院に向って左手を行くと、途中、右手に多くの地蔵が立ち並んでいるところがある。これらの地蔵は廃仏毀釈で市中にうち捨てられていたが、それを憂えた京都市民によってここに持ち運ばれたのである。そのおかげでここは今や人気の写真撮影スポットになっている。

京都は王政復古のお膝元であるだけに、神仏分離・廃仏毀釈の運動はことさら激しかった。神仏分離と廃仏毀釈とは本来無関係だが、文明開化を旗印にする新政府の一部は廃仏毀釈を黙認していた。そういう状況下で廃仏毀釈の運動を過激化したのは、神道の神職たちと民衆だった。一般民衆が仏像の破壊・焼却という犯罪行為に進んで手を染めていたのである。

明治4年と明治8年の二度にわたる上知令の発布により、古都の破壊はさらに進んだ。上知令発布後、京都三山のかつての社寺林では乱伐と盗伐が進んだ。乱伐された後、禿山となった東山はやがてアカマツ林となった。アカマツは痩せた土地に生育するからである。アカマツ林としての東山という我々のイメージは、じつは明治以降に生まれたものである。

乱伐によって無残な姿となった東山を見て、政

府は明治15年に社寺境内伐木制限、明治18年に社寺境内立木竹伐木採心得、明治30年の森林法などを次々と発布し、森林の禁伐を命じた。だが、それは森林の消極的保全策にすぎなかった。このような消極的な森林管理案では京都の自然は守れない。そう思ったのが北垣国道だった。北垣が知事になると、京都府は京都市名勝地の公園化計画を打ち出した。公園にすれば、森林を保護管理することが容易になるからである。北垣は榎村前知事の強引な近代文明化を改め、京都府議会や府民の声に耳を傾け、民主的な府政を心がけた。琵琶湖疎水建設などの近代京都三大事業を率い、京都商工会議所を創設したのも北垣である。明治22年、北垣は府の臨時市部会で青蓮院から大仏にかけての東山一帯を公園として保存したいという意向を発表した。国有林であるかぎり、森林の伐木

が禁じられるだけで、京都三山の景観は真に守られない。真に守るにはここを巨大な公園に指定し、積極的に京都三山の手入れをしなければならないと考えたのである。

京都三山全体を公園に指定することはできなかったが、明治19年に円山公園、明治39年に嵐山中之島公園、大正元年に亀山公園が、現状維持のままとはいえ、とりあえずは公園として指定された。これが京都公園化計画実施の第一歩である。京都の広範な地域を公園にしようとする計画は、1918年の京都市都市計画案の原案のなかの、京都は「日本ノ大公園」という言葉によく表れている。東京や大阪が人工的な「都市」であるとすれば、京都は町全体が風光明媚な「公園」だというのである。

(ウ) 京都の緑と街並みを守る

京都市の公園化計画は、京都都市計画区域指定、京都風致地区指定、京都府景観条例に継承されている。京都は、ヨーロッパの町のように都市が自然と美しく調和する例の先駆けとなった。今日、京都が美しい古都と呼ばれるのは、京都経済の発展にとって名勝地や文化こそ重要なのだと説いた北垣国道の努力のおかげである。古い街並みを守るには、外観は古いままに残し、内部空間だけを近代的にするような工夫が必要である。美しい町があってこそ、文化は生まれる。町の古くて美しい街並みは日本文化創出のための基本的前提である。

この公園化計画はその後、大正11年の京都都市計画区域指定、昭和5年の京都風致地区指定へと受け継がれていった。やがて京都三山は風致地区として指定された。風致地区指定は、京都の大部分を大公園にするという北垣国道の構想を継承している。昭和8年の「公園計画基準」の提示に際して市の関係者は、「市中に山野あり。むしろ『田舎に京あり』の形態こそ本市現在の姿であり、同時に又本市将来の環境でなければならぬと思ふ」と報告している。ヨーロッパにはハイデルベルク、ザルツブルク、コッツウォルズなど、緑が町を包み、町と自然がひとつになった文化的景観は珍しくないが、日本では京都が、都市が自然と美しく

調和する例の先駆けとなった。今日、京都が美しい古都と呼ばれるようになったのは、京都の町をこよなく愛した北垣国道の努力の賜物である。

京都の景観が美しいのは、京都三山・鴨川・桂川という自然と、社寺の歴史的建造物や木造の京町家が一体化しているからである。近代化のため、経済発展のためだからといって、大公園としての京都、風致地区としての京都の景観を妨げる建造物をゆめゆめ許してはならない。この認識は今日では常識と化しているが、こういう認識も北垣知事以降に生まれた。文化大革命時の中国と同じように、明治政府が復古神道、文明開化というイデオロギーに凝り固まり、自国の美しい自然や文化が破壊されていくのをただ傍観していたとすれば、北垣やその後継者は文明開化の波に抗し、京都の自然と文化を必死に守ろうとしたのである。

明治23年2月8日、北垣国道は円山公園内の中村楼に京都市・京都府の幹部を集め、京都の名勝地の保存について演説した。ここで北垣は説いている。京都には金閣・銀閣などの名勝地があるから人が多数集まる、自分の前の時代は経済のことしか考えなかったが、じつは京都経済の発展にとっては名勝地や文化こそが重要なのだ、と。こう言って彼は、名前こそ出さなかったものの、前任者の榎村正直の政策をはっきりと批判した。

経済偏重だった第二代知事榎村正直が自然美

や文化にほとんど目もくれず、ただひたすら文明開化を目指したのに対して、北垣国道が打ち出した政策は自然との調和、文化的景観、まちづくりといった今日の京都の都市計画の方向を決した。現在の京都府政・市政は、北垣が140年近く前に敷いた路線を基本的に継承しているのである。

2007年の京都府景観条例も北垣のまちづくり策の延長線上にある。景観条例ができたことにより、建物を建造する際には建物の高さ、デザイン、色が規制されるようになった。これは画期的な政策であるとしてマスコミで賞賛されたが、他方、遅すぎたと言う人もいる。ヨーロッパではつとに当たり前のことだったからである。ニュータウンは別だが、ヨーロッパの多くの町では歴史的な街並みを残すことが最重視される。街並みのなかに建てる家は、すでに立っている古い家々と高さが同じでなければいけない。屋根の葺き方も同じでなければいけない。家のファサード（建物前面）も、すでに立っている家々と調和するものでなければいけない。ヨーロッパでは使いにくくなった古民家を建て替えようとしても簡単には許されず、内部を近代的にして、ファサードは残すように指示される。さらに一戸建ての家には大きな庭をつくり、樹々を植えるように言われる。樹々の数まで指定される。このようにヨーロッパでは古都の古い街並みを守ろうとする姿勢がきわめて明確で、そのためやかましいほどの建築制限がある。京都の景観条例は日本においてこそ画期的なものだったが、ヨーロッパの基準からしたらまだとても生ぬるいのである。

ヨーロッパが厳しい建築制限を設けているのは、古都の街並みという文化的景観を守るためである。古い街並み一帯を取り壊し、大きな高層マンションを建てたら、住民の生活は便利になるかもしれないが、しかしそこにはかつてあったようなしっとりとした町の味わい、軒先に隣家が見えるような親しみがもはやなく、どこか落ち着かなさを覚えるにちがいない。それは、新宿副都心の超高層ビル内で働くサラリーマンたちが、勤務後、ビル内の小ぎれいな飲み屋には行かず、鉄道ガード下の汚い飲み屋街を訪れることからわかる。

しっとりとした味わい、ほっとできるような親しみやすさをつくるのは古い歴史的街並み、伝統を感じさせる古色である。このように文化は古い伝統を大事にする。他方、文明にとって重要な

は新しさ、機能性である。ここに文化と文明の対立が生まれる。新しさ、機能性を重視しているのがアメリカの町々であるとすれば、ヨーロッパの町々は古い伝統を頑固なまでに守ろうとする。超高層ビルの立ち並ぶ都市が高度文明の象徴となるのに対して、高層ビル建設を許さないヨーロッパの町は文化の香り高い古都となるのである。

戦後日本はアメリカの占領下、アメリカ風のまちづくりのみを模範とし、ヨーロッパのようなまちづくりの道を選ぶことができなかった。アメリカのような文明国家を目指し、大きな自動車通りをつくり、高層ビルを建てることばかり目指した。ヨーロッパのように、伝統文化を育み発展させることに国費を投じなかった。ここに、戦後日本の文化衰退の大きな原因がある。いや、文明国家を目指すまちづくりのため、日本はそれまであった日本の古い文化をかなぐり捨ててしまった。明治時代の廃仏毀釈という文化破壊の愚行を、日本は戦後またしても繰り返したのである。

では、まちづくりにおいて文明と文化の共存は可能なのであろうか。可能であるし、可能でなければならぬ。その実例を私はかつてドイツの町中で見たことがある。名前は忘れたが、ドイツ中西部の古い小さな町に立ち寄ったときのことだった。人だかりがしているので近寄ってみると、クレーンが通りに面した民家のファサードを持ち上げていた。持ち上げている間に、古い家屋内部が取り壊され、取り除かれ、そこに近代的な新しい家屋内部がはめ込まれようとしていた。はめ込む作業が終えると、ファサードはふたたび下ろされ、その家の外観は以前と同じ200年前の古民家に戻る。しかし内部はシステムキッチンの備わった近代的で快適な住空間になっている。内部空間は文明の賜物だが、ファサードは歴史的街並みの一部を形成する。私は、文明と文化が見事に共存する実例を見たと思った。

今日、京都では毎年 1000 軒ずつ古い京町家が取り壊されている。取り壊す人々は、住宅展示場に飾られているような新しい近代的な家のほうが住みやすいという。残念だが、彼らは文化ではなく文明のほうを求めているのである。ヨーロッパの家屋構造と日本の家屋構造は違うので、ヨーロッパと同じようにするのは難しいだろうが、京都でも外観だけは古いままに残し、内部空間だけを近代的・文明的にするように工夫しなければ、

いずれ京都の古い街並みは失われ、それとともに伝統的な日本文化もさらに衰退していつてしまうであろう。美しい町、自分の大好きな町があってこそ文化は生まれる。古い伝統的な街並みが日

本文化創出のための基本的な大前提をなしていることを決して忘れてはならない。

(高橋 義人)

5. 危機に瀕した日本文化とその行く末

(ア) 戦後日本の経済成長の表と裏

今の日本人は、かつて三島由紀夫が憂えたような、「無機的な、からっぽな、ニュートラルな、中間色の、富裕な、抜目がない」人間になってしまった。現代人は、戦後の経済成長によってもたらされた近代文明を享受・消費するばかりだが、何か価値のあるものを創造し、社会に貢献しなくては、日本の未来はない。

1970年7月7日、自決の数か月前に三島由紀夫は産経新聞夕刊に次のような文章を寄せた。三島の遺言のひとつと見なされる重要な文章である。

私の中の二十五年間を考えると、その空虚に今さらびっくりする。私はほとんど「生きた」とはいえない。鼻をつまみながら通りすぎたのだ。

二十五年前に私が憎んだものは、多少形を変えはしたが、今もあいかわらずしぶとく生き永らえている。生き永らえているどころか、おどろくべき繁殖力で日本中に完全に浸透してしまった。それは戦後民主主義とそこから生ずる偽善というおそろべきバチルス（つきまとして害するもの）である。

こんな偽善と詐術は、アメリカの占領と共に終わるだろう、と考えていた私はずいぶん甘かった。おどろくべきことには、日本人は自ら進んで、それを自分の体質とすることを選んだのである。政治も、経済も、社会も、文化ですら。

[……]

二十五年間に希望を一つ一つ失って、もはや行き着く先が見えてしまったような今日では、その幾多の希望がいかに空疎で、いかに俗悪で、しかも希望に要したエネルギーがいかに龐大（ぼうだい）であったかに啞然と

する。これだけのエネルギーを絶望に使っていたら、もう少しどうにかなっていたのではないか。

私はこれからの日本に大して希望をつなぐことができない。このまま行ったら「日本」はなくなってしまうのではないかという感を日ましに深くする。日本はなくなって、その代わりに、無機的な、からっぽな、ニュートラルな、中間色の、富裕な、抜目がない、或る経済的大国が極東の一角に残るのであろう。それでもいいと思っている人たちと、私は口をきく気にもなれなくなっているのである。

日本はこれからどんどん下降を続け、「無機的な、からっぽな、ニュートラルな、中間色の、富裕な、抜目がない、或る経済的大国」になり、「このまま行ったら日本はなくなってしまう」と三島は言う。経済的大国であるのに、消えて「なくなってしまう」日本とは何であろうか。三島のいう「日本」とは日本文化や日本人の魂のことではないか。

昭和20年生まれの私の人生は、戦後日本の歩みに重なっている。戦後の日本は敗戦の荒廃のなかから出発した。日本は世界最貧国のひとつで、食べるものはなく、上野の地下道は住む家のない浮浪者であふれ、鉄道駅の前では親をなくした戦争孤児たちが靴磨きをして口を糊していた。上野公園には手や足をなくした傷痍軍人が多数いて、物乞いをしていた。敗戦の混乱のなかで生まれ育った私にとって、戦後日本のこうした暗い光景はいつまで経っても忘れることができない。みな、食べていくことだけで精一杯だった。そんな日本の子どもたちに占領軍のアメリカ人兵士はニコニコしながらチョコレートを与えてくれた。まだ幼かった私の眼にも、アメリカがとても金持ちで

日本がとても貧しいということは明らかだった。

敗戦で荒廃した国を復興させることが戦後日本の最大の目標だった。当然、日本政府が目指したことは日本国民を飢えで苦しめないようにすることだった。経済成長することが日本の国是だった。

1960年、内閣総理大臣に就任した池田隼人は所得倍増計画を公約として掲げた。10年間で国民の所得が倍増することなど、誰にも本当の公約とは思えず、これは、所得倍増を目指すという努力目標だと受け取られた。池田は首相になる10年前の1950年に大蔵大臣として「貧乏人は麦を食え」と発言して物議をかもしており、首相になった1960年にも、所得倍増計画を胡散臭いと思うマスコミによって昔の発言が再三取り上げられた。しかし戦後の記憶の新しい私に、「貧乏人は麦を食え」発言はそれほどひどいものと思われなかった。戦後5年しか経っていなかった1950年当時にはまだ十分に食べられない人たちが日本には多数いた。戦後10年以上経っても、小学校にまだ給食制度はなく、昼休みには弁当をもってこられず、教室のなかでうつむいて座っているクラスメートもいた。麦飯が弁当の子も何人もいた。そういう状況下で、麦だって食べられればいいというのは正直な発言だと思われた。

池田隼人が首相になってから10年後の1970年、日本は本当に所得倍増をなしとげ、世界有数の経済大国になり、「人類の進歩と調和」をうたう大阪万博が開催された。

その年、三島由紀夫は自衛隊市谷駐屯地で割腹自殺をとげた。死ぬ数か月前に彼は、このままでいけば、日本はやがて「無機的な、からっぽな、ニュートラルな、中間色の、富裕な、抜目がない、或る経済的大国」になるであろう、とまるで遺言のように言い残した。「人類の進歩と調和」の真逆になるというのだ。

64年間続いた昭和が終わり、31年間続いた平

成が終わり、令和4年を迎えている今日から見ると、戦後70年以上、日本はただひたすら「からっぽ」にいたる道を歩み続けてきたように見える。三島由紀夫の予言はおそろしいほど当たっていた。戦後の日本は経済的に豊かになることばかり目指し、文化の育成、学術の振興をまるで顧みなかった。令和になった今日、平成の時代が「失われた30年間」であること、日本の長い歴史のなかでも際立って空虚な時代であることが浮き彫りになっている。今の日本には未来を担うべき若い世代の人材が極端に減っている。今の若者の多くはおいしいものを食べ、おしゃれを楽しみ、ディズニールンドで楽しい時を過ごすのを肯っている。彼らは70年前の戦後の貧しい日本では考えられなかった豊かな生活を送っている。彼らは近代文明が提供してくれるものを享受だけで、自分では何も生み出さない。文明が発達し、それを享受するのは結構なことかもしれないが、だがそれはあくまでも受け身の生活である。単なる消費生活である。消費することもたしかに必要だが、しかし人は消費する以外に、何か価値あるものを生み出さなければならない。若い日本人の多くは生産し創造して社会に貢献することを忘れている。かつて若者というものは、海外留学したり山登りしたり恋愛したり学生運動に身を挺したりしながら、自分でも知らないうちに何ものかを生産してきた。そういうことを今の若者は一切しない。価値あるものを新しいものを何も生み出すことがない。今の若者はすべてについて受け身である。自分自身で何ものかをなしとげよう、つくり出そうとはしない。海外留学もせず山登りもせず恋愛もせず学生運動に身を挺もしない彼らに最も欠けているのは血がたぎるような情熱である。そしてそれが、三島のいう「無機的な、からっぽな、ニュートラルな、中間色の、富裕な、抜目がない」日本人を生み出したのである。現代日本の病巣はとても深い。

(イ) 和式生活に育まれた「和魂」

和式の生活様式・行儀作法には日本文化の精髓がある。世阿弥のいう「秘すれば花」である。日本人の礼儀正しさや親切心も、多神教的な宗教心も和式の生活習慣に由来する。その礼儀正しさから微に入り細を穿った美意識も、他者に対する敬意も、宗教的な謙虚さも生まれる。日本人において美意識・道徳心・宗教心はすべてひとつのもので、それが「和魂洋才」の「和魂」だった。ところが日本人は日本人の精神性の原点であるこの和風空間を惜しげもなく唾棄してしまった。はたして我々は、これからも日本文化を生み出せるだろうか。

「無機的な、からっぽな」国。これを生み出したのは、経済成長、文化軽視の道を取らざるをえなかった戦後日本である。だが、日本が取ったこの進路はじつは戦後に始まったものではない。すでに明治政府が「富国強兵」「殖産興業」の名目の下に経済成長一辺倒の政策を取り、それがじつは令和の今日にいたるまで続いているのである。

明治政府のスローガンは3つある。「富国強兵」「殖産興業」「和魂洋才」である。「富国強兵」「殖産興業」はむろん経済振興・軍事力強化を目指している。「和魂洋才」の「洋才」とは西洋文明のこと、「和魂」とは日本文化のことである。日本人の洋装化は「和魂洋才」の端的な一例である。宮中でも洋装化が進み、そのことに疑問を抱いたドイツ人の宮中制度改革顧問モールは、1880年代後半、時の総理大臣伊藤博文に、少なくとも宮中では伝統的な和風衣装を着用した方がいいと進言した。同じく約30年間日本に滞在したドイツ人医師ベルツが、当時日本でも流行りだした洋服のコルセットは医学的に見て日本人の女性の身体に合わないと伊藤博文に説明すると、伊藤は、あなたの言う通りかもしれないが、日本人が和服を着用しているかぎり、西洋人には人形や骨董品としてしか認めてもらえない、と反論した。

おそらく伊藤博文は、服装など所詮外面的なものだ、日本人が洋服を着たからといって、「和魂」がそう簡単に失われるはずはない、と思っていた。だが、はたしてそうだったであろうか。日本人は和服を捨てるとともに、和魂も捨ててしまったのではなかろうか。

和服を捨てた日本人は次に畳のある和式生活

を捨てた。和服と畳を捨てたことによって、日本人は和魂を失ってしまった。国際高等研究所の第12回ゲーテの会「和魂洋才の末路」で佐伯啓思氏が指摘しているように、和魂洋才を追求し続けた日本人が到達したのは何と「無魂洋才」だった。

2021年の東京オリンピックはコロナ禍のなかで開かれ、選手や新聞記者が一般日本人と接触する機会は限られていたが、それでも日本人ボランティアと接した選手・記者のあいだから日本人の接客態度を褒めたたえる言葉が多数聞かれた。自分のコーヒーカップが他の人のそれと間違わないように、自分の名前をカップの上にカタカナで書いてもらったアメリカ人は、それが嬉しくて、カップを記念にアメリカへ持って帰ると言っていた。困った様子をしていると、すぐに誰かが英語で話しかけてくれた、英語ができないとわかると、ボディランゲージで教えてくれた。日本人は信じられないくらい親切である、日本人のおもてなしは世界一であるというのである。

1964年の東京オリンピックで日本人の親切心に驚き感動した外国人の数ははるかに多かった。

明治時代のはじめ、東北地方と北海道を旅行したイザベラ・バードも、日本人の礼儀正しさと親切さに感動している。バードのような感想をもらっている訪日外国人はとても多い。

こうして諸外国で称えられる日本人の礼儀正しさと親切心は、おそらく和式の生活習慣に由来している。

洋間に入るのとは違って、和室に入るときの作法は面倒である。まずふすまの前に座り、引き手に左手をかけて、ふすまを少し開けると、次に右手でふすまの枠を持ち、もう少し大きく開ける。入ったら、後ろ向きにふすまのほうを向き、左手でふすまの枠を半分閉め、次いで右手で閉める。室内を歩くときにも、畳の縁を踏んではならない。座布団を勧められたら、一礼し握りこぶしを床について座布団に上がる云々と、面倒なしきたりが多数ある。そうした和室での様々な作法を通して、自ずから礼儀正しさ、丁寧、細やかさ、他者への心配りが身に付く。

和室にはさらに床の間がある。床の間には神様が降りてくるとされていることを知らない人でも、床の間の前にひざまずけば、そこが厳かにして神聖な場であることは感じるであろう。床の間

だけではない。畳の縁や敷居にも神様が住んでいるとされるため、そこを踏まないようにする心配りが必要である。神様のおられる床の間や畳の縁はつねに清らかにしておかなければならない。日本人にとって清らかにすることは宗教的な行為である。このように和式の生活を送っていれば、別に特定の宗教を信じていなくても、人は自ずから宗教的になる。八百万の神々を日本人は信じているとされるが、日本人のそうした多神教的な宗教心はじつは和式の生活様式に由来している。

世阿弥は「風姿花伝」のなかで「秘すれば花なり、秘せずば花なるべからず」と述べている。ここに日本文化の精髓がある。和室の畳の上に座してお辞儀する日本人の奥ゆかしい姿は「秘すれば花」そのものである。それに対して立ったまますぐに手を差し出し握手する欧米人のフランクな振舞は「秘せずば花なるべからず」である。かつて和式の生活を送っていた日本人は、その秘めた姿のなかに美しい「花」を宿していた。秘めれば秘めるほど花は美しく立ち現われる。秘めることをやめ、あけっぴろげになった途端、花は消えてしまう。そして現代の日本はなんでもあけっぴろげになり、花をことごとく失ってしまったのだ。

和式の生活を捨てるということは、生活の隅々にまで及んでいた薄くて広い宗教心を捨ててしまうことでもある。礼儀正しさ、丁寧、細やかさ、心配りを捨ててしまうことである。日本人において美意識、道徳心、宗教心はすべてひとつのものだった。礼儀正しさから微に入り細を穿った美意識が生まれ、礼儀正しさから他者に対する敬意が生まれ、礼儀正しさから宗教的な謙虚さが生まれた。和式の生活を捨てるとともに、日本人はそれらすべてを捨て去った。捨て去った日本人の心はからっぽの虚無になった。和魂洋才ではなく無魂洋才になった。

かつて三島由紀夫は、日本はやがて「無機的な、からっぽな、ニュートラルな、中間色の、富裕な、抜目が無い、或る経済的大国」になるだろう、日本文化は消えてなくなるだろう、と予言した。それでも戦後日本では谷崎潤一郎、川端康成が真に「和魂」をもった文学を残した。明治生まれの日本画家では横山大観、小林古径、安田靉彦、前田青邨らが戦後まで和魂を描き続けた。彼らの亡き後、いったい誰が和魂を紡ぎ続けるであろうか。上記の作家、画家はいずれも和服を着て和式の生

活を送っていた。ところが今日では、三島由紀夫、平山郁夫から我々にいたるまで、みな洋服を着て、洋風の生活を送っている。こうした我々に、真に和魂をもった日本文化を生み出すことははたしてできるだろうか。

和式の生活が日本人の精神性を育むということ強調し続けた作家がいる。文学作家ではない。映画作家の小津安二郎である。彼は松竹映画会社に特製の座高の低いカメラ台をつくらせ、徹底してローアングル、ローポジションで映画を撮り続けた。小津映画のローアングルは、我々が和室で座ったときの位置である。和室のなかで座ったときに日本人の眼に映じる光景を小津は愛し記録した。それは下から視線である。黒澤明映画をはじめ、たいていの映画では対象は高い立位のアイポジションで撮られる。それに対して小津は低い座位で室内を見る。慈しむようにして見る。するとそこでは、灯りを消した部屋のなかで布団の上に座っている父親と娘の顔が照り映えている。父親の顔は柔和なやさしさに溢れている。娘の顔は若さに輝いている。そして旅館の一室の白い障子には、夜闇のなか、月明かりに照らされて、坪庭の竹の影がほんのりと美しく映っている。うっすらとした闇のなかにももの影が浮かび上がる。陰翳礼讃の光景である。部屋の一隅に置かれた伊万里焼風の花瓶は父親がいびきを立てて眠っている部屋のなかで、ただひとつ神々しい存在感を放っている。

これこそが、我々が和室のなかで座って見るときの光景である。座って室内を見ると、室内にあるすべてのものが存在感を放って見える。父親の顔も娘の顔も神々しい。障子の淡い光も神々しい。床の間の花瓶も神々しい。座して見上げれば、すべてが神々しく見える。それを小津は描こうとした。室内のすべてが神韻縹渺たる靈気を放っているさまを描こうとした。映画『晩春』の主演は原節子でも笠智衆でもない。父親の再婚話も娘の結婚話も、舞台の書割にすぎない。この映画の真の主演、真の主題は、すべてのものが神々しく輝き出す和風空間である。そしてこの和風空間こそ、これまで長いこと日本文化を担い育ててきたのである。そういう気品ある和風空間、世界のどこにも他にない貴重な空間を、戦後の我々はいとも簡単に唾棄してしまった。三島由紀夫のいう「無機的な、からっぽな、ニュートラルな、中間

色の、富裕な、抜目がない、或る経済的大国」日本は、そうやって誕生したのである。

(高橋 義人)

6. Society5.0の構築に向けて京都の智慧をどう活かすか

近未来社会 (Society5.0) を迎える今こそ、人間として具えておくべき教養、すなわちリベラルアーツについて考えておくべきである。これからのスマートシティは、グローバルな枠組みでありながら、自分の生き方を選べる多様なコミュニティ社会であるとよい。京都は長らく同じ場所で都として存在し続け、異質な文明をも受容し、多様な技術の分野で新たな成熟を遂げ、文化を蓄積してきた。次の社会を見通す時に、このような文化首都＝京都の知恵が役立つと思われる。

近年わが国が目標に掲げている**近未来社会 (Society 5.0)**の特徴は、人間が生活を営むフィジカル空間と、ビッグデータが集まった仮想空間を、もっと効率よく連携させようとする構造に見いだせる。現在進行中の**情報社会 (Society 4.0)**では、サイバー (電子メディア) 空間にある情報を人間が自ら選び取り、自分の目的に役立てようとする相対的に見て非効率な社会であるが、少なくとも人間は自ら考え判断する存在であり続け得る。来たるべき**近未来社会 (Society 5.0)**では、フィジカル空間に住む人間は、ものを考えなくても周囲の状況に応じて情報が先んじて入手可能になり、深く考え知恵 (サピエンス) を発揮するに至った人間の特性を奪われてしまうと危惧される。

これはまさに、人類の歴史の中で**精神革命**を経て生まれ、集大成されたギリシャ・ローマの考え方を捨てることになる。ヨーロッパほどの国も、最終的にはギリシャ・ローマの基本的な「真・善・美」の理想、つまり「より良く生きる」ことを目標にしてきたはずなのに、**情報社会 (Society 4.0)**以降の**近未来社会 (Society 5.0)**では、その理想を捨てることになりかねない。ポピュリズム的言えば、サイバー空間で効率よく提示されたことが真であり、少し変だと思われることは確率が低くなり、排除されてしまう世の中になる可能性がある。

西欧における伝統的なリベラルアーツ教育が、ギリシャ・ローマから承継した集大成として中世以降に展開され、近代に至るまで続いてきたのが、近年になって急に途絶えた。その途端に世の中がおかしくなったように思われる。

近未来社会 (Society 5.0)を迎える今こそ、人間として具えておかなければならない教養について考える余地を残しておく必要がある。教養とは生きる糧のようなもので、何かをすぐに産み出すものではないが、アウトカムとして素晴らしい花が咲き、それが実を結んで果実になるような、そういう糧であると捉え、敢えて新しい、もっとシステムティックに機械を駆使する時代においてこそ、その時代を生きる人間は、どういうものを身につけるべきかを考えておくべきだろう。

「文化」と「文明」を対比して見ると、「文化」には人間が考えながら、触りながら創出する側面がある一方、「文明」は普遍性を求められるが故に「文化」よりも大きな枠組み、すなわちグローバルな枠組で展開することになる。それはそれでよいのだが、そういう大きな括りがありながら、スーパーローカルなコミュニティ社会も成り立ち、自分の生き場所を選べるような多様なコミュニティがあればもっとよいのではないか。そして、**スマートシティ**という、これから**近未来社会 (Society 5.0)**へ進んで行く前段階と見なされている**情報社会 (Society 4.0)**に、今から魂を入れておく必要があるのではないか。そのために、**文化首都＝京都の智慧**を役立てることが出来るかも知れない。京都は、本当に文化首都と言うにふさわしい歴史をたどってきた。「文化の創出から人類の歴史が始まった」ように、「文化抜きでは人類の社会は成り立たない」からである。

京都は、平安京が造営された794年に日本の都として誕生した。日本における本格的な都市形成の始まりでもある。そして、平安遷都から明治維新まで、実に千年を超える長きに亘って、京都は都であり続けた。

平安京遷都に先立つ5世紀ごろ、山背やましの地 (京

都)は、中国大陸や朝鮮半島から一村一郷挙げて渡海してきた「**今来の才技**」と呼ばれる秦氏や漢氏など、技術者集団の移住を受容した。それまでこの地は、度重なる河川の氾濫により、ぬかるみだらけの湿地帯で、利用の難しい土地だったが、彼ら**才技集団**が当時の先端的な土木技術で治水工事をやり遂げた結果、平安京造営の基盤が整っていた。また、当時最高レベルの諸技術が移植された山背の地に平安京が造営され、その後千年以上も日本の都であり続けた意義は非常に大きく、やがて『ものづくり文化』を育み『イノベーションの都』に発展する素地は既にでき上がっていた。

京都盆地を航空写真で見ると、北と東西を三山の稜線に囲まれ、3つの支流が合流した本流が開けた南に向かって流れ下る地形になっている。自然に城を成す形勝から、桓武天皇は平安京の造営に当たって山背国の地名を山城国に改めた。平安京は、京都盆地の中心部にあって東西4.5 km、南北5.2 km、面積23 km²の大きさであり、その雛形とされ当時世界最大の国際都市であった唐の長安城に比べると、実にコンパクトな都市であった。

因みに、長安城は平安京の3.5倍の広さであり、しかも外周部には外敵の侵入を防ぐための高い防壁が築かれていた。平安京には、昔から一貫して壁などはない。

この「壁がなかった」という事実こそは、京都

が千年にわたって都であり続けることができた大きな理由のひとつであろう。平安京はいつの時代も外敵からの侵入を恐れる必要がなかったのである。歴史を紐解いてみると、世界の多くの都市は異民族などの侵入によって滅ぼされている。しかし京都にはその脅威がなく、そのために長らく同じ場所で都として存在し続けることが可能であった。その結果、多種多様な宗教・学術・芸能芸術・技術工芸を始め、多彩な生活様式が華開き、伝統と先進が並立しつつ、ありとあらゆる分野で、時代ごとに数え切れないほどの天才、異才、偉才を輩出し、文化首都としての基盤を形成してきた。

5世紀に移住した技術者集団は、農耕、土木、建築、養蚕、製鉄、製紙、陶芸など、当時の世界で最先端の技術を京都の地にもたらした。そしてそれらの技術はこの地で培養され、熟成・洗練されて和風文化が華開く。さらに時代が下って16～17世紀になると、オランダ、ポルトガルの南蛮文化が京都に渡来する。京都はその異質な文明をも受容し、美術工芸や自然科学ほか、多様な技術分野で新たな成熟を遂げるに至った。

京都という、世界で言えば西ローマ帝国に匹敵する長い歴史の中で、同じ地域に留まって人類の活動を積み重ね、文化を蓄積してきた社会は、次の社会を見通す時に役立て得るのではないか。

(西本 清一)

あとがき

5年間の研究会を振り返って

フランスの南西部ドルドーニュ県、ヴェーゼル溪谷のモンティニャック村近郊にあるラスコー洞窟に、先史時代（約17,300年前）のクロマニヨン人（現生人類の先祖）によって描かれた、ほぼ2,000点に及ぶ色彩鮮やかな洞穴壁画が残っている。赤色の赤鉄鉱（ヘマタイト）、黄色の褐鉄鉱（リモナイト）、緑色の孔雀石（マラカイト）、青色の藍銅鉱（アズライト）など、天然にある美しい色の原石を、円盤状の大きな石の表面につくられた凹みの中で粉碎し、獣脂、獣血、樹液と混ぜ合わせて多彩な色の顔料を調製していた。さらに、顔料を加熱して色調を変化させていた痕跡がある。壁面に数多く描かれた多様な躍動感のある動物は、人類が生きていくための糧であり、赤色顔料の多用は、血と同じ色であり、エネルギーや活力を赤色に感じ取っていたのかも知れない。この洞穴は、大自然の中で生きていた原始の人類が道具を使ってものをつくり、さらにその道具を使って新たな道具に加工する『原始の文化創造工房』だったのであろう。色を識別し使いこなす能力を備えていた人類は、『ものづくり』を通じて自ら構成した社会を発展させてきた。

やがて、科学革命の幕開けに登場したイギリスの自然哲学者アイザック・ニュートンは、我々人間に色相感覚を生じない無色透明の光（白色光）をプリズムに通したとき、それぞれの波長の違いに応じて7色（赤・橙・黄・緑・青・藍・堇）の色相感覚を生じる光に分かれることを実験で示した。中世の大学では、音楽が自由七科(Liberal Arts)のひとつに数えられ、幾何学や天文学と同様に、数学に関連した科目と見なされていたことから、ニュートンはプリズムで分けた光を音階に擬えて7色で表した。実際には、これらの代表的な色と色の間に無数の連続した帯状の色群が認識され、これをスペクトルと名づけた。ニュートンは、プリズムによる分光とは逆に、7色に分けた光を再びレンズで集光して混合すると、元の無色透明な光に戻ることも実証した。

ニュートンの実験結果は色覚異常のない大多数の人たちが自分の眼（視覚）で観察して確かめ得る事実であったため、「白色光をプリズムで分光すると、赤色の光から堇色の光まで、それぞれ波長の異なる7色の光に分かれる」という説明が広く信じられてきた。筆者自身も物理化学の講義、そのように教えてきた。

物質を照らす光が吸収・反射・屈折・回折などの物理作用を経て人間の眼に入り、レンズの役割を果たす水晶体から網膜に到達するまでの過程は比較的シンプルな物理学現象として理解可能である。しかし、光による網膜の刺激がトリガーとなり視神経が脳に伝える神経情報は、どのように処理され、色覚を生じているのかは、シンプルな物理学体系とは異なり、生物学や心理学をも包含した認知科学の世界の出来事であり、その全体像は漸く明らかにされつつある。

網膜にあつて色覚機能を担っている3種類の錐体細胞（赤錐体・緑錐体・青錐体）にはフォトピン、また形状知覚機能（明暗知覚機能）を担っている桿体細胞にはロドピンという色素タンパクが含まれ、それぞれ光の波長に応じて異なる感受性を示す。錐体細胞が光の波長に色をつけているわけではなく、視神経を介してシグナルを脳の視覚連合野に送り、そこで色相感覚を生じているのである。このような視覚の仕組みを俯瞰して考えると、どうやら光には色がついておらず、四季折々、実に多くの色彩を楽しめる日本の風景は有彩色に溢れているのではないらしい。人間の色覚システムが自然界の物理作用と協働し、美しく彩色して見せているだけらしいのである。

人間の中には、外部から五感に入るある刺激に対して、通常感覚以外に別の感覚も同時に反応する共感覚（シナスタジア）の持ち主が希にいて、色聴の事例が最も多い。イギリスの哲学者のジョン・ロック（1632-1704年）は、「ある日、学問好きの盲人が緋色とはどんなものか解ったと自慢した。トランペットの音のようだ」と語った逸話

を紹介している（1960年）。イギリスの眼科医トマス・ウルハウスは、音で色覚が誘発される盲目男性の症例を世界で初めて医学雑誌に発表した（1710年頃）。ドイツの文豪ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ（1749–1832年）は、ニュートンの解釈に異を唱え、色彩論（1810年）を著して、色覚とそのほかの感覚との対比について詳しく論じた。イスラエル生まれのバイオリニスト、イツァーク・パールマン（1945年–）は、G線でBフラットを弾くときは深緑色、E線でAを弾くときは赤色を感じる、と述べている。

東京生まれで京都市育ちの物理学者の朝永振一郎は、「物理学の世界では、我々の日常の世界のように、色とか、温かさとか、冷たさとか、音とか、そういうものはなんにもない。そのほかもろもろの自然の魅力になっているものが全部振動数であるとか、走りまわっている運動のエネルギーとか、そういうものに物理学の世界ではなってしまう。ですから物理学の方法で、実験で調べると非常に索漠としたそういう世界にぶつかってしまう。このことをゲーテは詩人らしく非常に嫌った

わけです」と述べ、科学の本質を明かしている（「物理学とはなんだろうか」1979年）。

人類は、道具をつくり使いこなす「文化の創造」に始まり、大自然の一部として生きる、そして考える存在として、数々の思想、宗教、学術、芸術、技術ほかを創造し、今日まで世代を超えて人類の文化価値として承継・共有してきた。その道程にあって、人類は文化に潜む普遍要素に気づき、「部分」を体系化して「全体」に仕上げ、文明化にも成功した。

「日本文化創出を考える」研究会を場にした5年間の自由闊達な複合型対話活動を通じて、多くの気づきや学びが得られた。後半の2年間には、新型コロナウイルスによる世界規模のパンデミックに遭遇した。それは、人類に意識革命を迫る「自然に還れ」という自然界のメッセージであると感じられた。京都が大切に保持し愛してきた『自然と融和一元化する文化の風土（エートス）』を顧みるとき、このメッセージをなんの違和感もなく受容できると思う。

（西本 清一）

2017年に私が所属している京都大学こころの未来研究センターは、設立10周年のイベントを開催した。記念行事としてはいささか特殊なことだったのかもしれないが、若手～中堅までの研究者がこれからの研究の展望を踏まえて発表をさせてもらうという場になった。私は文化心理学の立場から、日本の農業地域や企業文化に関連する研究の展望を述べ、日本の地域文化というものが心に与える影響を検討していきたいということ話を話した。発表の後、会場におられた長尾真先生が声をかけてくださった。「今度日本文化に関わるとても大切な研究会が立ち上がるから、内田さんもぜひ参加するといい。勉強になるし、世代を超えた意見交換が必要なんだ」と仰ってくださった。それがこの研究会であった。

研究会は近年の大学の空気感にはない、アカデミック・サロンともいえる場所であり、けれども決して社会的現実から乖離しているわけではなく、むしろその逆で、社会実装に向けた丁寧で極めて重要かつ現実的なことが論じられた。そして常にアカデミックならではの視点が提示されていた。こうした場はきつとかつてはあちこちに

存在していたのだろう。

5年間の間に私は1度、スタンフォード大学先端行動科学研究所のフェローとなり、研究会を1年ほど離れていた期間があった。驚いたことに、スタンフォードの研究所においても「アカデミック・サロン」の構築にかなりの時間と経費が投資されていた。世界各国から集められてきた様々な分野の研究者たちに課されたタスクは「毎日一緒に食事をし、どんなことでも話し合うこと」だった。シリコンバレーの先端ではクリエイティブなアイデアが日々生み出されているというが、もしかしたらこうしたところにその基盤があるのかもしれない。

しかしながらこの研究会でも頻繁に議論になったように、アメリカ的なクリエイティビティと文明の拡大が、私たちの社会の持続可能性を危うくもしている。そうした中で日本から「文化」や「こころ」について発信していくことは、今世界の中で求められているのではないだろうか。

目の前の目的を達成することが評価されがちな、短期的な研究志向に向かっている日本の高等教育・研究環境において、「創造と想像」の双方が

豊かになるような議論をしていく「場」の存在が失われているのだとすれば、それをこれから再構築していくことは必須なのではないかという使命感をもつに至った。

幸福感についての拙著をお送りした際、長尾先生が一通のメールをくださった。「イタリアの小さな村の物語をテレビで見えておりますが、小さな村のささやかな生活の中に充実と満足を感じている人々の幸福な日常があり、現代文明の中にいる我々にとってはある種の羨望の社会のようにも見えます。日本の現状は満ち足りて却って不満だということかもしれないですね」という趣旨で

あった。この研究会では、文化が日常的なささやかな習慣や人々のやり取りの中で、「生きる意味」をもたらしてくれること、あるいは時には「ハレの日の」華やかで大きな喜びとエネルギーを与えてくれるものと気づかせていただくことができた。「巨人の胸をお借りして」、素晴らしい先生方のお話を聞かせていただき、意見交換ができたことに心から感謝している。国際高等研究所の皆様にもこのような場をいただいたことに、御礼を申し上げたい。

(内田 由紀子)

2017年より5年間、本研究会に参加させて頂いたが、参加のお声かけを頂いたのは元京都大学総長の長尾眞先生であり、私の同僚の内田由紀子教授とともに参加させて頂くことになった。研究会中には、長尾先生、西本清一先生、徳丸吉彦先生、高橋義人先生という知の巨人ともいえる碩学の先生方の議論に圧倒され、私は研究会メンバーとは名ばかりで、当初は一言も発言することができずに帰るばかりで、研究会に全く貢献できずに申し訳ない気持ちで一杯だった。知識提供などで貢献できなければ、せめて先生方のご発言から少しでも知識を学び取ろうと、必死に議論に食らいついていった。

研究会後には、長尾先生と二人で電車に乗って帰ることが多く、道中、長尾先生の昔話を楽しく聞かせて頂いた。また、精神論や心構えのようなお話も多く、(なれるかどうかはさておき)いつかこのような立派な人物に自分もなりたいたいものだと憧れた。

長尾先生は、「20世紀は情報の時代だったが、21世紀は心の時代だ。心を大切に作る社会になってほしい」と口癖のように仰っていた。長尾先生のお言葉を自分なりに解釈し、模索を続けるうちに、古文書研究者でありながら、文理の壁を越えて、人工知能などの理系の研究開発をするようになった。さらに、心ある優秀な科学者たちに出会い、彼らと「サイキ・ナビゲーション・システム」

(PNS: Psyche Navigation System) という未来型の幸せのテクノロジーを開発することになった。

2021年5月には、サイキ・ナビゲーション・システムの開発構想の記者会見を京都大学で行い、

その後、ノーベル賞受賞者、宇宙飛行士、世界陸上メダリストなどの先生方を招聘し、公開シンポジウムを開催した。そのシンポジウムの終了後、我われの船出を見守るようにして、長尾先生はこの世を旅立たれた。

長尾先生のご逝去後には、研究代表者の西本先生から何度も個別のご指導を頂き、大変貴重な勉強の機会となった。そうしたなかで内閣府に提案したビジョン「2050年までに、こころの安らぎや活力を増大することで、精神的に豊かで躍動的な社会を実現」は、内閣府ムーンショット型研究開発制度の第9目標に選ばれた。

「人類が古代から積み重ねてきた叡智を最先端科学と融合することで、人々を幸せに導くテクノロジーを開発する」

馬鹿の一つ覚えのようにあちこちで叫び続けているうちに、次第に共感して下さる人が増えてきた。「心が大切だ」、「文化が大事だ」と毎回熱く語っておられた、本研究会の先生方のパッションを、1つの形にすることができたように思う。

2022年度から、この情熱を共有してくれる仲間たちとムーンショット研究開発チームを組織し、大規模かつ長期的な研究開発を本格的に進めていくことになる。この5年間、本研究会で修行をした成果をしっかりと発揮して、未来社会の人々が少しでも幸せになれるよう、テクノロジー開発を通じて貢献していきたい。

最後に中国の仏教僧である道綽(562-645)の『安楽集』一説を引用して締めくくりたい。

「前に生まれん者は後を導き、後に生まれん者は前を訪え。」

本研究会で先生方から預かった叡智を、微力ながら次世代へとお伝えしていきたい。研究会の先生方と、国際高等研の事務局の皆様方に心より御

礼申し上げたい。

(熊谷 誠慈)

京都の誇る陶芸家・河井寛次郎は「陶技始末」のなかで「片手は皿で、両手を合わせると椀になる」と書いている。太古の昔、人類は左手を広げ、その上に食物を置き、右手でそれをつまんで食べていた。また両手を合わせて水を汲み、飲んでいった。そうやって身体が拡張されて皿や椀が生み出されてきた、工芸品は使われるためにこそあったのだ、というのだ。文明と文化の関係を考えると、これは忘れてはならないポイントである。

食事のための道具としての工芸品。これは文明に属している。他方、美術館のなかに飾られ、使うのがもったいないくらい美しい工芸品は文化と見なされる。工芸品の出発点は生活の道具、すなわち文明にあった。ところが人間は単なる道具では飽き足らず、それを少しでも美しいものに高めようとして文化を創造した。つまり工芸品は文明であると同時に文化なのである。

工芸品の美しさが称揚されるとともに、工芸品は次第に美術品、芸術品になっていった。ひとつの茶碗が10万円もする。100万円以上するのも珍しくない。そのように高価な茶碗を生活に使うわけにはいかない。こうして生活の道具を生み出す文明と芸術品を鑑賞する文化は次第に分離していった。

しかし本来、両者はひとつだったのではないか、ならば、その原点に立ち戻ろうではないか。それが、河井寛次郎が属した民藝運動の主張だった。文明と文化の関係を追求してきた本研究会にとって、民藝運動のこの精神はじつに重要な意味をもっている。民芸運動が重視したのは人間の生活だった。民藝運動の創始者だった柳宗悦は、生活道具としての民藝品に「用の美」を見いだした。「用」とは機能である。文明が求めるものである。他方、「美」は文化である。その用と美、文明と文化が民芸品では一致している。ならば両者の一致を目指す民藝運動を発展させることによって、日本人の生活をもっと豊かにしようではないか。柳宗悦はそう提唱した。

職人にとって用と美の一致は当たり前のことである。職人は別に「芸術家」として崇められた

いなどと思っていないからだ。ところが今日、そのように謙虚な職人がつくった工芸品はあまり売れない。高く売れるのは「芸術家」の作品である。そして巷では、近代の大量生産システムによって、実用に耐え、見た目も悪くない工芸品がわずかに100円で多量に売られるようになった。そうになると名もなき職人の工芸品は売れず、彼らは口を糊することができない。柳宗悦や河井寛次郎の理想を達成することは今日ではとても難しい。

用と美の分離は近代が陥った如何ともしがたい宿命である。工芸品を芸術品としていたずらに高価にしたのが文化であるとすれば、大量生産システムによって職人を駆逐しているのは文明である。こうして我々は大量生産された安物の商品のなかで一見すると裕福に見える生活を送ってはいるものの、真に見事な美しい工芸品は美術館のなかでしか見ることができなくなってしまった。暮らしのなかに美や文化が欠落した、本質的には安っぽい生活になってしまった。それが、三島由紀夫のいう「無機的な、からっぽな、ニュートラルな、中間色の、富裕な、抜目がない、或る経済的大国」に生きる人々の我々の現実である。

様々な学部、研究所の出身からなる参加者で構成された本研究会は、学部の壁を越えたまことに学際的な研究会だった。こういう研究会は今から30~40年前の京都大学にはしばしばあった。正式な研究会ではない。場所はだいたい祇園か先斗町だった。みなが行きつけの飲み屋に行くと、他学部、他研究所の人たちがすでに何人も来ていて、本研究会で扱ったようなテーマ、文化とは何か、文明とどう違うか、今の日本は本当に平和か、心が豊かとは何かといったテーマについて、酒を飲みながら、みな好き勝手に話すのである。とても楽しかった。そういう場は東京にはほとんどなく、ぼくは京都大学に来てとてもよかったとつくづく思った。

しかしそういう談論風発の空気は、大学設置基準の大綱化とともに次第に失われてしまった。祇園や先斗町に飲みに行くことも目立って減った。みな、大学の雑事に追われるようになってしまっ

たからである。

「日本文化創出を考える」本研究会には、そうした京都大学の昔なつかしい雰囲気も多少なりとも復活していた。刺激に満ちたやりとりがあった。そこは祇園でも先斗町でもなかったが、13年

前まで在籍していた京都大学の空気が思い出されて、たまらなくうれしかった。学問というものは、本当はこういう談論風発のなかからこそ生まれるのだと改めて思った。

(高橋 義人)

私は、この研究会の唯一の東京人であるが、音楽に関しては、若い頃から京都に親しんできた。地歌・箏曲の演奏家・研究者で京都當道会会長であった津田道子師が『箏の基礎知識』(1983年、音楽之友社)を出版する際にはお手伝いをし、その縁で、養女の津田利子師(祇園で柳川三味線の名人と言われた方)から見せて頂いた柳川流の楽譜を調べるために、自分でも柳川流の曲を柳川三味線で弾いてみるようになった。その後津田道子師が出版された『京都の響き 柳川三味線』(1998年、京都當道会)は、この音楽の再活性化が企画される時には基本文献となるものである。一方、祇園の方たちの演奏に接する機会もたびたびあった。私が東京で師事していた一中節(京都で生まれた浄瑠璃)の宇治倭文師が祇園でも教えていた関係で京都の方たちの演奏をたびたび聴いたり、祇園祭の囃子の練習を現場で拝見したりした。また東京の国立劇場で開かれた壬生狂言、坂東曲(17ページ参照)、京都の他の声明などの公演に行ったり、CD(とくに京都府教育委員会(編)『京都府の民謡』(東芝EMI、1992年)で京都の民謡を聴いたりしてきた。

このように、私にとっての「京都の音楽」とは、よく知られた音楽だけでなく、京都の各地で傳承されている音楽なのである。私は、1970年代からアジア諸地域の音楽の活性化に関わってきたが、その際に考慮したのは、中心と周縁の区別をなくすことであった。ヴェトナム政府の依頼を受けて、ヴェトナム音楽をユネスコの世界無形文化遺産

に登録する手伝いをした際にも、ヴェトナムの旧・宮廷音楽である雅楽(ニャ・ニャク)だけでなく、少数民族のゴングの音楽、そして、一地域の音楽であるクアン・ホという掛け合いの民謡を登録リストに含める努力をしたが、これも同じ理由からである。

音楽に関しては、5年間の研究会で話題にされたものの、実現できなかったことが四つある。第一は柳川三味線の再活性化(18ページ、29ページ参照)。第二は、京都の竹を音楽のために活用すること(新しい竹の楽器を作り、新しい合奏音楽を作ること。2018年度報告書28-30ページ参照)。第三が、これから入手できなくなる象牙に替わる材料を見つけて、三味線の撥や箏柱を作ること(2019年度報告書7ページ参照)。そして、第四が、京都府内の寺院で鳴らされる鐘(16ページ参照)のリストを作ること、そこには、それぞれの鐘の記述と鐘の響きの録音(これには高度な技術が必要)とともに、鐘が聴こえる範囲、鐘が鳴らされる機会、鐘を撞く人に関する記録が含まなければならない。

これらは、京都府あるいは市町村がそれぞれの文化政策として行い、そこに京都の誇る革新的な技術が加われば実現できるものである。その成果ができれば、それが京都モデルとして日本各地に影響を与えるであろう。これも文化創出の方法のひとつなのである。

(徳丸 吉彦)

付録 「文化首都としての京都を考える」

～未来社会 Society5.0 に先行するスマートシティの文化基盤とは～

京都スマートシティ EXPO 2021 【「日本文化創出を考える」研究会・討論会（京都府公館）】



大槻(国際高等研究所):本日はご視聴いただき、誠にありがとうございます。ただ今より、公益財団法人国際高等研究所「日本文化創出を考える」研究会のパネルディスカッションを開始いたします。本日のテーマは「文化首都としての京都を考える ～未来社会 Society5.0 に先行するスマートシティの文化基盤とは～」と題してお送りいたします。

このセッションは、国際高等研究所「日本文化創出を考える」研究会のメンバーにより開催いたします。最初に、本日の登壇者でもございます、研究会のメンバーを紹介させていただきます。

まずは、中央におられますのが京都高度技術研究所理事長・京都市産業技術研究所理事長・京都大学名誉教授の西本清一先生、続きまして、皆様

に向かって左側より、お茶の水女子大学名誉教授・聖徳大学名誉教授の徳丸吉彦先生、平安女学院大学特任教授・京都大学名誉教授の高橋義人先生、京都大学こころの未来研究センター教授・副センター長の内田由紀子先生、京都大学こころの未来研究センター准教授の熊谷誠慈先生、それからオブザーバーとして、ペンタリンク株式会社の野中明代表取締役役にもご参加いただいております。

西本先生には、研究会の座長をお務めいただいておりますが、本日はセッションのコーディネートをお願いしております。それでは、西本先生、セッションを始めていただきますよう、お願いいたします。

●趣旨説明



西本（京都市産業技術研究所理事長/京都高度技術研究所理事長/京都大学名誉教授）：本日は、このパネリストのメンバーで、スマートシティの文化基盤について考えてみたいと思っています。

スマートシティは、最近よく言われます Society5.0 に先行する取組みと位置付けられています。Society とは、言うまでもなく、人間の社会のことであり、そのバージョン 5.0 と考えるとよいと思います。

では、その人間はどういう歴史をたどってきたのか、そこについてお浸いをしてみたいと思います。

人間の成立は、実は「文化」が成立した時と言えます。「文化」というのは、人間が作り出したものであり、その作り出したものが現れたところで人間というのが成立したわけです。人間革命と言うべきものです。

やがて、その人間は、自分たちが作り出した道具を使いこなして狩猟生活に入っていきます。それを始めたのが、およそ 200 万年前となっております。その人間の歴史の 99.5%の期間をそのようにして過ごしています。非常に驚くべきことであり、人間の歴史というのは、段々と加速しているわけです。

それで Society1.0 の間に、人間は農業技術を発見します。発見と言った方がよいかもしれません。「農業革命」が起き、それによって農耕社会が生まれます。これを Society2.0 と言います。そして、次には「産業革命」が起こって、工業社会 Society3.0 が生まれます。次いで「情報革命」が起こって情報社会 Society4.0 が成立するわけですが、ここに至るまでに私たちが最も注目しているのは、農耕社会の中で余剰の食料を得た人間から「自分はどこから来たのか。そして、どこへ行くのか」ということを考える人たちが生まれてきたことです。これを「精神革命」と呼び、その精神革命の土壌になったのが、都市国家、都市の成立です。

さて、そういう観点からこの京都を眺めてみますと、京都に最初に都市と言えるものができたの

が、平安京の成立です。ヨーロッパの歴史から見ると随分と遅れて都市が成立したわけですが、ここに成立した京都という都市は、延々と千年続いています。京都に住んでいる人たちの意識としては、まだそれに 200 年を足さなければならぬくらいなのですが、このコンパクトな地域に京都という都市が成立してから、それほど長きにわたって人間の営みがあり、そこに多種多様な宗教、産業技術、伝統工芸と呼ばれるもの、それから芸能、あるいは芸術が栄えました。

その結果、京都は文化の土壌を蓄積したわけですが、本日の大きな基本的テーマであるスマートシティを考えるに当たって、その京都の文化性というものがどう活用できるのか、そしてまた、さらにこれから先の Society5.0 の中で、京都の知恵、人間の営みの歴史をどう活かし得るのかということについて、本日、パネリストの先生方に率直なご意見を述べていただきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、最初に熊谷先生にお願いしたいと思います。

●各委員の論点の紹介



熊谷（京都大学こころの未来研究センター准教授）：よろしくお願いたします。熊谷でございます。先ほど西本先生から Society1.0 ～5.0 にかけての説明があり、個人的には Society5.0 の未来についてお話しをしたくて堪らない

のですが、まずはテーマの「文化首都としての京都」について、私自身が仏教学を専門としておりますので、伝統や歴史的な側面から少しお話しできればと思います。

京都という土地は、歴史的にも多様な役割を持ってきたように思います。奈良から京都に都が移って東京に遷都するまでの千年以上、京都は政治的な首都機能を担ってきましたが、必ずしも朝廷の中核がずっと同じレベルで政治的な影響力を保持し続けてきたわけではありません。例えば、飛鳥時代から奈良時代にかけては非常に中央集権的でしたが、平安時代以降は貴族が政治力を保持するようになり、鎌倉時代以降、武家が政治力を持つようになりました。特に鎌倉時代、江戸時

代の頃は、オフィシャルには京都が政治の中心でしたが、実質的な政治力は関東の方に移っていました。そして、明治以降、遷都してからは政治的な中心が関東に移動してしまったわけです。

このように政治的な中心が京都から関東に移っていく中で、「文化」はどうだったのでしょうか。これについては、もちろん江戸や大阪でも「文化」は育っているのですが、やはり京都が中心的な役割を果たし続けてきたように思います。

では、京都という土地がそのように「文化」を生み出し続けてきた源は一体何なのかと考えますと、宗教が大きな源の一つになっているであろうと思われまます。これは日本だけではなく、西洋においても同様で、特に古い時代の芸術は宗教と切り離せない関係にありました。日本の場合も、華道や茶道など日本を代表する「文化」が「道」と言われる限りは、仏道修行と切り離せない側面があると言えます。そのように宗教から多くの「文化」が生まれてきたわけですが、京都は仏教宗派の本山を多く抱えていたことから、新しい「文化」が誕生し続けた一つの土壌になったのではないかと思います。

また、「文化」を生み出す経済力も、大変重要なファクターであろうと思います。平安時代の京都におきましては、藤原家などの貴族が莫大な資金を投入して様々なお寺を建てていますし、室町時代には足利幕府がこれも莫大な資金を投入して、金閣寺や銀閣寺など豪華絢爛な寺院や芸術作品を多数生み出してきたわけです。

それに対して、現在はどうかと言うと、新しく大きな力強い「文化」を生み出す経済力という点では、京都は東京や大阪に勝てなくなりつつあるように思います。実際に、現在の京都は新しい「文化」を大きく創出するよりも、既存の「伝統文化」をいかに保持していくかという役割に留まっているようなところがあります。そのため、このような経済的なハンディがある中で、どのようにして京都が新しい「文化」を創出していくかということを考えますと、単純な言葉になりますが、やはり創意工夫が必要になるのではないかと思います。

私は広島出身ですが、私から見て、京都の人は何にでも付加価値を付けるのが得意だと思います。例えば、和食と言えば京都と言われますが、新鮮な魚という点では地の利がありません。しか

し、魚に様々な工夫を凝らし、様々な技術を入れることで、高い値段を設定できる料理を作っています。これは京都の持つ大きな独創性と高い技術に依るものだと思います。京都という土地は、様々なものに価値を見出して創出する、そういう文化的土壌があるということです。

学術においても、京都は哲学や様々な学術のムーブメントを起こしてきましたが、そうした独創性を活かして、京都の力で、新たな、そして総合的な「文化」を創出することができたならば、政治も経済も含めて、日本全体に新たな活力を与えられるのではないかと思います。ここで一旦、以上でコメントを終わりとさせていただきます。

西本：ありがとうございました。

それでは、続いて内田先生にお願いしたいと思います。



内田（京都大学こころの未来研究センター教授）：改めまして、京都大学こころの未来研究センターの内田と申します。私の専門は心理学ですが、その中でも社会心理学・文化心理学で心と社会の関係性を考えることをテーマに研究

しています。普段の研究は、実験や調査を行い、数字等で確かめながら進められることが多いのですが、「心」や「文化」というものは本当に深い広がりがある言葉ですので、簡単に数字で見つけられるものではないと思っています。そうした中で、私が心理学の立場からスマートシティや「文化都市・京都」を考えていく上で、どのような切り口があるのかということについて、本日はいくつかキーワードを挙げたいと思います。

1つ目は、やはり私たちの心の働きで、それは感情が動くとか、思考するとか、あるいは人に心を寄せる、思いを伝えるなど、心の機能が「文化」によって作られてきたのではないかと思います。人は様々な形でコミュニケーションをとって、自分の思いを次の世代に伝えたり、隣にいる人に自分の思いを伝達したり、共感したり、そういうことをずっと繋ぎながら私たちの「文化」を形成してきたのではないかと思います。例えば「言葉」もそうですし、後ほど徳丸先生がお話し

になる「音楽」もそうだと思いますが、ある時は「危険が迫っている」ということを伝え合ったり、ある時は「この食べ物美味しかった」ということを伝え合ったり、「言葉」や「音楽」、あるいは書籍を残したり、芸術作品を作ったり、様々な機能を通して、私たちの心の中にある思いを伝えてきました。そしてまた、人が作り出した文化的な産物を見ることによって、心を育んできたのではないかと思います。

ですから、私たちの心の働きというものを考える上では、数字的に捉えられるような、あるいは情報的に捉えられるようなところだけではなく、やはり、文化的な精神性が極めて重要なのではないかと思います。つまり、一人ひとりの人間の生き甲斐や生きる価値、あるいは次の世代に伝えていきたいことに対する強い祈りのようなものを乗せていくことが「文化」の役割なのではないかということです。

例えば、コロナ危機の中で、文化芸術活動を制限されるという状況がありました。そうした中で、「楽しみを失った」「人とのコミュニケーションのきっかけを失った」等と感じる人もおられたと聞いています。それは「文化」というものを通して、私たちは人に共感したり、思いを馳せたり、想像力を働かせたり、自分以外の人生について考えてみたりするということであり、そういうことを通して私たちは心を豊かにしながら暮らしているところがたくさんあるのではないかと思います。

そこで、「文化」が育まれるとはどういうことなのかということも考えたいと思います。やはり、街やコミュニティ、場のようなものが、私たちが「文化」を作っていく上ではとても貴重で重要な資源になるのではないかと思います。それは、街では人々が交流し、行き交いますし、そこに様々なランドマークがあり、かつ自然もあって、その中で「食」や「学ぶ」という機会があり、様々なものが場の中に集合していくと思うからです。

そう考える中で、私は現在、心理学の中で「幸福感」の研究をしています。どうしても「幸福感」と言うと「自分はどうすれば幸せに、快適に、便利に過ごせるか」という議論になりがちです。しかし、本来的に考えますと、私たちは場の中で幸せに関連するような考えやアイデアや力などをもらいますし、かつ自分がその場に参加してい

くことによって、他の人の幸せを作り出すこともできるのかもしれませんが、したがって、「幸福」が上手く循環するような、そういう場所を作っていく必要があるだろうと思います。

それがどのような場所かと考えると、やはり、文化的に深い、様々な人の思いが交差するようなところが、そういう場所として働くのではないかと考えています。様々な形で私たちの思いを次世代に伝える、そして育みを与えるような場所を、京都という、歩いていろいろなところを楽しめる範囲にある、そういうコミュニティの中で作っていくことによって、本来的な私たちの生きる力や、何を次世代に残したいかという、先人たちがずっと繋いで考えてきた思いを「文化」というものを通して、街を通して伝えていけるのではないかと考えています。以上です。ありがとうございました。

西本：ありがとうございました。

それでは続きまして、高橋先生にお願いいたします。



高橋（平安女学院大学特任教授/京都大学名誉教授）：高橋でございます。皆様は「文化首都」という言葉をご存知でしょうか。世界にはいろいろな首都があり、イギリスのロンドン、フランスのパリなどは政治首都と文化首都を兼ねています。ところが、政治首都と文化首都が別々の国もありまして、ドイツの場合はベルリンが政治首都で、ミュンヘンが文化首都と言われます。イタリアはローマが政治首都と言われますが、文化首都はフィレンツェ、他にミラノやナポリなども重要です。スペインの場合はマドリッドに対してバルセロナがあります。このように政治首都と文化首都が分かれている国も多く、日本もその中の一例だと思います。政治首都は東京ですが、今や文化首都は京都です。

文化首都と言われるのは、もちろん高度な文化があるということですが、同時に、未だに美しい古都として栄えていること、これが大事です。そして、未だに美しい古都として文化が栄えていると言われるためには、文化や芸術を培う土壌、環境が必要です。パリは芸術の街とも言われますが、

なぜなのか、皆さんはお分かりでしょうか。パリは美しい古都です。美しい古都であるが故に芸術が栄え、芸術が栄えるが故にゴッホやピカソのような外国人がパリにやって来るのです。つまり、街が美しいということが芸術や文化を育てるためには誠に重要なのです。

ですから、私は京都が文化首都であるためには、まちづくりがどうしても欠かせないと考えています。まちづくりの根底にあるのは、一つは古都の風情を守ることです。京都は山紫水明の都と言われますが、それを守るためには、京都三山の眺め、鴨川の眺めを大事にしなければなりません。高い建物を建ててはいけません。そして、古都の街並みを大切にしなければならないので、古い京町家を取り壊してもいけません。そうやって古都の風情を守る必要があります。

もう一つは、歴史の歩みをもっと浮かび上がるようにしなければならないということです。京都にはかつていろいろな藩邸が数多くありました。そこで、そういう藩邸の門構えや看板を復元すればよいのではないかと考えています。あるいは、京都歴史マップのようなものを配布するとか、今はかなり制限されていますが、派手な看板がまだまだ多いので、そういう看板を全廃して、場合によっては看板を提灯で統一してみるとか、そうして古都の風情を出すことが大事だと私は考えています。

古い京都の市街地の写真を見ますと、鉄筋コンクリートの建物が妙に目立ち、それによって古都の風情が妨げられていることが分かります。今はそのように妨げられることが増えています。また、祇園祭の情景を見ますと、古い四条通の様子と比べて、今は看板をかなり外してもらったので少し綺麗になりましたが、もっと外す必要があると思っています。

ヨーロッパの場合はどうでしょうか。例えば、ローテンブルクの街には、小さな看板しか出ていません。大きな看板は禁じられています。こういう小さな看板で店が分かるようにしなければなりません。それがヨーロッパです。

それに対して日本はどうでしょうか。大阪の情景は皆さんもご存知だと思いますが、看板が溢れています。大阪はそれでよいかもしれませんが、京都はそれではいけないと私は考えています。例えば、東京大学の赤門はよく知られていますが、

ここにはかつて加賀藩の屋敷がありました。その古い門が残されたわけですが、これによって歴史が分かります。京都にはそのような門がもっとたくさんあったはずですので、それをもう少し復元できないかと私は考えています。その一端として、尾張屋や西陣の例があります。

また先ほど、提灯の話をしました。提灯があるだけで随分と日本的な風情になります。例えば、大阪と京都で街に提灯を飾ったところがありますが、こういうことを考えていただきたいと思います。例えば、嵯峨野では、昔風の看板が見られますし、提灯が看板の役割をしています。

もう一つ、京都について申し上げたいのは、京都には古い伝統工芸があり、そこから次々と先端産業が生まれてきたということです。友禅染の一種である捺染は、その後、ロームによって通信用LSIのプリント技術に発展しました。仏具の金属加工技術は、島津製作所、オムロン、村田製作所などによって精密機器につながりました。清水焼の原料を精製する技術は、京セラによってファインセラミックを生み出しました。伝統を踏まえることによって、新しいものが次から次へと出てくるのです。

つまり、京都においては伝統と前衛が共存しているということであり、これがとても大事です。それを成し遂げるのは、堀場製作所の創業者であられた堀場雅夫さんが言われた「おもしろおかしく」という精神だと思います。それを突き詰めていくことによって、京都の古い伝統技術から新しいものが生まれてくると、そのように考えています。以上でございます。

西本：どうもありがとうございました。

それでは続きまして、徳丸先生にお願いしたいと思います。



徳丸(お茶の水女子大学名誉教授、聖徳大学名誉教授)：徳丸でございます。私は音楽学を専攻していますので、今日は聴覚に関わる文化についてお話をしたいと思います。

音楽は人間が作ってきた「文化」の一つです。京都には長い歴史を持つ雅楽、能楽、歌舞伎、それに室内楽である地歌、箏曲、尺八な

どの三曲という伝統があります。また、西洋音楽に関しては、管弦楽、合唱、吹奏楽も活発に演奏されています。しかし、これらの音楽は、多少の違いがあっても、日本の他の地域と共通するものです。これらを私は、今「大きな音楽」と呼ぶことにします。

一方で、人々が文化的な生活を過ごすためには、これらの「大きな音楽」、そしてマスメディアやビデオやCDで容易に入手できるような音楽だけでは十分ではありません。確かに20世紀の日本では「文化国家あるいは文化都市であるためにはオペラ劇場がなければならない」という議論がありました。そして、その結果、東京にオペラの上演を目的とする新国立劇場が完成し、今ではそこでオペラ歌手の養成も行っています。

この考え方は、一つの「大きな音楽」様式を世界中に普及させようとする全体主義的な発想です。これから、恐らく京都でも「京都を文化首都にするためには、国立のオペラ劇場、あるいは京都府立のオペラ劇場をつくらなければならない」という意見が生まれるかもしれません。しかし、私はこの考え方に反対です。これは、あるものを中心と考へて、他のものを周縁に追いやるという発想です。人々の文化的な生活は、こうした「大きな音楽」がなくても成り立っています。ですから、「大きな音楽」よりも、それぞれの地域に結びついた多様な音楽が生きた伝承として伝承されること、これが必要だと考へます。

京都を例にすると、すぐに思いつくのが「祇園囃子」「壬生狂言」「六斎念仏」などです。これは特定の地域、そして特定の時期に結びついたものであり、音楽としては互いに異なっているから面白いのです。もちろん、こうした芸能は文化庁によって重要無形民俗文化財に指定されています。しかし、指定されていない文化財もたくさんありますし、また、伝承者が大切にしているものもあります。そういうものも重要視していかなければなりません。

そのためには、それぞれの伝承者が京都のどこかに集まって、自分たちの芸能を外に紹介するという試みをしなければなりません。私が京都の芸能を聴いたのは主として東京です。東京でそれを聴くことができたことにより、それが京都の人にも刺激を与えることに繋がりますし、あるいは、宮崎の芸能が東京で上演されることによって、そ

の結果が宮崎に反映されます。伝統芸能にはそういう面がありますので、それを考へたいと思います。

それから、普段から聞いているのに、音楽として意識されない音があります。その典型がお寺の鐘、いわゆる梵鐘です。梵鐘の響きは実は複雑で、一つずつ異なっています。鐘は1つの音で構成されているのではなく、その上の倍音によって構成されています。その結果、音色、音の大きさ、そして余韻の伸び方、これは鐘によって違いますので、人々は鐘の音を聴いて、どこのお寺の鐘かということを知っていました。

第二次世界大戦の末期には、武器を作るために多くの梵鐘が外され、軍に供出されました。私は東京に住んでいましたが、近所の寺院の大きな鐘が軍に持って行かれたのを覚えています。その結果、朝も夕も聴こえていた鐘の音が全く聴こえなくなりました。戦後、かなり経ってから、多くの寺院が努力をして鐘を作りました。現在でも多様な鐘の響きを、東京でも京都でも聴くことができますが、戦後に作られたものが多いのです。

そのような鐘は、日本の楽器としては最も古く、しかも古代から現代まで途切れずに使われてきました。鐘の響きを音楽として聴くというのが、日本人の感性、あるいは音楽性でした。しかし、油断はできません。今、こうした音楽性を持たない人が増えていて、そのために地域によっては除夜の鐘を撞くことが制限されています。私が調査したところでは「わが家に受験生がいるので、お寺の鐘を撞かないでください」と頼んできた親がいたそうです。京都でそういうことが起こらないように、皆様の力で注意してほしいと思います。

古来、人間は自然の音も音楽として聴いてきました。ウグイスやヒバリなどの声、あるいはセミやスズムシの声も音楽として聴きました。竹の林を吹く風の音も、川や海の音も音楽として聴きました。神社にお参りをする時の玉砂利を踏む音もそうです。これらの音は、日本の音楽だけではなく、他の国でも使われています。ただし、重要なのは、人間が放っておいたら、こういう響きがなくなるということです。

結論としては、次のように申し上げたいと思います。第一に「大きな音楽」だけが「文化」であるという考へを改めること。第二に、京都の地域がそれぞれ伝承してきた音楽を「文化」と考へ、それらを互いに知ること。そのためには、土地と

時期に結びついた音楽を切り離してでも、互いに知る仕掛けを作る必要があると思います。第三に、音楽の概念を広げ、音楽を人間が組織づけた音と考へて、風の音、玉砂利の音もそこに含めることです。こうしたことに成功すれば、京都は「文化首都」として、多くの地域にモデルを提供することができると思っています。ありがとうございます。

西本：どうもありがとうございました。
続きまして、野中さんをお願いいたします。

野中（ペンタリンク株式会社代表取締役）：野中



でございます。私は京都の西陣織を代々やっております、ある意味では、産業分野からお話をするために、本日はここに寄せていただいていることとなります。

今、私たちは、桑と蚕と絹糸という部分に先端技術を導入して、

新しい絹織物、新しい織物文化を考えようと、いろいろと研究をしています。

産業の変遷を考えますと、Society1.0の狩猟採集社会から、現在は工業化社会が情報化社会に移ってSociety4.0に至っています。その中で西陣は、農耕社会から絹織物の歴史が始まり、現在の情報化社会まで、京都という土地で変遷を繰り返してきました。

そういう意味で、このスマートシティエキスポに対して、京都の「文化」がどうあるべきかという提示をしなければならないということで、本日、皆さんのお話をお聴きしておりましたが、そこで大事なのは、産業社会がこれからどのように変遷していくのかと考えた時に、今の産業社会が実際に動いている状態が、生活の質、社会文化の質に対して興味を持ち始めたということです。いろいろな社会的現象や科学的な情報等、多くの情報が、一人ひとりの社会に深く関わってきたわけです。そのため、それを人々ほどのように分析、解析して捉え、それぞれが意思決定をして、将来に向かって、どう社会を組み立て、生活を組み立てていくかということが大きなテーマになると思います。これが、スマートシティエキスポが持っているテーマだと私は理解しています。

そこで、この「文化」という問題が重要になる

と思いますが、その中で京都について考えますと、この歴史都市が様々な歴史的変遷を繰り返しながら、日本の中心として、また、文化都市として今に至っていることは、文化の創生に関して大きなポテンシャルを持つ、大事な都市ではないかと思われます。

私のこれからの研究等に関しましては、どのように自分で考えるかという意志決定が重要ではないかと考えており、今、先生方のお話をお聴きして、非常に参考になったと思っております。オブザーバーとして、一言意見を述べさせていただきました。ありがとうございました。

西本：ありがとうございました。ここまでのところは、各パネリストを指名させていただいて、人間社会の中心にいる「人間」というものが何かということを踏まえながら、社会の成り立ちについてご意見を頂きました。特に我々が大きく注目したのは、都市が形成されるという、その出来事で、結果としてその都市にいろいろな役割を担う人たちが現れ、その中に精神性、抽象的な考えを巡らせながら思想を造ったり、そして人間の行動を割り出していくという、そのようなことをする領域が生まれたということで、これが実はその後の社会をつくる上での技術的な革命の基盤にもなり得たと、そのように考えているわけです。

●自由討論

西本：そこで、次のセッションでは、各パネリストの方々に自由にご発言いただこうと思うのですが、私の方から3点に絞ってお話を伺いたいと考えております。

1番目に設定しましたのは、「文化」と「文明」です。人間の歴史の始まりは、人間がものを作り、その作ったものを「文化」と考えた、それが出発点です。そして農業という、言わば飢えない仕組みを考え出したところから余剰の食料が生まれ、その結果、ものを考えるということを始めたわけです。そういう「文化」から「文明」に移行していく過程を振り返りながら、今後、来るべき社会にどのように「文化」を動かしていくのかということです。

西洋では、「文明」をCivilizationと言いますが、その語源はラテン語の「社会組織」ですので、

まさに社会を構成する、その組織の一つとして、ギリシャの時代には都市を意味するところの Civitas(キウイタス)、英語読みでシヴィタスという、これに由来しているわけです。Civilization と Civitas は同語源です。実は、この Civitas はギリシャ語では Polis=都市に相当します。そして、ローマ時代の「文明」は「都市になる」とか「都市生活」のことを指しています。都市ができることが、すなわち「文明」だという考え方が伝統的な西洋の考え方です。

つまり、人間が作り出した「文化」が高度に高まった結果として、文明社会が生まれるという考え方ですが、東洋で「文化首都」を形成してきた、この京都の文化基盤が今後、進んで行くであろうスマートシティのパラダイムにどのような機能をもたらすことができるかということが、第1番目の「文化」と「文明」という設問です。

続いて、西欧に由来する考え方の中に、今度は人間として具えるべき教養というものが生まれ、洗練化されたのが「リベラルアーツ」という科目です。リベラルアーツは日本語では「リベラル」から「自由」と言われましたが、アーツは「術」であり、この術には7つあると考えました。まず、「文法学」=言葉の問題、次に「修辞学」=その言葉をどのように操るか、そして「論理学」=筋の通った論理的なものの考え方をするという学問、それ以外に「算術」=計算すること、それから「幾何学」「天文学」それに「音楽」が加わります。この4科を含めた7科をリベラルアーツと言ったわけですが、これから新時代のスマートシティに生ける人間にとって、こうした人間の歴史の中で受け継いできたリベラルアーツ的なものがあるとなれば、どのようなものになるだろうか、そういうことをお伺いしたいと思っております。それが文化基盤をどのように活用して、新しい教養を生み出していけるだろうかということです。

そして3つ目には、スマートシティにおける人間の生活をお伺いしたいと思います。人間の生活とは、まさに人間の生存、そして活動を指しています。その活動を通じて、多様な「文化」が生み出され、やがて成熟していくと「文明」につながっていくわけですが、例えば、来たるべき Society5.0 で言いますと、これまで労働力を行使していろいろなものを作り上げてきた人間が、労働から解放されるであろうという、言わばポジ

ティブな考え方があります。そして、労働から解放されると余暇が増えるので、それを受けた人間がどのように新しい文化創造に繋げていけるのか、そういうことを問題とさせていただいて、新時代に新たに生み出される「文化」とはどのような形になるだろうかということについて、ご意見を伺いたいと思っております。

ここからは順不同ですので、できましたら発言に際しては挙手をお願いしたいと思います。挙手していただきますと、私の方で順番を定めさせていただきますので、よろしくお願いたします。それでは、どなたかご発言いただけますでしょうか。もちろんこの3つの設問はどれから取り上げていただいても結構です。よろしくお願いたします。はい、高橋先生。

高橋:最初に西本先生が「文化」と「文明」を対峙されました。私は、「文化」とは人間の生活だと思っています。「文化」があるということは、生活があること、人間があることを意味しています。例えば、ご飯を食べる時にご飯茶碗を手に取りますが、それが清水焼で「なかなかいい」と思って、食べるだけではなく、ご飯茶碗を愛でたと思います。それが「文化」だと思います。あるいは、食事の時に自分の妻が新しい着物を着てきて、「お前、今日は綺麗に見えるな。その着物のせいかな」「それは西陣織か、なかなかいいな」と思ったとします。つまり、生活が美と結びつくと「文化」になるのです。

他方、「文明」も生活です。西本先生は「文明」を都市と結び付けられました。たとえば、都会では地下鉄の乗り降りにエレベータやエスカレータが必要であり、その方が便利です。都会というのは大きくなっていきますので、大都会になるほど移動に時間がかかります。それで、移動のために鉄道網ができたり、市電やバスや自動車ができたりします。つまり、「文明」は人間の生活を便利にします。自動車にも格好良い自動車があり、格好良いものは「文化」だと思いますが、基本的に生活にとって便利なものは「文化」というよりも「文明」ではないかと思えます。

そして、もう一つ注意しなければならないのは、「文明」が発達すればするほど、私たちは歩かなくて済むようになるということです。階段を使わずにエレベータやエスカレータに乗るなど、あま

り歩かなくてよくなるわけです。それに対して、織田信長は岐阜城に住んでいましたが、岐阜城はちょっとした山でしたので、毎日、織田信長は登山をしていたことになります。そのため、彼は足腰が大変頑強になりました。しかし、今の私たちの生活では足腰が段々と弱っていきます。それが「文明」がもたらしたものですので、「文明」はある意味で人間を劣化させます。そういう問題提起をしたいと思います。

西本：ありがとうございます。他の委員の方はいかがでしょうか。はい、熊谷先生。

熊谷：熊谷です。Society5.0という視点に即して話させていただきたいと思います。Society5.0はサイバー空間とフィジカル空間を高度に融合するものですが、そこには「心」が漏れ落ちていると思っています。物質的な拡張を続けても、それのみで人は幸せになることができないので、やはり「心」という問題についてしっかりと考えていく必要が、Society5.0の先にあると思っています。その際に、「文化」や社会、人の絆というものをしっかりと考えていくという意味で、この「文化」という視点、そして京都の果たす役割というのは非常に大きくなっていくと思います。

それに関連して、スマートシティについては、高度なICTのテクノロジーを用いた、便利で効率のよい、合理的な生活のできる街という、格好良い、スマートという印象がある一方で、これは私個人が思うことですが、やはり何か少し冷たい感じ、寂しい感じがあるように思います。やはり、そこに「文化」や、人との絆、人間らしさ、あるいは人間臭さといったものが感じられないように思うからです。人間は非合理的な生物だと思うので、その非合理的な生物が、いわゆる合理的な街の中に押し込められてしまうと、逆に息苦しさを感じるのではないかと思います。

特に、京都という街は、スマートシティとは対極にあるように感じます。例えば道が狭いなど、必ずしも合理的ではない部分があると思いますが、そういう一種の不便なところから、新しい「文化」や新しい思想、発想が生まれてくるように思います。そういう意味で、あまりスマート過ぎないスマートシティと言いますか、良い塩梅のスマートシティができればより過ごしやすくなる

のではないかと思います。

それから、Society5.0が進んでいくと、圧倒的に時間が増えていきます。先ほど、ギリシャのpolisの話がありましたが、やはりギリシャの哲学や様々な学術が生まれてきた、あるいは中世でいろいろな学問が生まれてきた背景には、貴族やpoliceの市民が圧倒的に時間を持っていたということがあると思います。

したがって、これからいろいろと便利になって、私たちが労働から解放され、時間ができた時に、ただ時間を浪費するのではなく、生き甲斐や、あるいは苦悩というのは決してなくなるので、そういうものもしっかり向き合いながら、思いを凝らしていくと、物質的な発展以外の精神的な発展も、さらに生まれてくるのではないかと思います。以上、補足です。ありがとうございます。

西本：はい。続いて内田先生、どうぞ。

内田：ありがとうございます。先ほどの高橋先生のお話と、熊谷先生のお話を結び付けるようなものがあるのではないかと考えていました。実は先日、ドイツのハイデルベルグの市長と対談する機会をいただいたのですが、その話もスマートシティに関連する議題でした。その時、ハイデルベルグの市長から「京都は、日本の中でも特殊な面があるのではないかと。それはヨーロッパのまちづくりにも通じる場所があるのではないかと」という主旨の発言がありました。そして、その一番のコアとなる部分は、「歩けること」だと言われました。

要は、歩ける範囲に人々が集っていると、何かあった時に皆で話し合いができますし、その信頼関係が街の基本なのではないかと思います。困りがあれば皆で相談する、あるいは鐘の音が聞こえたら皆が集まってきて話をする等、そういうことの中で私たちの生活は成り立ってきた部分があるわけです。しかし、ヨーロッパにおいては長い歴史の中でたくさん育まれてきたそういう部分が、今の日本のまちづくりでは、どうしても疎かになってしまっているように思われます。そういう意味で、歩ける、集える、何かがあった時は人を介して多くの市民と話ができるというような環境を京都から発信すれば、それをロールモデルとして、日本のいろいろな地域で使っていた

だくこともできるのではないかと思います。

高橋先生が「生活の中に文化がある」と言われましたが、それは私も共感するところで、生活の中に美しさや価値を見出すという営みの中で、私たちは「文化」を引き継いできたのだと思います。「これは美しい」「残したい」と思うと、それを大切に扱って、次の世代に伝えていくわけです。これは、生きる意味を見出すことに他ならない作業のような気がして、その意味を見出すためには、与えられたものをそのまま便利だからと享受するのではなく、自分で迷ったり、探したり、寄り道したりしなければならぬと思います。例えば、京都の街は、小さな路地に入って行くと面白いお店があったり、「こんな所があったのか」と思うような場所があったり、そういう発見ができます。この探索して、寄り道して、発見するというのが、本当の意味で私たちにとっての居心地の良さや価値や意味のようなものに繋がっていて、それは単純なスマートとは随分とニュアンスも違うと思います。

ただ決して、スマートシティで目指しているような技術的な方向性を排除するものではなく、そこ上手く共生できるような面もあるように思います。つまり、便利だからと追い掛けるだけではなくて、そういう人が迷ったり、探索したり、寄り道したりすることも上手くサポートしてくれるような、そういうスマートのあり方、スマートの意味自体の言葉の置き換えも、これから必要なのではないかと思います。以上、感想のようになりました。

西本：ありがとうございました。他にはどうでしょうか。

徳丸：西本先生が「自由七科」の中に音楽があると言われましたが、中世の大学でこれを勉強した人は、音楽の響きを聞いたのではありません。ピタゴラス時代から「オクターブは弦の長さの比が1:2の関係」「完全五度は2:3」ということが分かっていたので、数学の比を習うために音楽＝musicaを学んでいたのです。これからいろいろなことの情報入手できるわけですから、必要なのは、異なる人たちがどのような音楽を持っているかという、それを知ることだと思います。それこそが本当にリベラル・アーツです。

日本の社会でも、情報伝達はますます盛んになっています。私自身、子どもの頃はラジオを聞いていました。ラジオはとくに1940年頃から普及しましたが、それがなければアメリカの爆撃機による空襲を知ることができなかったからです。ラジオを通して皆が「警戒警報」と「空襲警報」を聞いていたのです。それが重要であり、ラジオを通して政府の方針も伝えられました。

それで何が起こったのかというと、全体主義です。これからまた機械化が進んで全体主義が起こると、大変なことになります。例えば「英米の音楽を演奏してはいけない」と放送され、それが雑誌にも載ります。まさに昭和19年(1944年)に私が自宅でピアノを弾いていますと、窓に石を投げる奴がいました。英米音楽はいけないものだと思っているので、知らない音楽を聞いて、それがイギリスの音楽なのか、ドイツの音楽なのか分からないまま、ともかく「ピアノは敵だ」と思って石を投げたわけです。

そういうことが起こると、スマートシティも困ります。情報伝達が本当に可能になるのであれば、個人の好みは絶対に阻害されないような、そういうスマートシティをつくるべきではないかというのが私の意見です。ありがとうございました。

西本：ありがとうございました。それでは、高橋先生、どうぞ。

高橋：内田先生がハイデルベルクと京都を比べられたので申し上げたいのですが、ハイデルベルクと京都は、共に山に包まれている町です。山があるために、東京のように大きく発展することができません。京都は結構大きいですが、やはり小さな町なのです。だからこそ、逆に人と人との繋がりがあります。そして、山道を歩きます。ハイデルベルクにも「哲学の道」がありますが、京都の「哲学の道」はハイデルベルクからとったものです。そのように「哲学の道」があり、散策できます。散策しながら、思考を深めることができるのです。

逆に山がない町はどうかというと、例えば、東京がそうですし、パリも山がありません。だだっ広いのです。それで町が段々と大きくなります。東京もパリも非常に大きくなり、そのために交通の便が必要になっていきます。そして、「文明」

が栄えます。

それに対して、小さい町はそれほど交通の便が発達しなくても良いので、「文明」がそれほど栄えていないように見えるかもしれません。しかし、人と人の繋がりがあれば、生活の質が向上し、「文化」がそこに生まれるのではないかと考えています。

ついでに申し上げますと、町というのは水平方向に広がっていきませんが、山があると垂直軸ができます。人間には水平軸と垂直軸が必要です。そういう意味で、パリには何も縦軸がなかったのので、エッフェル塔が受け入れられたわけです。東京にも東京タワーができました。あれがあるお陰で縦軸ができました。京都は比叡山や京都三山があるので、すでに縦軸があると、そのように思っています。

西本： どうも、ありがとうございます。野中さんは、スマート農業とも言うべきことを実践されていますが、何かご発言いただけますでしょうか。

野中： はい。先ほどは言葉足らずでしたので、少し加えたいと思います。

「文明」というものについて私が思いますのは、現在のこの社会の状況はすべてが過剰で、特に工業化社会では生産物が過剰に生産されているということ、それから、情報化社会では情報が過剰に氾濫しているという、こういう時代の中で我々は生きているということです。その一方で、自然界は人間が生きている社会と分断され、地球が大変なことになっています。環境が非常に悪くなっているわけであり、そういうことも言われ始めています。

私はそれを総じて欲望の過剰だと思っていますが、そういう欲望が渦巻いているわけです。一人ひとりの人間の欲望が、自然の中でバランスがとれている場合と、欲望がより集まって、ある一定の空間に過剰に存在する場合があります、多くの場合、都市空間にそういうものがあると思います。それで、その都市には、逆に都市なりの「文化」が発生したりします。過剰なものがあるとしても「文明」であるとすれば、大きな岩石が崩壊して、小さな岩になり、石になって、その中に玉石が出てきて、それを見つけた人間が磨いて宝石にするような、そういう洗練を繰り返していく行為が「文化」を

生み出しているのではないかと思います。「都市文化」というのは、特にそういう傾向があると思います。

そういう「都市文化」の中で今考えなければならぬのは、狩猟採集社会、農耕社会が、西本先生が言われたように、生産性が上がって過剰なものになったところに「文明」が発生し、やがて農耕社会が工業化社会に移って、その工業化社会の中ではたくさんの技術や「文化」が発生したということで、私はもう一度、できれば第一次産業、農業などに再投入して、自然というものにも精密なものを見方をしていくことと合わせてやっていかなければならないと思っています。

そこで、実は「精密農業」という考え方が出てきました。「都市文明」または工業化社会が長い歴史の中で積み重ねられて革新技術が起こり、いろいろなものが出た中から、今は情報化技術が出てきたわけですが、それを農業で考えると、人の観察力よりももっと精密に作物を観察し、情報化技術では人工知能やデータサイエンスという社会で分析して、人間が意味のある、質の高い意思決定をする手助けをするような、そういう技術開発が必要だと思われまます。これは情報機器の発達で実現可能になってきたわけですが、こういうものを「精密農業」=precision agricultureと言います。

一方でトラクターが自動的に動くとか、農民が過酷な農業労働から解放されるということも大事ですが、農民の生活の質を高めるという意味では smart agriculture という言葉が使われるように、情報機器をそういうものに使うだけではなく、もう少し自然観察、生物観察などを中心にした「精密農業」が重要ではないかと考えています。

逆に、そういうものがもう少し洗練されて、純度の高いもの、かつ過剰でない、バランスのとれたものを作り出していかなければならないというのが、恐らく情報革命の先に出てくる Society6.0 の産業社会のあり方ではないかと私は思っています。

西本： どうも、ありがとうございます。他にいかがですか。高橋先生、どうぞ。

高橋： 今、野中様が良い話をしてくれましたが、私も同感です。近代化が始まったのは 16 世

紀頃からかもしれませんが、特に産業革命以降、近代化は大いに進みました。工業化、文明化と言ってもよいと思います。

近代化によって我々の生活はどうなったかという、皆さん分かっておられると思いますが、とても忙しくなりました。そして、忙しくなった結果、我々は自分を忘れたのだと思います。食事を楽しむのではなく、お腹に詰め込めばよいと考えて10分で食べるようになりました。ファストフードがその典型だと思います。

ファストフードの反対語としてスローフードという言葉ができました。それは自分を取り戻そうという意味であり、スローライフを送らなければならないという考えが出てきたのです。野中様が農業のことを話されましたが、農業というのはスローライフです。太陽の歩み、四季の移り変わり、自然の変化、それとともに農業が行われます。農業はスローライフであり、そういうスローライフの中から「文化」が生まれるのです。スピーディな生活の中から「文化」は生まれません。

最初に、近代化になって我々は忙しくなり、自分を忘れたと言いましたが、それは結局、「文化」を忘れたということではないかと、そのように思っています。

西本：ありがとうございます。他の方はよろしいでしょうか。

それでは、最後に本日の議論の総括として、私の方でまとめさせていただきます。

●まとめ

西本：スマートシティと「文化」というのは、果たして議論の対象になるのかと危うんでおりましたが、実に面白いご意見が出てきましたし、今後、これを掘り下げて、我々の研究会でもっと面白くしていこうと思っています。

そこで、頂いたご意見を2つのキーワードでまとめますと、人間の社会の中での労働力としての「人間」と、労働から解放された余暇を持った「人間」という考え方が出てきます。そのように考えると、Society1.0は狩猟採集の社会ですので、一番簡単なのは自然に生えている植物から実を採る方法で、かなり安定的な生活ですが、他の動物

も同じことをしています。それと違って、狩猟に出た集団の人間は、もしかすると1週間~10日間走り回っても食料を手に入れないかもしれないし、その結果、子どもたちを飢えから救えないかもしれません。そういう生活だったのがSociety1.0です。

それが農業を発明します。つまり1ヶ所において、自分たちにとって収穫量も多くて貯蔵できるものを作り始めるわけであり、そこから余剰の食料が得られるようになって、人間は労働から解放され、ものを考える時間を得ました。余暇を得たわけです。

それから、産業革命が起こって工業化社会になっていきます。実は、私は「団塊の世代」と言われる非常に人数の多い世代に属しているのですが、その多い人数が、農村から都会へと集まって来たことにより、都市部に工業社会が育っていききました。今思い出してみますと、その頃「都会の憂鬱」という言葉が流行っていましたが、これは工業社会の中で、農業ではない、ものを工業的に作るという労働力に従事し、そこから得られる対価として収入は増えたけれども、何となく住みづらいという状況を表しています。

さらに、時代が近くなりますと、いわゆる情報革命が起きて、今度はそれによって人間の頭脳も含む労働力以外のものをICT技術で代用することで余暇が生まれるようになりました。本来、それを健康的に運用できれば、もっと「文化」を創造できる社会になるわけですが、この運用の仕方はまだアンノウンなので、果たしてそのような視点で物事が動いていくかどうかは不明です。しかし、是非動かしていただきたいし、ものを考え、その中から新しいものを作っていけると思っています。冒頭で申しましたように、ものを作るという存在が人間であり、作ったものが「文化」ですので、労働から解放されれば、もっと「文化創造」の方にエネルギーを使っていけるであろうと、若干楽観的ではありますが、そのように思っています。

来たるべきSociety5.0の中で、さらに労働力が軽くなると余暇が増えますが、内田先生から先ほどコメントがありましたように、その中で便利なものをバラバラに使ってはだめです。そういう観点から京都の社会を見ますと、世界でも類を見ないほど小さなコミュニティで、毎週1回は

冠婚葬祭でいろいろな人が集まり、顔を合わせています。そういう集まる機能があって、その中から人と人とのコミュニケーションが生まれます。慌てて帰って仕事をするということから解放された人たちが、本当の意味の人間性を見つけ出すことができれば、新しい人間の社会を創造できるのではないのでしょうか。これを、次代を担う世代にメッセージとして伝えたいと思っています。そのように総括いたしまして、このパネル討論を閉じたいと思います。

どうも、本日はありがとうございました。

大槻：以上をもちまして、国際高等研究所「日本文化創出を考える」研究会のパネルディスカッション『文化首都としての京都を考えるー未来社

会 Society5.0 に先行するスマートシティの文化基盤とはー』を終了いたします。ご登壇いただきました先生方、どうもありがとうございました。

本研究会では、けいはんな学研都市の立地機関の皆様と「文化」活用力について検討していくことを目的の一つに掲げ、研究会へのオブザーバー参加の機会を設けております。ご希望がございましたら、国際高等研究所までご連絡いただければ幸いです。

ご視聴の皆様におかれまして、長時間にわたりお付き合いいただき、どうもありがとうございました。

以上

研究会開催経過

第1回

日時： 2021年7月27日（火） 14：00～17：00
場所： 京都高度技術研究所 2階研修室
内容： これまでの研究会を振り返って
2021年度の研究会の進め方についての議論
シルク、養蚕と日本文化について

第2回

日時： 2021年10月12日（金） 13：00～16：00
場所： 京都高度技術研究所 2階研修室
内容： 文化首都としての京都についての考察
京都スマートシティエキスポでの討論テーマの検討

第3回

日時： 2021年10月29日（金） 13：30～17：00
場所： 京都府公館 第1会議室および第5会議室
内容： スマートシティ EXPO に向けてのパネルディスカッションの収録
「文化首都としての京都を考える
～未来社会 Society5.0 に先行するスマートシティの文化基盤とは～」

第4回

日時： 2021年12月7日（火） 13：30～16：30
場所： 京都高度技術研究所 2階研修室
内容： スマートシティエキスポでの公開討論を踏まえた今年度の議論の整理
今年度報告書の構成についての検討

第5回

日時： 2022年3月3日（木） 13：30～16：30
場所： キャンパスプラザ京都 第3会議室
内容： 今年度報告書について議論
5年間の研究活動の総括について

研究会メンバー

代表者

西本 清一 (公財)京都高度技術研究所理事長、(地独)京都市産業技術研究所理事長、
京都大学名誉教授

内田由紀子 京都大学こころの未来研究センター教授

熊谷 誠慈 京都大学こころの未来研究センター准教授

高橋 義人 平安女学院大学特任教授、京都大学名誉教授

徳丸 吉彦 お茶の水女子大学名誉教授、聖徳大学名誉教授

長尾 真 国際高等研究所学術参与、京都大学名誉教授

事務局 (国際高等研究所)

中西 博昭、草野 忍、大槻かほる

※2021年4月1日付のメンバー・所属・役職を記載しております。

「日本文化創出を考える」研究会

2022年3月

公益財団法人国際高等研究所

〒619-0225 京都府木津川市木津川台9丁目3番地

TEL : 0774-73-4000 FAX : 0774-73-4005

<http://www.iias.or.jp/>



〒619-0225 京都府木津川市木津川台9丁目3番地
TEL:0774-73-4000 FAX:0774-73-4005 <http://www.ias.or.jp/>